

国際医療福祉大学審査学位論文（博士）
大学院医療福祉学研究科博士課程

高齢者の居場所としてのコミュニティカフェの検討
—利用者・ボランティア・代表者の3つの視点から—

平成 29 年度

保健医療学専攻医療福祉学分野医療福祉学領域
川口容子

高齢者の居場所としてのコミュニティカフェの検討 —利用者・ボランティア・代表者の3つの視点から—

川口容子

要旨

本研究は、大都市に暮らす高齢者の社会的孤立防止にかかわる課題をコミュニティカフェの意義と期待の観点から、利用する高齢者とボランティア、代表者といった異なる3つの視点より明らかにするとともに、今後の社会的孤立防止に向けた地域実践の示唆を得ることを目的に行った。また、大都市で行われている3か所の調査を通じて、高齢者が住み慣れた地域で安心して過ごすことのできる居場所としてのコミュニティカフェのあり方を探索した。

コミュニティカフェは交流の場であり居心地の良い場となっており、利用者の最大公約数的な捉え方は、“自由さのあるゆるい関係性”としてのつながり、そして“身近で気軽”な場ということであった。また、日々の心身の状態を相談できる場であることも将来の健康や不安を軽減している可能性があった。自由さのあるゆるい関係性と精神的な余裕がある環境やつながりが、高齢者の社会的孤立を防止し、自立への一助になるのではないかと考えられた。

キーワード：コミュニティカフェ、高齢者、居場所、ゆるいつながり

The Community Café as a Place-of-Belonging for Elderly People:
The Perspectives of Users, Volunteers, and Leaders

Yoko KAWAGUCHI

Summary

With a view to identifying the challenges involved in preventing social isolation among city-dwelling elderly citizens, I clarified the meaning and potential of community cafés, as perceived by elderly users, volunteers, and leaders. I also aimed to derive hints for how local community-based practice can help prevent social isolation. In addition, based on a survey of three city community cafés, I explored how the community café can function as a place-of-belonging for elderly citizens, allowing them to pass the time comfortably in the neighborhood they are familiar with.

A community café provides a space to socialize and relax. The users commonly perceived their community café as a “casual and familiar” place where they can engage in “free and casual/loose relations.” I also found that community cafés have the potential to mitigate the users’ worries about their future health by providing them opportunities to discuss their day-to-day physical and mental conditions. I concluded that having free and casual/loose relations and mentally easygoing surroundings and connections, helps prevent social isolation and encourages independence among elderly people.

Key terms: Community café, elderly people, place-of-belonging, loose relations

目次

第1章 序論	1
1. はじめに	1
2. 研究の背景	1
3. 先行研究の概観	2
3-1 居場所概念の整理	
3-2 大都市高齢者の社会的孤立における研究	
3-3 コミュニティカフェにおける研究	
4. 研究の目的と意義	4
5. 研究フィールドの概要	5
5-1 新宿区介護予防・日常生活支援事業	
5-2 新宿区の高齢者社会資源	
5-3 「ほっと安心カフェ」の概況	
6. 本研究で用いる用語の定義	9
第2章 研究方法	11
1. 研究デザイン	12
2. 研究1：コミュニティカフェに関する3つの視点からの調査と検討—ほっと安心カフェにおいて—	12
2-1 調査対象者	
2-2 実施時間と場所	
2-3 調査地域の選定	
2-4 調査地域へのフィールドワーク	
2-5 調査方法	
2-5-1 現場（フィールド）調査	
2-5-2 アンケート調査	
2-5-3 インタビュー調査	
2-6 分析方法	
2-6-1 現場（フィールド）調査	
2-6-2 アンケート調査	
2-6-3 インタビュー調査	
2-7 第三者のレビュー	
3. 研究2：カフェメモリーとカフェだんだんについて—代表者の考え方—	16
3-1 調査対象者	
3-2 実施時間と場所	
3-3 調査地域の選定	
3-4 調査方法	
3-5 分析方法	

3-6 第三者のレビュー	
4. 倫理的配慮	17
第3章 結果	18
1. 研究1：コミュニティカフェに関する3つの視点からの調査と検討—ほっと安心カフェにおいて—	18
1-1 現場（フィールド）調査結果	
1-1-1 小括1	
1-2 アンケート調査結果	
1-2-1 基本集計	
1-2-2 因子分析結果	
1-2-3 重回帰分析結果	
1-2-4 小括2	
1-3 インタビュー調査結果	
1-3-1 利用者の意義	
1-3-2 ボランティアの意義	
1-3-3 利用者、ボランティアの期待	
1-3-4 代表者のインタビュー調査結果	
1-3-5 小括3	
2. 研究2：カフェメモリーとカフェだんだんについて—代表者の考え方—	32
2-1 「カフェメモリー」代表者インタビュー調査結果	
2-2 「カフェだんだん」代表者インタビュー調査結果	
2-3 小括4	
第4章 考察	37
【ほっと安心カフェについて】	37
1. 利用者と利用状況	
2. ほっと安心カフェの位置づけ（利用者）	
3. ほっと安心カフェの位置づけ（ボランティア及び代表者）	
【カフェメモリーとカフェだんだんについて】	40
4. 居場所としてのコミュニティカフェのあり方	
第5章 全体のまとめ	43
第6章 本研究の限界と今後の課題	43
謝辞	
引用文献	44

資料・・ 46

資料1：承諾書

資料2：質問紙調査票

資料3：研究1：インタビュー調査結果カテゴリー概要

資料4：研究2：インタビュー調査結果カテゴリー概要

第1章 序論

1. はじめに

近年、社会の中に「居場所」を見出すことが人々にとっての重要な課題になったといわれる¹⁾。

特に、高齢者は、配偶者や兄弟姉妹、友人などの親密な関係を持っていた人々の罹患や死亡に遭遇する確率が高く、その結果、社会的孤立に陥る可能性の高い時期といえる。中高齢期では、退職後の生活や役割変化によって社会との接点を失い、日々の生きがいを失うことが多い。

アメリカの社会学者 Ray Oldenburg²⁾は、「家庭（第一）」「職場（第二）」という生活上必要不可欠な二つの居場所が続く、居心地の良さを感じる「第三の居場所」の存在が、都市の魅力を左右すると指摘している。都市に暮らす人々にとって、散歩途中に挨拶したり、知り合いとたまたま一緒になって他愛ない世間話をしたり、居心地の良さを感じる場が重要であると主張している。尾崎ら³⁾は、都市部の高齢者の「居心地の良い場」を構成する大きな要素として、挨拶を交わす他者、趣味を共におこなう他者、幼馴染といった多様な人間関係の存在を挙げており、高齢期の人間関係は、健康や生きがい形成に寄与する重要な要因と位置づけている。

身体機能も高い50歳代や60歳代は、学校時代や現役時代の関係、生涯学習、広域で行われている社会活動などで、「第三の居場所」を作り出し、これを維持していくことは難しくない。しかし、70歳代以降と年を重ねるに従って身体機能が低下して自宅から遠い居場所の維持は困難をとまなう。そのため高齢期は、「第三の居場所」を再構築していく必要性を再確認する時期ともいえる。新たに居心地の良い「第三の居場所」を作り上げる場として、最も長い時間を過ごすことになる住み慣れた地域が挙げられる。高齢者が居場所とを感じる場を地域社会が多層的に整えていくことが喫緊の課題となっている。高齢者の居場所を考えるうえで、自己の楽しみだけでなく、他者への貢献や出番を見出せることの重要性も考えられる一方で、自立度が低下していく中で、有用感の喪失やプライドを守りたいといった感情から「第三の居場所」を引退していくことで社会的孤立に向かわせない課題に対する方策の検討が焦眉の急である。

2. 研究の背景と問題意識

総務省統計局によれば、平成28年9月15日現在の65歳以上の高齢者人口は3,461万人であり、総人口に占める割合は27.3%である。主要国において、高齢者の割合を比較しても最も高齢化の進行が早くなっている⁴⁾。

平成22年度の国勢調査においては、一般世帯数が5,184万2,000世帯に対して、単身一人世帯が1,678万5,000世帯と世帯人員別では最も多く、一般世帯の32.4%を占めており、この20年間、単身世帯及び2人世帯が増加傾向にある⁵⁾。このように単身世帯の増加は、社会とのつながりが乏しい社会的孤立傾向をつくりやすく、喫緊に対応を迫る問題として社会問題化している。社会的孤立の状況は、世界中で深刻化しているが、OECD諸国の中で日本は最も割合が大きい⁶⁾。社会的に孤立した人や社会との関係性が薄い人ほど早期に死亡する確率が高いこと⁷⁾や病気の予後が悪く⁸⁾、日常生活動作や身体機能⁹⁾、認知機能¹⁰⁾の低下のリスクが大きいことが示されている。また生きがい喪失や自己否定といった自己肯定感の低下から自信を失い、自立した生活継続への不安や高齢者犯罪増加の背景は社会的孤立の問題があるとの指摘もある。日本においては、

家族以外の人との交流の希薄さが顕著であり、単身世帯の増加は社会的孤立の問題を憎悪傾向に向かわせやすい。特に大都市圏においては、活発な人口移動や集合住宅の多い都市部特有の住宅形態や過度なプライバシー重視から自治会や町内会活動の低調、地域コミュニティの衰退といった状況から社会的孤立問題は深刻な問題となっている¹¹⁾。

社会的孤立が社会福祉の課題に取り上げられた、2000年に厚生労働省内「社会的援護を要する人びとに対する社会福祉のあり方に関する検討会」の報告書¹²⁾では、現代の貧困は心身の障害・不安、社会的排除や摩擦、社会的孤立や孤独の3つに整理されており、現代の貧困を社会的なつながりの問題として地域福祉の役割が大きいと捉えている。

さらに、2007年に厚生労働省内「高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議」の報告書¹³⁾では、社会的孤立の要因の一つに支援を望まない高齢者が増加していることを挙げている。とりわけ高齢者では社会的孤立から孤立死につながる、直接命に関わる問題として社会的孤立が表われている。すなわち、社会的孤立は急速に社会的対応をせまる問題として社会問題化している。社会的孤立は、社会的つながりの問題だけではなく、住宅問題、低所得、貧困、健康問題等が複雑に結びついていると考えられる。2014年に内閣府が行った「一人暮らし高齢者に関する意識調査」の報告書¹⁴⁾では、日常生活全般についてどのような不安を感じるか聞いたところ、「健康や病気のこと」を挙げた者の割合が58.9%と最も高く、孤立死について身近に感じるか聞いたところ、「感じる」とする者の割合が44.5%、「感じない」とする者の割合が52.1%となっており、約4割が身近に感じるとの結果となっている。いずれにしても、地域福祉での対応もが必要であり地域でのつながりとなる人間関係の構築となる方策が急務である。

3. 先行研究の概観

3-1 居場所概念の整理

近年、居場所や居場所感における研究が重要視されるようになるにつれて居場所という言葉の表わす内容に広がりが見られるようになってきた。居場所は一般用語としても研究の面においても捉え方はさまざまで、いまだ明確な定義づけがされていない。

心理学分野では、居場所は物理的意味と安心した心理状態の両方を含んだものであり、そこでは他者とのつながりが存在している¹⁵⁾として、社会的意味づけ、つながり、関係性を重要な要素と指摘している。心理的な側面に注目している研究では、心理的居場所という言葉で提示し、こころの拠り所となる関係性、および安心感があり、ありのままの自分が受容される場と定義している¹⁾。そして心理的居場所があることに伴う感情を心理的居場所感としている。社会学・教育学分野では、居場所を心・安定・安心・安らぎといった言葉で表現しており、物理的空間に加えて心理的要素がみられるが、心理的居場所がどのようなものなのかと明確に示されていない¹⁵⁾。建築学分野では、建築物が身体に与える影響や特徴を明らかにしようとしている研究であり、心理的側面というよりも物理的側面が強い¹⁵⁾。

3-2 大都市高齢者の社会的孤立における研究

東京都板橋区の一人暮らし高齢者1,391人を対象に訪問面接法を用いた研究がある。親しい人

が一人以上いてもその人々と対面接触頻度及び非対面接触頻度が少ない状態を「孤立」と定義し、一人暮らし高齢者のうち、10.8~16.6%が孤立状態に該当すると指摘している。孤立状態にある高齢者には男性の比率が高く、男性であっても女性であっても未婚の人や子どもがいない人や収入の少ない人が多く、孤立状態の高齢者のうち、約8~9割の人は緊急時や日常の軽微な支援を頼める人が一人もいない¹⁶⁾。

また、社会的孤立と一人暮らしに至る経緯との関連についての研究報告がある。92.4%の高齢者が配偶者の親や親せきとの同居経験がなく、約8割の人が20歳代以前に自分の親や兄弟と別居していた。その後、子どもとは約7割が30~50歳代で別居し、すべての人が配偶者と60歳代以降に別居（主に死別）していた。これは、30~50歳代から60歳代以降に配偶者と別居するまで夫婦のみ世帯であったことが特徴である。社会的孤立の属性的要因として、性別、学歴、経済状態、身体機能が示されている¹⁷⁾。

大都市一人暮らし高齢者の性差による研究では、日頃の会話頻度についてみると、2~3日に1回以下は、女性32.4%であるのに対し、男性41.2%である。また困ったときに頼れる人がいないは、女性9.3%であるのに対し、男性14.8%であり、大都市ほど高いと報告されている¹⁸⁾。すなわち大都市の一人暮らし男性高齢者については、これまでの健康や生活への課題に加え、社会的孤立の課題に対する方策の検討が焦眉の急であると指摘されている。

3-3 コミュニティカフェにおける研究

高齢者の地域支援における社会資源のひとつとして、通常のカフェとは異なるコミュニティカフェといわれるものがある。コミュニティカフェは形態もさまざま、プログラムのない「場」の提供や認知症予防や健康増進を目的としたプログラムで構成されているものもあり、食事の提供をしている場もある。名称では、カフェ、サロン、茶の間、たまり場、憩の場と多様である。いずれにしても地域を拠点に、地域住民である高齢者、ボランティア等や運営者との関わりから楽しい仲間づくりの活動となっている。高齢者においては、一人暮らしや家族はいても日中は一人きりで会話をする相手も少なく、閉じこもりがちに暮らしている高齢者が気軽に出掛けて交流を通じて仲間づくりやいきいきと暮らせることを目指している場をコミュニティカフェと総称している。

地域の居場所とコミュニティカフェを捉えている研究では、「地域の身近な場所であって、人々が気軽に参加でき、そこに参加することが本人に安心感や幸福感をもたらす、こころの拠り所となるような場や機会を提供する場」と定義している¹⁹⁾。

コミュニティカフェの現状・実態を調査した研究では、大分大学福祉科学研究センターがコミュニティカフェの運営者に調査を行っている²⁰⁾（478か所、有効回収数166か所、有効回収率34.7%）。コミュニティカフェは1970年頃から開設されており、2000年以降に開設されたコミュニティカフェが9割であるとした研究結果を報告している。コミュニティカフェは1970年頃から開設されており、2003年~2009年の間は毎年二桁で増加しており、利用者も増加している。設置・運営においては、NPO法人、個人、任意団体が中心であり、自治体による設置は1割未満と少ない。コミュニティカフェの運営目的においては、地域活性化が半分以上を占めており、次いで保健福祉（介護予防、孤立予防、健康維持・増進）、地域への貢献の順である。年々、地域活

性化や保健福祉を目的とするコミュニティカフェ増加傾向にある。また、参加対象者においては、対象を絞らないものが多いが、高齢者を主体とするものが多い。採算状況においては、4割が赤字、さらに、補助金を除くと7割が赤字となっており、設置者の負担やボランティアによる運営など収支バランスにさせる工夫がみられる。特にスタッフやボランティアの確保、専従者の雇用、マネジメントのできる人材確保、後継者の育成などが課題として報告されている。また財務面では、参加者の増加、人件費や家賃（使用料）、補助金の活用といった赤字解消につながる取り組みを課題としている。

数や実態が把握しきれていないコミュニティカフェにおいて、情報共有とネットワークづくりを目指す全国社会福祉協議会が運営支援を進める「ふれあい・いきいきサロン」というコミュニティカフェ活動がある。2012年4月時点で全国60,000か所を超えている。1990年代から始まりをみせており、地域社会でのたまり場として高齢者から子どもまで幅広い年代層への仲間づくりや居場所づくりを目指す取り組みである。「ふれあい・いきいきサロン」のネットワークづくりや開設への講習や助成といった取り組みも行っている。地域社会における社会参加の受け皿として住民ボランティアを主な担い手に利用者が相互交流する「場」の提供を目指している。サロン活動の目的は、介護予防の推進、外出機会の向上、地域でのつながり強化などがあげられる。自由な時間を過ごすといった取り組み方よりも多くのサロンではプログラム型で、健康や生涯学習などの生活面に関する講座や講演、お茶会や昼食会、折り紙やゲームといった内容が組み込まれている²¹⁾。

上述の全国社会福祉協議会が運営支援の地方都市5か所の「ふれあい・いきいきサロン」において高齢者を対象にした場合の効果として調査を行ったものがある²²⁾。楽しさ・生きがい・社会参加、無理なく体を動かせる、適度な精神的刺激、健康や栄養について意識する習慣がつく、生活のメリハリ、閉じこもらせないと整理している。コミュニティカフェの意義については、8割が話をすることが楽しい、4割弱は活動が楽しい（35%）と回答している。いずれも多くがプログラム化された「ふれあい・いきいきサロン」を肯定的に評価しており、運営側が高齢者の望ましいあり方を効果として想定して、そのことに貢献していると言えるが、個々の環境要因が交絡要因として背景にあることも示唆している。

4. 研究の目的と意義

高齢者の社会的孤立に関する先行研究については、大都市に暮らす一人暮らしの孤立傾向が、10~17%に該当しており、その多くが日常生活の支援を頼めない状態であり、大都市ほど高いといわれており、高齢者の単身世帯の増加に伴い、社会的孤立防止の方策は喫緊の課題である。

現在、高齢者の社会的孤立防止の施策として、福祉・介護等のサービスは、生活保護制度や介護保険制度によるもののほか、社会福祉法に基づき市区町村が主体となって実施する地域福祉活動がある。国（厚生労働省、経済産業省等）は、各種の地域福祉活動を支援するために介護保険サービスの対象外でも高齢者が地域で安心して暮らすことができるよう、孤立死などを予防するための見守りや買物支援などの安心生活創造事業と地域課題に対応した問題解決の仕組みづくりである地域包括支援センター等機能強化事業や地域において自立した生活を送れるよう支援する

日常生活自立支援事業を実施している。

コミュニティカフェは、市区町村が主体となって実施する地域福祉活動の位置づけとなる。大都市東京都では、東京都社会福祉協議会が中心となって「課題発見・解決思考型の地区社協整備促進事業」ならびに「多機能常設型居場所づくり促進事業」の2つを柱として取り組みを進めている。特に居場所づくりは、地域住民のかかわりも交え、地域の居場所で発見された課題を地区社協や地域包括支援センター、専門機関につなぐなど両事業による相乗効果を目指している。居場所の一つとしてコミュニティカフェを位置づけ、試行的な取り組みがなされている。

大都市圏のコミュニティにおいては、近年、その機能が発揮されなくなってきたと考えられ、自治会・町内会の加入率の低下や近所づきあいの希薄化、地域活動の人手不足といった地域関係の希薄化や自治会・町内会以外の多様な主体とのつながりの発生といったことが考えられている。上述のとおり、大都市圏における高齢者の社会的孤立防止の施策の一つである、居場所としての取り組みであるコミュニティカフェは、年々その数は増加傾向にある。団地の一室の利用や空き店舗、公共公益施設の利用など開催場所も多様である。NPO 法人、個人、ボランティア、行政などさまざまな主体が運営をしている。コミュニティカフェの増加は、コミュニティカフェの多様な効果への期待を反映していると考えられるが、利用者である高齢者やボランティア、代表者双方から捉えた研究やコミュニティカフェの現状・実態及び課題を検討した研究はあるが、大都市で行われているコミュニティカフェの利用意義や形態から検討した研究は極めて少ない。

以上より、本研究では、大都市に暮らす高齢者の社会的孤立防止にかかわる課題を社会的孤立防止の施策の一つに位置づけられているコミュニティカフェの意義と期待の観点から、通常のカフェや喫茶店ではないコミュニティカフェを利用する高齢者とボランティア、及びコミュニティカフェ代表者の異なる視点より質的に明らかにするとともに、今後の社会的孤立防止に向けた地域実践の示唆を得ることを目的とした。また、大都市で行われているコミュニティカフェ3か所の調査を通じて、大都市で暮らす高齢者が住み慣れた地域で尊厳ある生活を継続していくうえで、地域で安心して過ごすことのできる居場所としてのコミュニティカフェのあり方を探索する。

5. 研究フィールドの概要

5-1 新宿区介護予防・日常生活支援事業²³⁾

平成28年から取り組みが始まった新宿区における新しい地域支援事業は、高齢者が住み慣れた地域で生活を続けられるよう日常生活を支援する事業である。要介護状態を予防するため地域全体で高齢者を支え、高齢者自身も能力を最大限に生かす取り組みである（図1）。

コミュニティカフェにおいては、高齢者複合施設で行われているコミュニティカフェを通所型サービスの一つとして、地域の集会室等で行われているコミュニティカフェはその他の生活支援サービスの一つとして位置づけている。

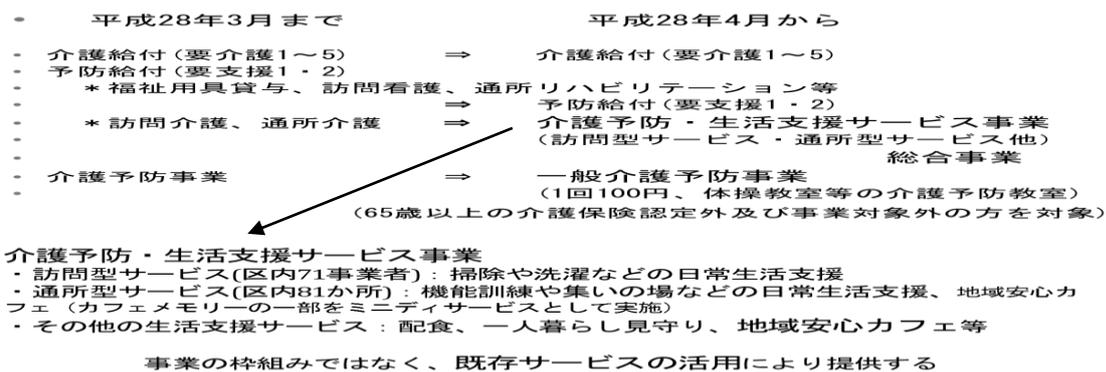


図1 新宿区介護予防・日常生活支援事業

5-2 新宿区の高齢者社会資源

新宿区が運営する高齢者社会資源は、ビルや商業施設の多い、南側には少ないものの、目立った偏りはない(図2)²⁴⁾。コミュニティカフェのほかに、総合的に高齢者を支援する高齢者総合相談センターが10か所、集会や娯楽のほかに文化活動・健康増進に向けた活動の場として風呂や体操、囲碁等の様々なプログラムを用意している地域交流館が15か所、集会や娯楽のほか、ボランティアなどの社会貢献活動の場として活用されているシニア活動館が4か所、高齢者が自主的に行う娯楽や集会として利用されていることぶき館が2か所ある。いずれも、主にプログラム化されているものが多く、カラオケや囲碁、将棋、フラダンスといった目的を持ったの参加形態となっている。参加費も無料からプログラムによっては有料化されている。

他に、介護保険サービスの通所(デイサービス)が81か所、新宿区運営スポーツ施設3か所、一般スポーツ施設は大小100か所を超える。また一般のカフェやレストラン、飲食店はさらに多い。新宿区内での目立った偏りはなく、多くの施設が徒歩圏内もしくは、公共機関を使っても数分のところにある。居場所となり得る専門機関やさまざまなニーズに対応したサービスは、新宿区内多くに点在していることは大都市特有の特徴でもあろう。

また、新宿区における人口10万人においての急性期型病床数は多いものの療養病床数は極めて少なく、東京23区中23番目となっており、住み慣れた地域で入院療養することは難しい。大都市圏では、単身世帯が多く、近所づきあいが希薄傾向をたどっており、生活破綻を早期に見つけ、在宅での生活を支えるしくみづくりからも、地域や病院、福祉、介護との連携強化や、医療やリハビリテーション支援の充実などの取り組みとしてさまざまなプログラムを積極的に推し進めており、居住地域に隣接した場所に多くの支援施設を設けているといえる。

5-3 「ほっと安心カフェ」の概況

「ほっと安心カフェ」は、都営百人町四丁目アパート1階の集会室で行われている。17号棟、居住数2,321室の大規模団地であり、高齢者人口（65歳以上）が増加しており、85歳以上人口が19%以上の高い割合を占めている²⁵⁾。また高齢化率においては、新宿区全体では20.0%に比べて、百人町四丁目では40.0%と極めて高い（表1）²⁶⁾。世帯構成では、一人暮らしが65歳～84歳の間で多く、夫婦世帯では年齢が高くなるほど減少している（表2）。男女比の一人暮らし世帯構成では、女性が61%、男性が28%となっている。入居時期をみると、旧棟の建設が始まって約60年が経過しており、居住年数では、50年以上は75歳以上に多く、他の都営住宅の立て替えや震災等により新棟に入居した人たちの中でも75歳以上が半数を占めている（表3）²⁵⁾。

表1 新宿区総数と百人町四丁目の65歳以上の人口構成（各年1月1日現在）

単位：人						
町丁名	年	65～74歳	75歳～84歳	85歳以上	合計	高齢化率
新宿区総数	平成27年	33,671	22,099	9,790	65,560	20.0%
	平成28年	34,085	22,406	10,094	66,585	20.0%
百人町四丁目	平成27年	452	458	220	1,130	40.0%
	平成28年	430	464	223	1,117	40.0%

表2 百人町四丁目アパート年齢階層別の世帯構成

単位：世帯				
世帯構成	64歳未満	65歳～74歳	75歳～84歳	85歳以上
一人暮らし	22	95	116	37
夫婦	20	51	39	9
親子	35	22	19	11
兄弟（姉妹）	13	0	4	1
夫婦と子ども	8	16	1	1
その他	2	4	3	2
合計	100	188	182	61

表3 百人町四丁目アパート年齢階層別の居住年数

単位：世帯				
居住年数	64歳未満	65歳～74歳	75歳～84歳	85歳以上
50年以上前	8	10	38	37
40年以上前	20	51	39	9
30年以上前	35	22	19	11
旧棟に入居	13	0	4	1
新棟に入居	8	16	1	1
合計	84	99	101	59

この団地において「ほっと安心カフェ」は、2009年4月、新宿区の協働事業提案制度において、新宿区福祉部高齢者サービス課と特定非営利活動法人（NPO法人）介護者サポートネットワークセンター・アラジン（以下アラジン）とによる「ほっと安心地域ひろば事業」として選定されて始まった。事業の選定規準は、ニーズ性や区民満足度や波及効果といった協働の必要性と継続性や実現性、実施能力といった事業の実現性である。

「ほっと安心地域ひろば事業」とは、首都圏の大規模団地において孤独死の問題が顕在する中で、一人暮らしの高齢者や介護者が気軽に立ち寄れる場をつくることにより、高齢者や介護者の孤立を防ぎ、地域における区民相互の支えあいやつながりを広げていくために気軽に集って話や相談ができるスペースの開催が事業目的であり、事業の運営形態や内容は運営者に一任されている。事業の大きな柱の一つが、新宿区地域安心カフェであり、高齢化の顕著な大規模団地である百人町四丁目アパートの集会室において2009年7月2日に「ほっと安心カフェ」がオープンした。「ほっと安心カフェ」は、百人町四丁目団地自治会と高齢者総合相談センター、新宿区福祉部高齢者サービス課と協力し、主体側であるアラジンと連携を結び、ボランティア、スタッフがサポート、支援をとる事業体制である（図3）²⁷。「ほっと安心地域ひろば事業」による新宿区地域安心カフェは、他に「カフェメモリー」「カフェだんだん」がある。利用料は一人200円である。年に一度、「地域課題の解決」、「具体的な成果・効果」、「区民・地域社会への波及効果」の視点で区と区民及び有識者を交えて評価を行い、「反省と改善」について取り組んでいる。

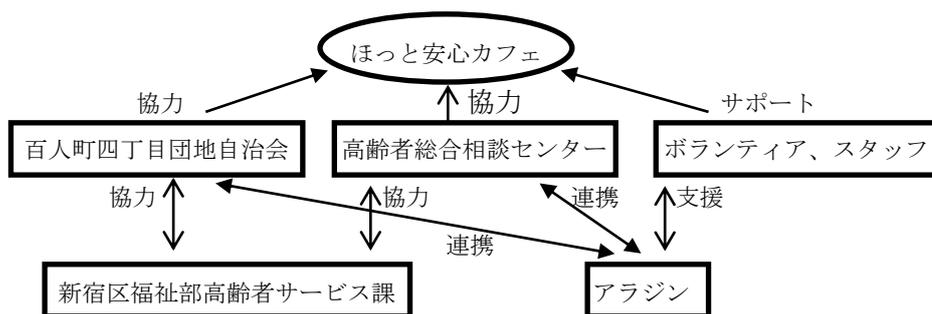


図3「ほっと安心カフェ」

5-4 「カフェメモリー」の概況

「カフェメモリー」は、原町高齢者複合施設1階の集会室で行われている。毎週木曜日の午後2時からの1時間である。母体は社会福祉法人として特別養護老人ホーム、高齢者のデイサービス、認知症のグループホーム等の事業を行っている。「カフェメモリー」は、施設関係者が行っている。「カフェメモリー」は、高齢者と介護者、家族の利用や地域住民との交流の場としても活用されており、地域住民も年々増加傾向にある。交流事業として、音楽ケアや書道といったプログラムも取り入れており、自由に参加できる。榎町高齢者総合相談センターも併設されており、高齢者はもちろん介護者や家族も必要に応じて「カフェメモリー」利用時に相談をする。

5-5 「カフェだんだん」の概況

「カフェだんだん」は、戸山シニア活動館2階の集会室で行われており、利用者の多くはエレベーターを使用する。毎月第3木曜日の午後1時からの2時間である。地域居住のボランティア

によって行われている。戸山シニア活動館は、近隣高齢者の娯楽や集会に利用されており、囲碁将棋やカラオケ、パソコン、カメラといった学びの場ともなっており、若松町高齢者総合相談センターも併設されており、利用者は必要に応じてカフェ利用時に訪れたり、職員から出向いて声掛けをする。

6. 本研究で用いる用語の定義

コミュニティカフェ：

すでに上述でみてきたように多様な解釈がされているが、本研究においては、地域の中の身近な場所にあつて高齢者が気軽に参加でき、自由に過ごすことのできる場であり、茶菓の提供を行う場であると定義した。

高齢者：

国連の世界保健機関(WHO)の定義による、65歳以上を高齢者とした。

居場所：

すでに上述でみてきたように多様な解釈がされているが、本研究においては、物理的な場のみならず心理的な場であり心の拠り所となる場。自己の存在感を実感し、精神的に安定していただける場であるとした。

また、居場所があると感じる感覚を居場所感と定義する。これまでの先行研究におけるさまざまな居場所の定義から、質問紙調査における問6の6項目について居場所感を表わす項目とした。

大都市（圏）：

東京大都市地域の基礎自治体として特別区である東京23区を指し示すものとした。

社会的孤立：

イギリスの社会学者である Townsend.P が定義した「家族やコミュニティとほとんど接触がないということであり、客観的な状態を指すもの」²⁸⁾に基づいた。

第2章 研究方法

1. 研究デザイン

本研究の理論的視点は、解釈主義的視点に立った、対象者の行為や経験のプロセスの意味を探索し理解することを目的としている質的帰納的研究である。

本研究では、質的帰納的研究を行うにあたり、現場（フィールド）調査、アンケート調査、インタビュー調査の研究手法を用いたものであり、心理尺度は用いていない。なぜなら、社会的孤立に関する心理尺度は、Lubben Social network Scale、UCLA 孤独感尺度などいくつかあるが、孤独感が単一的な心理学的現象でないこと、尺度項目の表現方向がすべて孤独方向であること、回答者が反応する際に黙従傾向が生じる可能性があることから、評価指標として具体的に数値化できる指標は用いないこととした。また、研究対象を「数」という凝縮されたあり方に変換し、定量的な分析により、その法則を捉えようとする量的研究では、個々の事例の特殊事情に捉われないで全体的傾向を捉えることはできるが、現象を数値に置き換える必要があり、微細な現象まで網羅して捉えることが難しいと考えたからである。

以上から、本研究では、インタビュー調査によって得た利用者、ボランティア、代表者のコミュニティカフェに関する質的データとアンケート調査によって得た利用者の基本的属性や日常生活に関する量的データとを組み合わせたデータ収集的及び方法論（方法間）的トライアングレーション手法を用いた。この手法によりコミュニティカフェを利用する高齢者を質的・量的両方の側面から捉えることが可能となり、量的データの背後にある対象者の思いを明らかにすることができるとともに、ボランティア、代表者を加えた3つの視点から研究課題への洞察を深めることで研究の妥当性を高めることとなると考えた。なお、質的データと量的データの収集・分析は並行して行い、結果を統合して考察することとした。

2. 研究1: コミュニティカフェに関する3つの視点からの調査と検討—ほっと安心カフェにおいて—

2-1 調査対象者

本研究に協力・同意の得られた(資料1)「ほっと安心カフェ」を利用する高齢者88名（内訳：アンケート協力者88名、及びインタビュー協力者53名含む）、ボランティア15名（医療職者3名含む）、代表者1名を対象とした。対象者の属性は以下のとおりであった（表4,表5,表6）。インタビュー協力の利用者は、女性45名と男性8名であり、女性は70歳代から90歳代に及んでおり平均年齢84.7歳、男性は70歳代から80歳代、平均年齢77.8歳であった。ボランティアは、すべて女性であり、4年から5年のボランティア経験を持っていた。年代では、40歳代1名、50歳代1名、60歳代8名、70歳代5名であり、そのうち医療職者は40歳代、50歳代、60歳代の各年代1名であった。

本研究では、医療職者においてはボランティアとしてかかわっており、ボランティアとしての知見を得る必要があると考えたためボランティアとして分析した。また、調査対象者である利用者、ボランティアの多くは毎回利用をしている場合が多いことから、母集団である「ほっと安心カフェ」を利用する高齢者、ボランティア全体からランダムに調査対象者を抽出した。

表 4 調査対象者（インタビュー協力の利用者）の属性

対象者	年齢	性別	世帯形式	参加年数	参加頻度	居住年数
A	83	女	単身	5年	月2回以上	8年
B	80	女	単身	4年	月2回以上	10年以上
C	89	女	単身	3年	月2回以上	5年
D	81	女	単身	5年	月1回	7年
E	88	女	単身	1年	月2回以上	5年
F	90	女	親子2人	5年	月2回以上	10年以上
G	83	女	単身	2年	月1回	10年以上
H	83	女	単身	4年	月2回以上	10年以上
I	85	女	単身	5年	月2回以上	10年以上
J	86	女	単身	1年	月2回以上	3年
K	79	女	単身	2年	月2回以上	5年
L	92	女	夫婦のみ	3年	月2回以上	10年以上
M	87	男	単身	2年	月2回以上	10年以上
N	81	女	単身	5年	月2回以上	10年以上
O	84	女	単身	1年未満	月2回以上	10年以上
P	82	男	単身	4年	月2回以上	10年以上
Q	83	女	親子2人	2年	月2回以上	10年以上
R	90	女	単身	3年	月2回以上	10年以上
S	93	女	単身	5年	月1回	10年以上
T	75	男	夫婦のみ	4年	月2回以上	10年以上
U	79	女	単身	1年	月1回	10年以上
V	89	女	単身	3年	月2回以上	10年以上
W	81	女	単身	2年	月1回	5年
X	71	男	単身	3年	月1回	7年
Y	90	女	夫婦のみ	2年	月2回以上	5年
Z	88	女	単身	4年	月1回	5年
AA	86	女	単身	5年	月1回	10年以上
AB	78	女	単身	5年	月1回	8年
AC	80	男	夫婦のみ	3年	月2回以上	8年
AD	84	女	夫婦のみ	4年	月2回以上	5年
AE	87	女	単身	1年未満	月2回以上	5年
AF	89	女	単身	5年	月2回以上	10年以上
AG	90	女	親子2人	5年	月2回以上	10年以上
AH	83	女	単身	3年	数か月に1回	10年以上
AI	79	女	夫婦のみ	1年	月2回以上	10年以上
AJ	81	女	単身	4年	月1回	10年以上
AK	83	女	単身	2年	月2回以上	10年以上
AL	82	女	単身	1年	月2回以上	9年
AM	71	男	単身	5年	月1回	10年以上
AN	76	女	夫婦のみ	4年	月2回以上	8年
AO	90	女	単身	4年	月2回以上	10年以上
AP	89	女	単身	5年	月2回以上	10年以上
AQ	85	女	夫婦のみ	3年	月2回以上	10年以上
AR	81	男	単身	3年	月2回以上	7年
AS	87	女	単身	2年	数か月に1回	10年以上
AT	80	女	夫婦のみ	4年	月2回以上	10年以上
AU	75	男	単身	5年	月1回	5年
AV	85	女	単身	5年	月1回	8年
AW	81	女	単身	4年	月1回	10年以上
AZ	89	女	単身	4年	月1回	10年以上
AY	87	女	単身	3年	月2回以上	10年以上
AZ	82	女	単身	2年	月1回	10年以上
BA	83	女	単身	5年	月1回	10年以上

表 5 調査対象者（ボランティア）の属性

対象者	年代	性別	ボランティア 年数	ボランティア or医療職
CA	60歳代	女	5年	医療職
CB	50歳代	女	5年	医療職
CC	40歳代	女	4年	医療職
CD	60歳代	女	5年	ボランティア
CE	60歳代	女	5年	ボランティア
CF	60歳代	女	4年	ボランティア
CG	60歳代	女	4年	ボランティア
CH	70歳代	女	5年	ボランティア
CI	70歳代	女	5年	ボランティア
CJ	60歳代	女	4年	ボランティア
CK	70歳代	女	4年	ボランティア
CL	70歳代	女	4年	ボランティア
CM	70歳代	女	5年	ボランティア
CN	60歳代	女	5年	ボランティア
CO	60歳代	女	5年	ボランティア

表 6 調査対象者（代表者）の属性

対象者	年代	性別	カフェ 関わり年数	介護職 歴
DA	60歳代	男性	8年	なし

2-2 実施時間と場所

アンケート調査では、回答には、高齢ということで一人一人からの聞き取りの形が適切と判断して「ほっと安心カフェ」での調査を行った。また、心の深層部分を言語化して適切な回答を得るために必要に応じて質問内容を分かりやすく補った。

インタビュー調査では、インタビュー時間は 10~20 分を目安に数回に分けて行なった。インタビュー場所は、座っている席で行い、話し易い環境で実施した。ボランティアと医療職者には、インタビュー時間は 10~15 分を目安に数回に分けて行なった。インタビュー場所は、「ほっと安心カフェ」時間内での空いている時間もしくは「ほっと安心カフェ」後のふりかえりの会（スタッフ、ボランティア、医療職者が参加）を利用して話し易い環境で実施した。代表者には、別日に NPO 法人アラジンの会議室にてインタビューを行った。インタビュー時間は 120 分行なった。インタビュー場所は、NPO 法人アラジン事務局で実施した。

また、それぞれのインタビュー調査で一回のインタビューでは聞き取れなかった場合は、別日を設けて数回に分けて行った。

2-3 調査地域の選定

対象地域として新宿区にある都営百人町四丁目アパートの地域に着眼した理由は、

- ① 新宿区は日本の中心的大都市であり、我が国全体の高齢化及び高齢化率を上回る早さで高齢化が進んでいること
- ② 活発な人口移動やさまざまなバックグラウンドを持った人が集まり、多様性に富んだ地域であり、それらの生活圏では、地域とのつながりの希薄性が目立ち、高齢者の日々の生活経験や価値観が異なると考えられること
- ③ 社会的孤立感が目立つと考えられること

以上から、本研究の目的における知見を可能とする地域であると考えた。

2-4 調査地域へのフィールドワーク

質的データの信頼性・妥当性を高めるための視点として、本研究は、1 年を要して行ったが、対象地域には、3 年半前から月 4 回、延べ 160 回にわたって「ほっと安心カフェ」にボランティアとして参加して、良好な関係性（ラ・ポール）を結びながらデータ収集を心掛けた。

なお、筆者は、調査対象者の現場（フィールド）や生活の場でインタビュー調査を行うとともに調査対象者にかかわる社会資源施設や地域の行事等に参加するなどフィールドワークを行い、分析に加味した。

2-5 調査方法

2-5-1 現場（フィールド）調査

「観察者としての参加者」として、観察許可を得てから現場（フィールド）に参入した。観察の最中にノートやメモを取ることは被観察者の意識を喚起させる可能性があるため、閉設後に記入を行った。

1 年間、現場（フィールド）に参加し、そこで過ごす人たちの視点から対象社会の構造や解釈

過程を内側から具体的に観察した。現場（フィールド）で観察された行為を時間的な流れや空間的な脈絡とともに、その関連性も含め記述した。また、現場（フィールド）の現状として年代及び性別の利用状況及び曜日ごとのタイムテーブルの調査を行った。

2-5-2 アンケート調査

調査項目は、リッカート尺度を用いて基本属性も含めて全 23 問で構成されている(資料 2)。健康状態（健康感、病院等への定期通院）、コミュニティカフェについて（利用開始時期、頻度、同伴者、きっかけ、どのような場所か、利用目的、利用継続意向）、近所づきあい（日常的つきあい）、全般的つきあい（友人知人や親類親戚）、地域活動（地縁的な活動、スポーツ・趣味・娯楽活動、ボランティア・区民活動）、福祉行政サービス（高齢者相談センターの認識、利用）、基本的属性（性別、年代、居住年数、家族構成）、今後継続居住の意向、外出頻度、日常生活不安、生活満足度に関することであった。回答方法はリッカート尺度（2 件法、3 件法、4 件法、5 件法）と複数回答であった。

なお、調査内容の妥当性検討として、事前に利用者 8 名に協力をいただきパイロットスタディを行った。

2-5-3 インタビュー調査

データ収集は、コミュニティカフェの意義と期待について作成した質問項目（インタビューガイド）を用い、1 対 1 の半構造化面接により行われた。利用者における質問項目は、①基本的属性、②利用年数・頻度・きっかけ、③利用して自分で変わったと思うこと、④数ある高齢者支援の中でカフェを利用する目的、⑤地域社会で生活を送る上で心配や不安なこと、⑥地域社会で過ごすためのコミュニティカフェの存在や役割、⑦今後、コミュニティカフェに望むことの 7 項目であった。ボランティア、医療職者における質問項目は、①基本的属性、②参加きっかけ、③参加して自分が変わったと思うこと、④地域社会で過ごすためのコミュニティカフェの存在や役割、⑤今後、コミュニティカフェに望むことの 5 項目であった。代表者における質問項目は、①基本的属性、②コミュニティカフェ開設の経緯と理念、③現在の活動概要（運営体制、活動内容、利用者属性等）、④現在の活動概要と開設時の想定との差異、⑤コミュニティカフェの今後の展望等、⑥地域社会に求められる高齢者のあり方の 6 項目であった。

インタビュー協力者のノンバーバルな行動（服装、仕草、表情等）や面接者である筆者の働きかけ方（服装、抑揚、身振り等）さらにインタビューする部屋の照明や間取り、天候、気温等も記述した。

なお、調査内容の妥当性の検討として、事前に利用者 5 名に協力をいただき事前調査を行った。

2-6 分析方法

2-6-1 現場（フィールド）調査

現場（フィールド）の現実社会（リアリティ）を観察・記述した。

2-6-2 アンケート調査

本研究は、多くの質問項目がリッカート尺度を用いたアンケート調査であり、順序尺度である。順序尺度はノンパラメトリックな手法で分析されるべきとの指摘がある一方、ノンパラメトリック手法は、検出力が低く、総体的に弱い効果が見込まれてしまう可能性があり多くの研究の分野

で 50 年にわたる論争の歴史がある。本研究の分析では、項目数、標本数などの分布も考慮し、リッカート尺度を間隔尺度とみなして相関に基づく多変量解析を行った。

- ① 基本的属性含めた調査項目全 23 項目について、基本集計を行った。
- ② 問 7①～⑥において、「1.とても思う」4 点、「2.やや思う」3 点、「3.あまり思わない」2 点、「4.思わない」1 点として逆転項目とし、サンプリングサイズの適切性の検討を **Bartlett test of sphericity** で、因子分析の適合性の検討を **Kaiser-Meyer-Olkin measure (KMO)** を用いて算出し標本妥当性の適切性を確認した。
- ③ 因子分析（主因子法、プロマックス法）を行い、因子を抽出した。
- ④ ③で抽出した因子と調査項目において、因子に与える影響を探るために重回帰分析を行った。
なお、統計処理には、統計ソフト **SPSS23 for Windows** を用いた。有意差検定、相関は、有意水準 5%及び 1%と設定した。

2-6-3 インタビュー調査

利用者からの語り、ボランティアと医療職者の語り、代表者の語りごとに、IC レコーダーに録音した逐語録をデータとして、各カテゴリーを抽出、文章化し、関係結果図を作成した。

- ① 逐語録やメモの内容を繰り返し読み、対象者一人ひとりのコミュニティカフェの意義や期待、現状や展望に関する重要な語りを抜き出した。抜き出した語りの意味を抽出し、文脈性を前提として、対象者の言語に近い形でセグメント化した。分析テーマに照らしてデータの関連箇所に着目し、それを一つの具体例とし、かつ他の類似具体例をも説明出来ると考えられる下位カテゴリーを生成した。
- ② 他の具体例をデータから探し、データ分析を進める中で新たなカテゴリーを生成し、カテゴリー名、要約、具体例などを追加記入した。
- ③ 具体例が豊富に出て来ないものの、そのカテゴリーが出現している協力者の語りにおいては比較的多いカテゴリーにおいては、有効であると判断した。
- ④ 生成した下位カテゴリーと他のカテゴリー概念との関係から類似例の確認を行い、中位カテゴリーを生成した。
- ⑤ 複数の中位カテゴリーを統合した関係からなる上位カテゴリーを生成し、カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめ、そのカテゴリーを文章化し、関係結果図を作成した。

分析終了の判断として、あるカテゴリーに関して新たな、あるいは重要なデータがない、カテゴリーがヴァリエーションを示す特性という次元で発展している、カテゴリー間の関係が十分に精緻化され妥当性が確認された、という 3 つの点で満たされた状態を理論的飽和化とした。

また、量的データの分析結果にも注目しながら、再度質的データを読み返し、量的データの分析結果に関連する記述を抽出した。量的データの分析結果として示された中に存在する文脈や意味(なぜそのような値を示したのか、なぜそのように変化したのかなど)を質的データに基づいて解釈した。質的なデータの分析によって抽出された意味を手がかりとして、再度量的データの分析(多変量解析)を行い、語りが統計的にどのように示されるかを分析した。見出された量的・質的な分析結果を時間の流れにそって再構成しながら、コミュニティカフェの意義と期待を経時的

に解釈した。

2-7 第三者のレビュー

アンケート調査では、統計学の専門教員から基本的集計結果に基づいて、分析手法の意見を求める方法で精緻化を行った。インタビュー調査では、データ分析の結果の真実性、信頼性と妥当性を担保するため、指導教員や質的帰納的研究方法の研究者 2 名（女、60 歳代）、臨床心理士 3 名（女 40 歳代 2 名、男 50 歳代 1 名）により、研究の途上において現場（フィールド）に入って観察した内容を書き留めたフィールドノーツのチェックや調査後のデータ解釈ならびに概念の確認を受ける指導を繰り返して精緻化を行った。手順は、精緻化前の分析内容を研究者が説明したうえで、あくまで発言内容に基づいて、最初に臨床心理士に、次に研究者、指導教員の順に意見を求めた。

3. 研究 2：カフェメモリーとカフェだんだんについて一代表者の考え方—

3-1 調査対象者

調査協力に同意の得られた「カフェメモリー」と「カフェだんだん」各カフェ代表者 1 名、計 2 名を対象とした。対象者の属性は以下のとおりであった（表 7）。「カフェメモリー」代表者は、高齢者複合施設の施設長であり、その一室を利用して行っていた。提供される茶菓は、施設内の調理室で製造されたものであった。「カフェだんだん」代表者は、ボランティアで行っているリーダーであり、全員ボランティアで運営されていた。提供される珈琲豆も無償提供されていた。

表 7 調査対象者の属性（各代表者）

対象者	年代	性別	コミュニティカフェ かかわり年数	現職	
カフェメモリー	EA	60歳代	男性	10年	施設長
カフェだんだん	FA	60歳代	女性	4年	ボランティア代表者 社会福祉士、歯科衛生士

3-2 実施時間と場所

「カフェメモリー」、「カフェだんだん」の各代表者インタビューでは、コミュニティカフェでの運営に支障のない、別日に行った。インタビュー時間はともに 130 分行なった。インタビュー場所は、話し易い環境で行えるように、新宿区内にある「カフェメモリー」の事務局（原町複合施設内）、新宿区内にある筆者の勤務先病院の一室で実施した。

3-3 調査地域の選定

対象地域として新宿区内にある「カフェメモリー」「カフェだんだん」に着眼した理由は、

- ① 研究 1 と同様に、大都市新宿区で行われていること
- ② 高齢者の孤立化を防ぎ、地域のつながりや支えあいの輪を広げることを目的に始まったこと
- ③ 地域の高齢者が気軽に立ち寄り茶菓等を楽しみながら、交流・相談等ができる場として始まり、居心地の良い場と考えられること

以上から、本研究の目的における知見を可能とする地域であると考えた。

3-4 調査方法

インタビュー調査である。データ収集は、作成した質問項目（インタビューガイド）を用い、1対1の半構造化面接により行われた。リサーチクエスションは、各コミュニティカフェの基本的特徴を理念、現状、今後の方策から示すものとした。質問項目は、①基本的属性、②コミュニティカフェ開設の経緯と理念、③現在の活動概要（運営体制、活動内容、利用者属性等）、④現在の活動概要と開設時の想定との差異、⑤コミュニティカフェの今後の展望等、⑥地域社会に求められる高齢者のあり方の以下6項目であった。

3-5 分析方法

2-6と同様に、各代表者の語りごとに、ICレコーダーに録音した逐語録をデータとして、各カテゴリーを抽出、文章化し、関係結果図を作成した。

分析終了の判断として、あるカテゴリーに関して新たな、あるいは重要なデータがない、カテゴリーがヴァリエーションを示す特性という次元で発展している、カテゴリー間の関係が十分に精緻化され妥当性が確認された、という3つの点で満たされた状態を理論的飽和化とした。

3-6 第三者のレビュー

データ分析の結果の真実性、信頼性と妥当性を担保するため、指導教員や質的帰納的研究方法の研究者2名（女、共に60歳代2名）、臨床心理士3名（女40歳代2名、男50歳代1名）によりデータの解釈ならびに概念の確認を受ける指導を繰り返して精緻化を行った。手順は、精緻化前の分析内容を研究者が説明したうえで、発言内容に基づいて、最初に臨床心理士に、次に研究者、指導教員の順に意見を求めた。

4. 倫理的配慮

本研究は、臨床研究の倫理等に関する講習会受講後（平成26年12月20日）、国際医療福祉大学の倫理委員会の承認を受けた（承認番号：15-1g-5 平成27年6月15日）。

調査対象者には、研究の趣旨・方法について口頭と書面を用いて説明して、本人からの同意を得た。調査は特定が可能な情報の部分は完全に匿名化して音声データは破棄され、調査協力者の個人情報漏えいすることのないように厳重に管理を行い、調査終了後はデータを破棄すること、研究は自由意志であり、同意しない場合においても不利益にならないこと、また一旦同意された場合でも途中で辞退できることを説明した。

第3章 結果

1.研究 1：コミュニティカフェに関する 3 つの視点からの調査と検討—ほっと安心カフェにおいて—

1-1 現場（フィールド）調査結果

「ほっと安心カフェ」は、月 4 回、午後 1 時～4 時の間、40 名前後の着席参加が可能な大きさの都営百人町四丁目アパート内集会室で行われていた。室内の配置は高齢者の歩行を鑑みてゆとりある配置となっており、一つのテーブルに 5～6 名の参加者が着席となる。また、テーブルには毎回スタッフが用意した季節の花が数本用意されている。タイムテーブルは以下のとおりである（表 8）。高齢者総合相談センター職員、民生委員が原則常駐し、必要に応じて行政担当者も同席している。何ものにも拘束される催しはない。参加者は思い思いの時間を持つ。曜日によつての大きな違いはなく、新宿区いきいき体操や歌謡の時間を自由参加として設けている。

表 8 タイムテーブル

時間	内容
13：00～14：00	お知らせや情報案内・懇談
14：00～14：30（水曜日のみ）	新宿区いきいき体操（DVD）
14：30～15：00	懇談、血圧測定、健康相談等
15：00～15：30	歌謡
15：30～16：00	懇談、血圧測定、健康相談等

観察調査を行った 2015 年 6 月～2016 年 5 月の 1 年間では、月 4 回、年間では 48 回行われた。この 1 年間における利用者数は、延べ 1,578 名（女性 1,214 人、男性 364 人）で、1 回の平均利用者数は、32.9 名（男性は 7.6 人、女性は 25.3 人）であった。年代では、男性は 70 歳代が多く、次いで 80 歳代、60 歳代の順であった。女性は 80 歳代が多く、次いで 70 歳代、90 歳代の順であった（表 9）。

表 9 利用状況（2015 年 6 月～2016 年 5 月）

単位：人

	6/4	6/6	6/18	6/24	7/4	7/16	7/22	8/1	8/5	8/20	8/26	9/3	9/5	9/17	9/23	10/1	10/3	10/15	10/28	11/5	11/7	11/19	11/25	12/3	12/5	12/17	12/23	1/7	1/9	1/21	1/27	2/4	2/6	2/18	2/24	3/3	3/5	3/17	3/23	4/2	4/7	4/21	4/27	5/5	5/7	5/19	5/25	計	
男性	1	1	1	3	2	1	1	3	1	1	2	2	2	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	3	2	1	2	1	1	2	2	3	2	1	2	1	1	1	1	1	1	3	2	1	68		
70歳代	2	2	5	4	3	12	3	5	6	3	4	3	2	2	4	3	4	4	1	3	2	1	3	7	2	2	6	5	2	4	6	2	1	4	7	1	4	3	5	7	5	4	6	5	4	4	177		
80歳代	5	4	1	2	2	1	1	1	2	1	2	2	2	1	5	1	1	1	2	4	2	3	2	2	2	5	3	3	2	3	1	4	4	1	1	1	1	4	1	1	4	1	1	4	1	91			
90歳代～	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	28				
小計	9	7	8	7	6	17	7	7	11	5	8	8	5	6	7	9	7	8	4	7	5	6	6	11	7	8	10	12	2	6	8	10	4	7	7	13	3	9	6	9	10	11	6	10	8	10	6	364	
女性	2	3	3	1	2	2	1	3	2	3	1	2	4	1	3	3	2	1	3	3	2	1	3	2	1	2	3	3	2	3	3	2	2	3	1	3	2	2	1	3	2	1	3	3	98				
70歳代	12	6	9	6	6	8	7	6	5	11	10	5	10	6	8	8	9	7	7	3	13	7	12	7	11	7	11	17	16	4	12	7	15	4	10	6	16	5	11	7	9	4	10	4	6	10	8	5	403
80歳代	14	8	13	11	8	13	10	12	9	14	7	8	19	6	7	10	12	7	17	11	13	5	6	9	12	16	12	15	10	6	11	15	13	11	10	9	16	7	9	9	10	8	9	13	9	12	12	12	515
90歳代～	4	2	4	4	2	3	8	3	1	1	5	4	5	3	3	5	4	5	4	4	6	6	7	2	3	8	6	4	4	3	5	5	6	2	2	6	7	1	5	4	4	2	4	6	3	5	4	4	198
小計	32	19	29	22	18	26	26	21	18	28	25	17	35	17	22	24	28	22	30	19	35	21	27	19	29	33	30	38	33	13	31	29	37	20	24	23	42	14	28	22	25	15	26	25	18	28	27	24	1,214
合計	41	26	37	29	24	43	33	28	19	39	30	25	43	22	28	31	37	29	38	23	42	26	33	25	40	40	38	48	45	15	37	37	47	24	31	30	55	17	37	28	34	25	37	31	28	36	37	30	1,578

1年間の観察調査から「ほっと安心カフェ」の特色は5つあることが分かった。

- ① 相談コーナーが常設。新宿区福祉部高齢者相談サービス課及び高齢者相談センターの職員がさまざまな相談に対応している。
- ② 介助が必要である利用希望の高齢者宅に車椅子を準備して送迎を行っている。
- ③ 茶菓の提供をしている。
- ④ 看護師や保健師が常時待機。希望者には血圧測定や健康相談を行っている。
- ⑤ 毎回カフェの後に行われる「ふりかえりの会」。当日の高齢者とのかかわりで気がついた点や心配している点、疑問点等を全員で情報共有する場を設けている。

1-1-1 小括 1

現場（フィールド）調査を行った1年間では、月4回、年間では48回行われた。この1年間における利用者数は、延べ1,578名（女性1,214名、男性364名）で、1回の平均利用者数は、32.9名（男性は7.6人、女性は25.3人）であった。年代では、男性は70歳代が多く、女性は80歳代が多かった。利用者が自由に過ごす時間が多くをしめていた。健康相談や血圧測定といった日々の健康状態の確認やアドバイスを受けることができていた。

1-2 アンケート調査結果

1-2-1 基本集計

基本属性において、性別では、男性は12名で女性76名であった。年代は、80歳代が最も多く、次いで70歳代、60歳代の順であった。世帯構成は、単身世帯が70名と最も多かった。外出頻度は、毎日が55名と最も多く、次いで一週間に数回、月数回の順であった。健康感では、とても健康、まあ健康が70名であった。生活満足度は、非常に満足、満足が68名であった（表10）。

表10 基本属性

	男性	女性		
性別	12名(13.6%)	76名(86.4%)		
年代	80歳代以上	70歳代	60歳代	50歳代
	77名(87.5%)	10名(11.4%)	1名(1.1%)	0名(0.0%)
世帯構成	単身	夫婦	親子	その他
	70名(79.5%)	11名(12.5%)	7名(8.0%)	0名(0.0%)
現地域の居住年数	10年以上	5年～10年未満	1年～5年未満	1年未満
	58名(65.9%)	28名(31.8%)	2名(2.3%)	0名(0.0%)
今後の居住意向	住み続けたい		住み続けたくない	
	88名(100.0%)	0名(0.0%)		
外出頻度	毎日	一週間数回	月数回	月1回以下
	55名(62.5%)	27名(30.7%)	6名(6.8%)	0名(0.0%)
病院への通院	通っている		通っていない	
	56名(63.6%)	32名(36.4%)		
健康感	とても健康	まあ健康	あまり健康でない	健康でない
	14名(15.9%)	56名(63.6%)	15名(17.0%)	3名(3.4%)
生活満足度	非常に満足	満足	やや不満	不満
	6名(6.8%)	62名(70.5%)	19名(21.6%)	1名(1.1%)

コミュニティカフェの利用状況においては、3年以上前から利用している者が45名、1年以上前からの利用者を合わせると70名であった。利用頻度では、月1回以上が49名と最も多く、次いで月1回であった（表11）。

表11 コミュニティカフェ利用状況

利用開始時期	3年以上前	1年～3年未満	半年～1年未満	半年未満				
	45名(51.1%)	25名(28.4%)	15名(17.0%)	3名(3.4%)				
利用頻度	月2回以上	月1回	数か月に1回	半年に1回	1年に1回以下			
	49名(55.7%)	31名(35.2%)	7名(8.0%)	1名(1.1%)	0名(0.0%)			
利用時の同伴者	一人	配偶者・家族	友人・知人					
	60名(68.2%)	6名(6.8%)	22名(25.0%)					
利用きっかけ	チラシ	前を通りかかって	友人・知人紹介	家族の勧め	行政紹介	高齢者相談センター紹介	医療機関紹介	その他
	43名(48.9%)	3名(3.4%)	25名(28.4%)	2名(2.3%)	11名(12.5%)	1名(1.1%)	3名(3.4%)	0名(0.0%)

コミュニティカフェの位置づけにおいては、安心できる場が87名、くつろげる場が86名、いきいきできる場が66名、ありのままにいられる場が40名、落ち着ける場が78名、守られている場が36名であった（表12）。

表12 コミュニティカフェの位置づけ

	とても思う	やや思う	あまり思わない	思わない
安心できる場	52名(59.1%)	33名(37.5%)	3名(3.4%)	0名(0.0%)
くつろげる場	51名(58.0%)	35名(39.8%)	2名(2.3%)	0名(0.0%)
いきいきできる場	28名(31.8%)	38名(43.2%)	18名(20.5%)	4名(4.5%)
ありのままにいられる場	11名(12.5%)	29名(33.0%)	39名(44.3%)	9名(10.2%)
落ち着ける場	41名(46.6%)	37名(42.0%)	10名(11.4%)	0名(0.0%)
守られている場	9名(10.2%)	27名(30.7%)	41名(46.6%)	11名(12.5%)

近所つきあいにおいては、あいさつ程度の最小限のつきあいが 40 名で最も多く、次いで日常的に立ち話をする程度であった（表 13）。

表 13 近所つきあい

近所つきあい	互いに相談したり日用品の貸し借りをするなど、生活面で協力しあっている人もいる	日常的に立ち話をする程度のつきあいはしている	あいさつ程度の最小限のつきあいかしてない	つきあいは全くしていない
つきあい内容	3名(3.4%)	37名(42.0%)	40名(45.5%)	8名(9.1%)
	多い	ある程度	ごく少数	ない
面識・交流の程度	1名(1.1%)	20名(22.7%)	60名(68.2%)	7名(8.0%)

全般的つきあいにおいては、友人・知人とのつきあいや親類・親戚とのつきあいでは、めったにないが 47 名と 50 名と最も多かった。次いでときどきあるであった（表 14）。

表 14 全般的つきあい

全般的つきあい	日常的にある（毎日～週に数回）	ある程度頻繁にある（週に1回～月に数回）	ときどきある（月に1回～年に数回）	めったにない（年に1回～数年に1回）	全くない
友人・知人とのつきあい	0名(0.0%)	3名(3.4%)	27名(30.7%)	47名(53.4%)	11名(12.5%)
親類・親戚とのつきあい	1名(1.1%)	5名(5.7%)	23名(26.1%)	50名(56.8%)	9名(10.2%)

地域での活動においては、スポーツ・趣味・娯楽活動が 41 名と最も多かった。活動をしていないでは、ボランティア・区民活動が 83 名、次いで地縁的活動の順であった。

表 15 地域での活動

地域での活動	はい	いいえ
地縁的活動	17名(19.3%)	71名(80.7%)
スポーツ・趣味・娯楽活動	41名(46.6%)	47名(53.4%)
ボランティア・区民活動	5名(5.7%)	83名(94.3%)

百人町四丁目地区高齢者総合相談センターにおいては、利用がないが 62 名、利用目的の認識があるは 53 名であった（表 16）。

表 16 百人町四丁目地区高齢者総合相談センター

	知っている	知らない
健康や将来のことを相談する場所の認識	53名(60.2%)	35名(39.8%)
高齢者総合相談センターの場所の認識	61名(69.3%)	27名(30.7%)
	ある	ない
高齢者総合相談センターの利用	26名(29.5%)	62名(70.5%)

日常生活の心配ごとで頼りになる人においては、近隣との人間関係では 67 名、生活上の孤立では 72 名があまり心配していない、もしくは全く心配していなかった（表 17）。

表 17 日常生活の心配ごとで頼りになる人（複数回答）

心配ごと	かなり心配	少し心配	あまり心配していない	全く心配していない
自身の健康・身体状況	12名(5.8%)	32名(30.8%)	44名(63.5%)	0名(0.0%)
将来の自身の世話・介護	12名(5.7%)	29名(27.4%)	46名(65.1%)	1名(1.9%)
家庭内の人間関係	6名(6.8%)	10名(11.4%)	53名(60.2%)	19名(21.6%)
近隣との人間関係	3名(3.4%)	8名(9.1%)	53名(60.2%)	24名(27.3%)
生活上の孤立	1名(1.1%)	15名(17.0%)	47名(53.4%)	25名(28.4%)
家計	2名(2.3%)	26名(29.5%)	43名(48.9%)	17名(19.3%)

頼りになる人においては、近所の人が 47 名と最も多く、次いで行政担当者の順であった(表 18)。

表 18 頼りになる人 (複数回答) (表 3-1-10)

近所の人	家族	親戚	友人・知人	行政担当者	高齢者総合相談センター職員	民生委員	医師	看護師	警察官	弁護士	誰もいない	その他
47名	13名	10名	4名	39名	27名	2名	17名	2名	26名	2名	12名	8名

1-2-2 因子分析結果

Bartlett test of sphericity では有意確率は、0.000 ($p < .01$)、よって本標本は因子分析に適合していると判断した。Kaiser-Meyer-Olkin measure の妥当性の測度は、0.713、よって標本の妥当性は望ましい水準であった。

因子分析の結果、2 つの因子が得られた。第一因子は平均値 2.19、標準偏差 0.8、 α 係数 0.78 であり、第二因子は平均値 1.44、標準偏差 0.55、 α 係数 0.71 であった(表 19)。第一因子を「居心地の良い」、第二因子を「心安らぐ」と命名した。

表 19 因子分析結果

項目	I	II	平均値	標準偏差
第1因子：居心地の良い $\alpha = 0.78$			2.19	0.80
6. 守られている場所	0.98	-0.14		
4. ありのままにいられる場所	0.78	-0.01		
3. いきいきできる場所	0.46	0.32		
5. 落ち着ける場所	0.45	0.13		
第2因子：心安らぐ $\alpha = 0.71$			1.44	0.55
1. 安心できる場所	-0.06	0.77		
2. くつろげる場所	0.07	0.73		
因子相関行列	I	II		
	I	0.336		

1-2-3 重回帰分析結果

因子分析で得られた第一因子(居心地の良い)と第二因子(心安らぐ)を目的変数として、居場所感に与える影響を検討するため重回帰分析を行った。

① 第一因子(居心地の良い)における検討

年代、参加きっかけ、健康感、地域での居住年数の説明変数において有意性があった。また、健康感と年代において相関関係があった(図 4)。

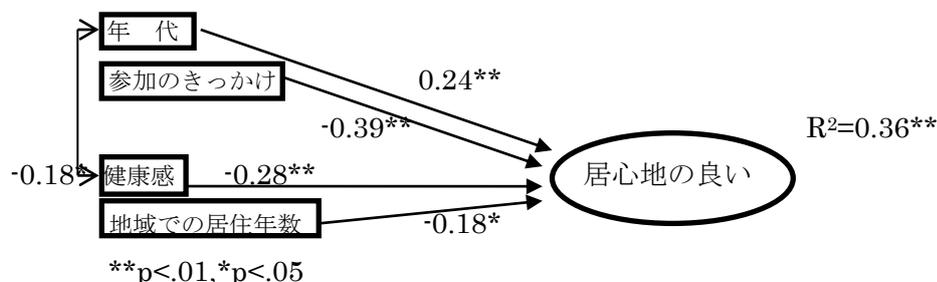


図 4 第一因子(居心地の良い)における重回帰分析結果

② 第二因子（心安らぐ）における検討

健康感、参加頻度、近所づきあいの説明変数において有意性があった。また健康感と近所づきあいにおいて相関関係があった（図 5）。

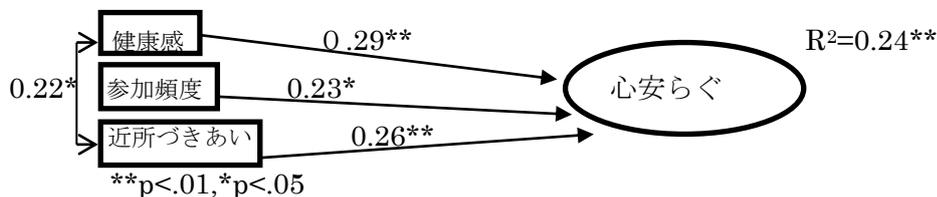


図 5 第二因子（心安らぐ）における重回帰分析結果

1-2-4 小括 2

アンケート調査結果からは、男性（12名）よりも女性（76名）が多く利用しており、年代では80歳代以上が77名と最も多くをしめていた。世帯構成では単身世帯が70名であった。利用年数は3年以上前から45名であり、利用頻度は月2回以上が49名であった。コミュニティカフェの位置づけは、安心できる場が87名、くつろげる場が86名、いきいきできる場が66名、ありのままでいられる場が40名、落ち着ける場が78名、守られている場が36名であった。近所つきあいではあいさつ程度が40名と最も多く、次いで日常的に立ち話をする程度が37名であった。友人・知人とのつきあいでは47名、親類・親戚とのつきあいでは50名がめったにないであった。頼りになる人では近所の人が47名と最も多く、次いで行政担当者が39名であった。

因子分析では「居心地の良い」、「心安らぐ」の2つの因子が求まり、重回帰分析の結果、2つの因子双方に健康感が影響を与えていた。

1-3 インタビュー調査結果

本文中の【 】は上位カテゴリー、《 》は中位カテゴリー、〈 〉は下位カテゴリーを示す。

1-3-1 利用者の意義

32 下位カテゴリー、11 中位カテゴリー、4 上位カテゴリーが抽出された (表 20)。

表 20 カテゴリー要約一覧表 (利用者の意義)

【上位カテゴリー】	《中位カテゴリー》	〈下位カテゴリー〉	要約
【葛藤】	《自立した生活継続に不安を感じる思い》	〈先の見通しの不確かさ〉	1時間先に自分がどうなっているかなんて分からない、今の自分の力でやりきれぬか全然分からない。それを考えると眠れなくなる。
		〈寂しさ〉	本音は寂しい、今までは他愛ない会話が出来ることが難しいとは思わなかったが普段当たり前にしていたことが出来なくなった。
		〈身体機能の低下〉	5年前、10年前に出来ていた日常生活の家事でさえも出来なくなった、自分の身体だもの一番よく分かる。
	《自立した生活継続へ意志を高める思い》	〈金銭的不自由さ〉	お金を貯めていなかったわけじゃないけど貯蓄したお金が毎月減っていくと贅沢は出来ないと思う、だっぴいつまで生きるか分からない。
		〈自己効力感〉	今まで自分で何でもやってこれたことが自信となっている。仕事でも人を助けていくタイプだった。知らないことがあると勉強もした。
		〈生きがいがい〉	囲碁やカラオケをしたり自分のやりたいことをやりたい時に出来るようになった、健康であればこそだと思ふ。
		〈自己選択する力〉	やりたいことがあってしたいことができる状態ではない。自分で生き方を自分が選んで決めていく。
【思考の渦】	《恐れ》	〈遠慮〉	やっぱり人様に迷惑を掛けたくない。自分が逆の立場だと大変かもしれない。
		〈難解さ〉	年をとってどうしても考え方が狭くなっている。心身の老いを自分が一番分かるから行動を踏み出せない、難しい。
		〈防衛反応〉	やっかいなことや難しいと思うとついつい動けない、がまんしてしまうことが多い。
	《希求》	〈孤独感からの脱出〉	夜なんか何とも言えぬ寂しさを感じる。このまま死んでしまったら誰がいつ気が付けてくれるんだろう、孤独を感じたくない。
		〈生活の質を向上〉	年をとることで出来ないこともある、持てる力を使って生きる喜びや楽しみを見出して生活を送る。
【ふらっと立ち寄れるお茶の間】	《出会いがある》	〈人間関係の広がり〉	特定の人のとの関わりから人間関係が広がっていく。
		〈場の広がり〉	人とのつながりからさまざまな「場」との結びつきができる。
		〈学びの広がり〉	さまざまな固定観念の捉われから解放されて学び成長する。
	《つながりがある》	〈地域の再認識〉	誰かが誰かを知っている、地域社会を再意識することで地域への意味づけが変わる。
		〈交流関係を築く〉	一人一人とのつながりを通じて新たな人を知り、つながりのきっかけを築く。
	《居心地の良さがある》	〈緩やかなつながり〉	柔軟で緩やかなつながりをうむ。
		〈いつ来てもいつ去ってもよし〉	いつ行ってもいつ帰ってもよい場になっている。誰に強制されることもなく自分の自由時間を持つ。
		〈安心して表出できる〉	何でも話せる、不満も話す。気を使わずに自分を表現できる。
		〈よりどころ〉	気張らずに肩ひじ張らずに自分らしく過ごせる場になっている。心のよりどころであり、生活のよりどころになっている。
		〈対等なつながり〉	支え、支え合う。受け入れ、受け入れてくれる。
《期待感がある》	〈茶菓の楽しみ〉	茶菓の接待を受ける心地よさと楽しみ。	
	〈ヒントが見つかる〉	今困っている問題やまだ顕在的になっていない問題解決に向かってヒントが見つかる可能性がある。	
	〈信頼できる、信頼される関係を持つことで自分をさらけ出す自信を持つ〉	信頼できる、信頼される関係を持つことで自分をさらけ出す自信を持つ。	
【気づき】	《思考する力を取り戻す》	〈本音の言える自信〉	今、出来ることをこれからも続けていけるようにする。
		〈持てる力を高める〉	今、出来ることをこれからも続けていけるようにする。
	《今この瞬間を積極的に生きる》	〈受け止める〉	瞬間瞬間を積極的に関わる。失敗は次の成功につながる気持ちで今この時を受け止める。
		〈主体的な行動〉	他人任せにせず自分の生き方に積極的に関わり行動をおこす。
		〈「これから」を持つ〉	これから自分がどうなりたいのか、どうしたいのか考える。これらに向けて積極的に生きていく。
	《社会環境の再認識》	〈家族や親戚との関係〉	近くにいる家族、親せきから気にかけてもらったり、守ってもらっていた気持ちを意識化し再認識する。
		〈地域社会との関係〉	支えられる視点ばかりでなく、出来る力から支える視点にも立てる。捉え方に柔軟性を持つことで肯定的関わりにつなげる。
〈意向に沿わない関係〉		自分の意見を持つ。意向に沿わない違いを知って補いつなったり刺激し合う関係へ再認識する。	

利用者からは、日々の生活について身体機能の低下や一人暮らしの寂しさから不安を感じる思いとできるだけ自分で頑張りたいとの思いなどからなる【葛藤】のカテゴリーであり、思いに答えの出せない《恐れ》と《希求》の相反する思いなどからなる【思考の渦】のカテゴリーであった。

こうした状況の中で、【ふらっと立ち寄れる茶の間】のような場としてコミュニティカフェを意識しているカテゴリであった。そこにいることで《居心地の良さがある》、人間関係の広がりなどの《出会いがある》ことや、さまざまな関係性を再認識するようすや新たな交流関係を得るなどの《つながりがある》、毎回違う茶菓の楽しみや生活のヒントを得る《期待感がある》状況であった。一方で、自分への【気づき】のカテゴリであった。これらのカテゴリは、一人暮らしの多い、参加高齢者における、自律性のある日々の生活を象徴し、生活における自己決定を重んじる特性を反映していると解釈し、これからも普段どおり日々の生活を送りたいと願うことが利用する意義と解釈した（図6）。

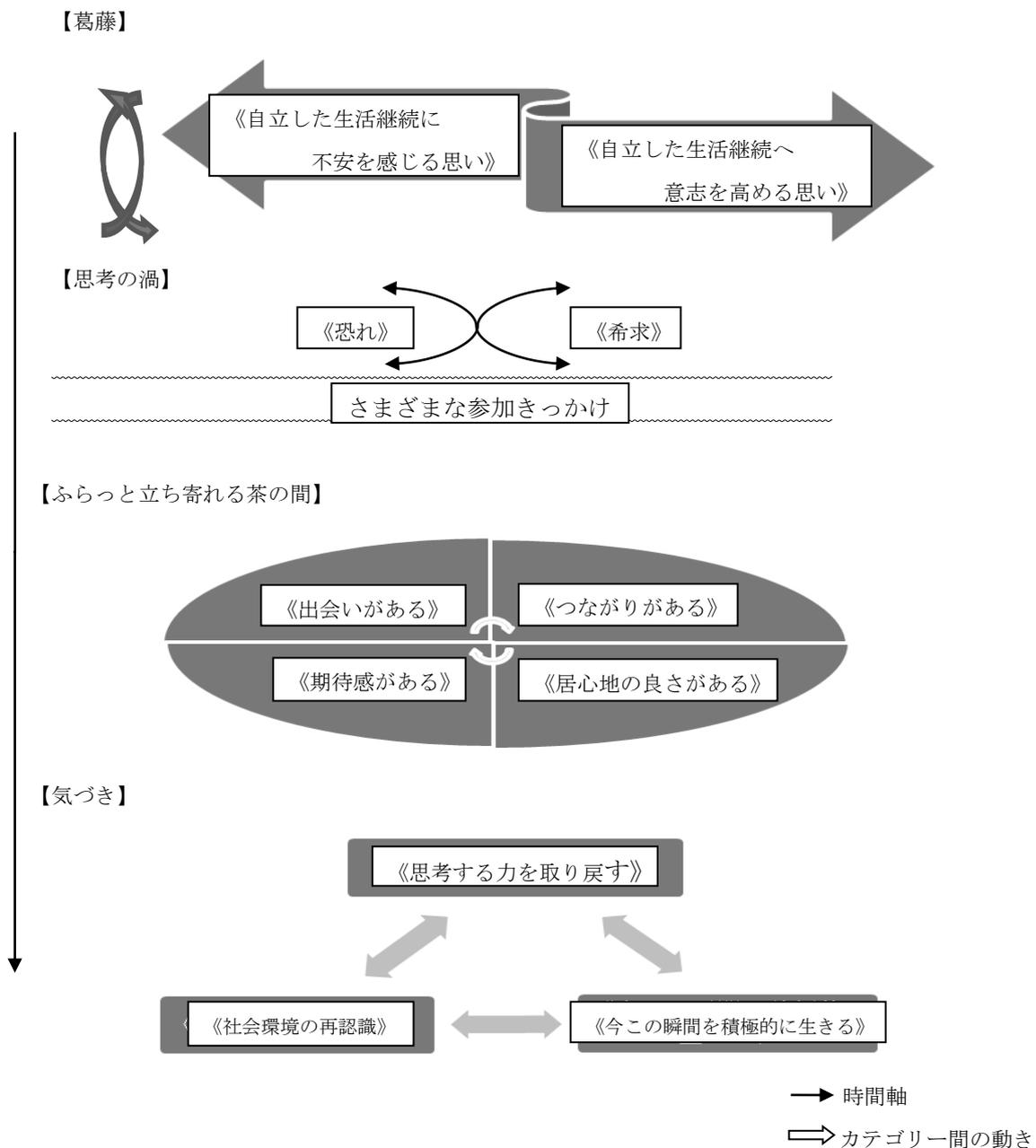


図6 利用者の意義

1-3-2 ボランティアの意義

37 下位カテゴリーを得て、17 中位カテゴリー、7 上位カテゴリーが抽出された (表 21)。

表 21 カテゴリー要約一覧表 (ボランティアの意義)

【上位カテゴリー】	《中位カテゴリー》	〈下位カテゴリー〉	要約
【恩返し】	《感謝》	〈人生への赦し〉	生きてきた過程を認めることで、これから役に立ちたいと願う気持ち。
		〈当たり前前の日常を当たり前前に過ごせる幸せ〉	昨日と同じように過ごすことのできる幸せを感じる。当たり前前に過ごしている当たり前前の生活に感謝する。
	《生きてきた証》	〈次代へ継承〉	自分が得た知識や学びを次世代に伝えていく。
		〈肯定的存在意義〉	頼られ、褒められ、信頼されることで自分を認め必要とされる肯定的存在意義へつながる。
《願い》	〈交流を持つ〉	人と関わっていたいと願う。他愛無い会話を楽しみ、一緒にいる。交わりたい。	
	〈主観的価値観からの脱皮〉	自己中心的な関係性や思いこみから脱皮のきっかけをつくりたい。	
	《低い自己評価》	〈出来ない自分に脅かされる〉	体力的にも精神的にも低下している姿に自己評価も低下する。
《役割変化》	〈出来ない自分に抵抗する〉	現実を受け止めきれずに抵抗感を抱く。あるがままの自分と向き合えない。	
	〈子離れ〉	自分の子どもとしての他者意識が抜けない。	
	〈親離れ〉	老齢の親と子どもの関係性に固執している。心理的に依存している。	
	〈敬称のない存在〉	何十年と敬称があつての自分だった。敬称がない自分への自己評価は低い。	
《人とかかわりの難しさ》	〈引け目を感じる〉	自信がなく、自分に引け目を感じるが多くなっている。自立たないようにしたり言動を控えてしまい自分らしくありのまま人と接することが難しい。	
	〈半信半疑な思いを持つ〉	他者関係に疑心暗鬼の念が強い。利用されるのではないかと半信半疑な思いを抱き、信頼関係が築けない。	
【専門家としてかわる】	《健康を守る》	〈傾聴〉	相手に注意を向けて傾聴することでバーバル、ノンバーバル両面において気が付くこともある。
		〈血圧測定〉	身近な健康のバロメーターとしての役割。抵抗感が少ない。
	《白衣姿でない関係性》	〈助言と指導〉	丁寧に話を聞くことで素直に助言や指導を聞く姿勢につなげられる。計算づくでない信頼関係の確保が大事である。
		〈自然体を促す〉	白衣で対応することは上下関係を生みやすい、隣り近所の人としての関係性が自然体を生み日々の生活を推測できる。
《抵抗感を減らす》	〈緊張したり不安を持ったりしやすい気持ちをカフェでの和やかな雰囲気がカバーしている。〉	緊張したり不安を持ったりしやすい気持ちをカフェでの和やかな雰囲気がカバーしている。	
	《お互いさま》	〈近づく老い〉	〈思いや期待を紡ぐ〉
《支え合う仲間とを感じる》	《支え合う仲間としての高齢者》	〈老いに寄り添う〉	先のことを考えると不安になる、日々の生活の中で感じる老いをカフェに来た時だけでもそっと寄り添う。
		〈支え合う仲間としてのスタッフ〉	時には支え、支えてもらう。相手の気持ちを尊重する仲間意識が強い。
	《前に進む力をつけていく》	〈自信のない自分と一緒にいることができる〉	同年代が多く、同じ思いを持っている人が多い。困っている時に頼りになる存在であり、必要とされる存在にもなる。
		〈一段一段を確実に超える〉	自信のない自分を受け止める、あるがままの自分も自分である。
《否定的思考と距離を持つ》	《周囲に影響されない芯を持つ》	〈完璧な自分へのこだわりを捨てる〉	より良い自分を追い求めることでハードルは高くなっていく。小さいハードルから一段一段成功体験をつかんでいく。
		〈出来ない自分も自分と認めてコントロールできる対象と認識する〉	個性を認めて、ありのままの自分を受け入れる。完璧な自分を目指すこだわりを持たないようにする。
	《「しょうがない」に肩代わりしてもらう〉	〈冷静に自分を見る。〉	冷静に自分を見る。一步離れて見ることで物事の捉え方は変わる。己を信じて認める。
		〈めげない心を持つ〉	自分を守ることも大事、受け流す勇気を持つ。
【自分と向き合う】	《自分を見る目が培われる》	〈客観的視点を習慣化〉	こうでなければいけないといった否定的思考から自由度の高い思考力を養う。
		〈参加者やスタッフから多くの視点を得る〉	客観的に物事を捉えること、自分を捉えることが重要である。冷静な見方を習慣化させる。
	《自分をさらけ出す》	〈ネガティブ思考の自分〉	多くの人から多様な視点を得る。自分が知らない気がつかなかった視点を得ることは大きい。
		〈ポジティブ思考の自分〉	否定的に捉えやすい場面や出来事や表現の癖を知る。否定的思考をする自分も自分である。
【幅広い役割】	《早期発見》	〈積極的に前向きな考え方で捉えやすい場面や出来事において表現の癖を知る。前向きな思考をする自分も自分である。〉	積極的に前向きな考え方で捉えやすい場面や出来事において表現の癖を知る。前向きな思考をする自分も自分である。
		《橋渡しの役目》	〈適切な医療や介護へつなげる〉
	《風通しの良い関係づくり》	〈出来ることと出来ないこと〉	丸投げではなく、願っていることを理解して適切な医療や介護につなげる。
		〈異分野を受け入れる〉	支援しようと思う気持ちが出来ないことを出来ないことと判断しにくくなる。客観性を持つ。
《専門職同士のコミュニケーション力》	〈狭い分野に凝り固まらずにひと手間かけて異分野の他職種とも目的を探る。異分野を理解することでさらに質を高める。〉	狭い分野に凝り固まらずにひと手間かけて異分野の他職種とも目的を探る。異分野を理解することでさらに質を高める。	
《必要とする専門性をバーバル、ノンバーバルから見定める力を養う、日々自己開示することで相手も自己開示する。〉	必要とする専門性をバーバル、ノンバーバルから見定める力を養う、日々自己開示することで相手も自己開示する。		

ボランティアからは、ボランティア活動のきっかけについて生きてやってこれたという自負など仕事や経験を次世代へ継承した状況などからなる【恩返し】の 카테고리であった。一方で、出来ない自分に抵抗する《心のゆがみ》と子どもの独立や退職から《役割変化》などからなる【低い自己評価】の 카테고리であった。

こうした状況の中で、年代の近い利用者が多く集うコミュニティカフェのボランティア活動から《近づく老い》への素直な思いやボランティア同士に《支え合う仲間とを感じる》ようすから【お互いさま】の 카테고리であった。そうした状況から自信を取り戻していく《周囲に影響されない芯を持つ》ようすや否定的な思いから一步踏み出す《否定的思考と距離を持つ》などからなる【前に進む力をつけていく】の 카테고리であった。これらの 카테고리は、高齢期にさしかかるボランティアの身体機能の低下、役割変化を感じる日々の生活ぶりを象徴するとともに、コミュニティカフェでのボランティアを通じて、これから向かう自身への老いに《ネガティブ思考の自分》と《ポジティブ思考の自分》の双方を認める性質などからなる【自分と向き合う】の 카테고리であった。ボランティアの医療職者からは、医療者としての《健康を守る》や敷居の低い《白衣姿でない関係性》の状況と専門性以外にさまざまな分野への橋渡しなどからなる【幅広い役割】の カテゴリが意義と解釈した（図7）。

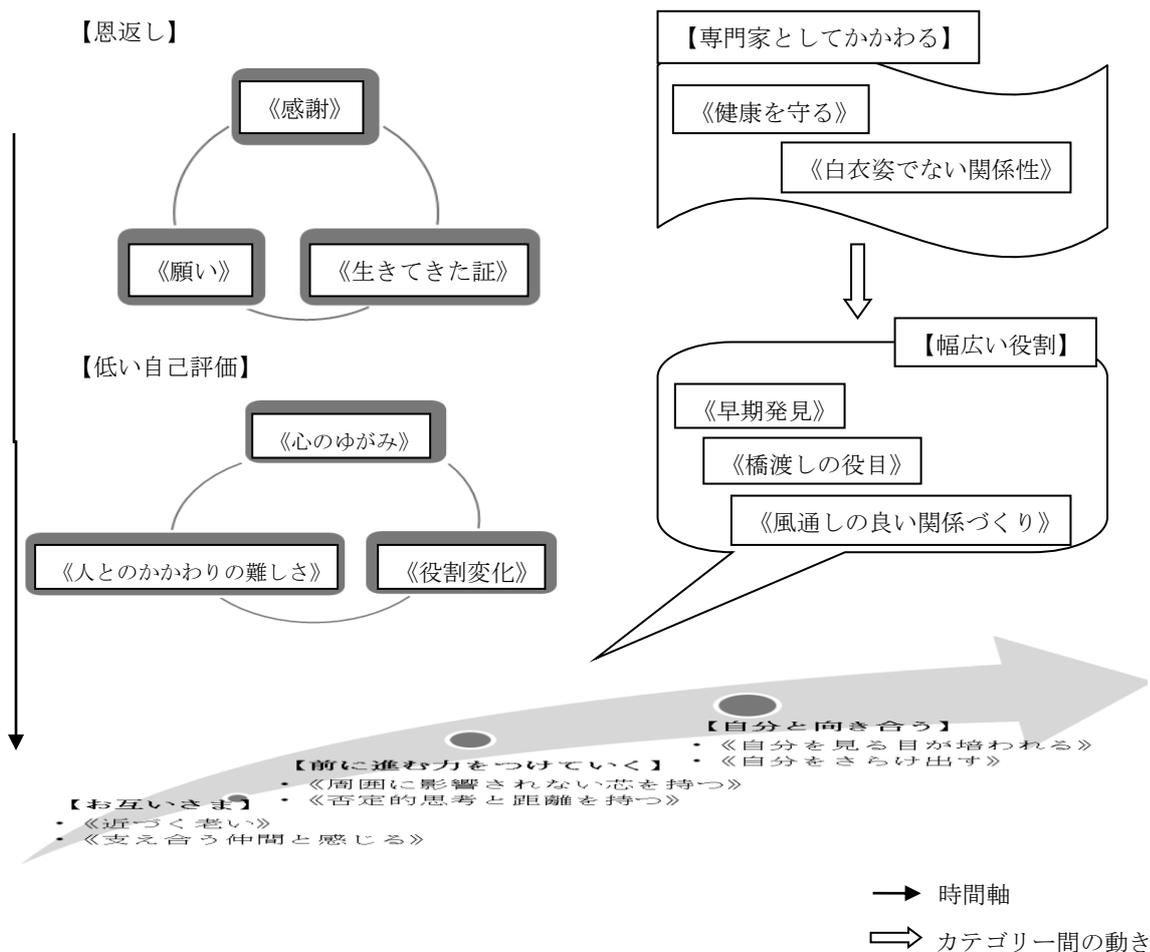


図7 ボランティアの意義

1-3-3 利用者、ボランティアの期待

20 下位カテゴリー、9 中位カテゴリー、3 上位カテゴリーが抽出された (表 22)。

表 22 カテゴリー要約一覧表 (利用者、ボランティアの期待)

【上位カテゴリー】	《中位カテゴリー》	〈下位カテゴリー〉	要約
【双方の経験や知恵を活用する場づくり】	《現状の許容》	〈目標の再選択〉	現状を許容することで新たな目標を能動的に選び直す。
		〈目標の妥協〉	否定的な対処ではない、自らが身の丈に合った目標を選択し直す。
	《望み》	〈抽象的望み〉	具体的な望みではない。自身の個性や特技を活かしたいと望む気持ち。
		〈具体的望み〉	具体的に自分が経験してきたこと学んだことを活用したいと望む気持ち。
	《次世代へつなげる》	〈先人としての自覚〉	成功体験も失敗体験も乗り越えてきた自負があるからこそ次世代につなげる役目がある。
		〈道しるべ〉	自分の経験や知恵を活用することで、次世代へつなげる道しるべの役目がある。
【支援する関係づくり】	《個人プレー》	〈個々の視点を活かす〉	専門家からの見方や捉え方を活用する。
		〈個々の役割を自覚する〉	専門性の役割を自覚して率先して関わる。
	《チームプレー》	〈互いの経験を活かす〉	様々な経験から、専門性を越えた見方や考え方を包括的に活用することで支援の幅が広がる。
		〈互いの専門性を尊重する〉	互いの専門性を尊重して認識することで、役割を共有して補完していく。
	《難しさ》	〈長期的関わりの難しさ〉	単身世帯が多く、長期的に関わることに限界がある。
		〈行政との関わりの難しさ〉	行政の方針に影響を受けやすい。カフェ独自の特色を活かしきれない。
〈地域との関わりの難しさ〉	地域が持つ力や情報力が大切である。民生委員や自治会との情報共有には温度差がある。		
【「プライベート」と「パブリック」との接点】	《心理的意味づけ》	〈捉われからの解放〉	人との出会いや体験を通じて、新しい適応モデルをつくる。
		〈自己像の再獲得〉	客観的な現実の自分を知り、自分を認め、受け入れていく。
		〈新たな交流の苗床機能〉	出会いやつながりから新たな交流関係を育て紡いでいく機能を持つ。
	《社会的意味づけ》	〈地域への関心移行〉	挨拶程度だった関係から一歩踏み込んだ関係へつなげる。地域への関心を持つ。
		〈地域への信頼感〉	対等な関係性を深化させていく。地域への信頼感や安心感を抱くことで居心地の良い場となっていく。
	《偶然的意味づけ》	〈タイミング〉	問題視には至っていないことや困りごとにおいて予防的役割の機会を見つける。
〈縁〉		計り知れない何らかの関係を持つきっかけとなる縁を得る。	

利用者、ボランティアからは、仕事で磨いた腕や経験から生きてきた自負などからなる【双方の経験や知恵を活用する場づくり】のカテゴリーであった。このカテゴリーは、おのおの《現状の許容》が必要であり、自らが身の丈にあった新たな目標を選び直す作業がある。その作業は、否定的な対処ではない肯定的目標の妥協として捉えていた。経験や知恵を活用していくことで、個性や特技を活かしたいという抽象的な望みと具体的に自分が経験してきたことや学んだことを活用したいと具体的な望みの両方を持っている。そうした《望み》を抱くと同時に《次世代へつなげる》意志も強く、乗り越えてきた自負があるからこそ次世代につなげる役目や道しるべとなり得る。一方、公の場と私の場をつなぐ役割からなる【「プライベート」と「パブリック」との接点】のカテゴリーであった。このカテゴリーは、人との出会いを通じて固執した考え方から新しい適応が作られ、自己像の再獲得になっていく。接点を契機に人との新たな苗床機能が作られ《心理的意味づけ》の機能や居住する地域を身近に感じることで何気ないことにも関心を持ち、関係性も深化していく《社会的意味づけ》の機能、予想や想像していない縁やタイミングから予想外の《偶然的意味づけ》の機能を生んでいく。ボランティアの医療職者からは、こうした機能や関係性を作り出すなどからなる【支援する関係づくり】のカテゴリーであり、コミュニティカフェを通じて、個人で支援していく《個人プレー》やかかわりのあるさまざまな人たちと互いの専門性を包括的に活かしていく連携力《チームプレー》を活かす可能性であった。これらのカテゴリーは大都会の希薄な人間関係を象徴するとともに、一人暮らしが多く、長期的かかわりが難しい問題や行政や地域住民とのかかわりの《難しさ》もある状況からも、期待と解釈した (図 8)。

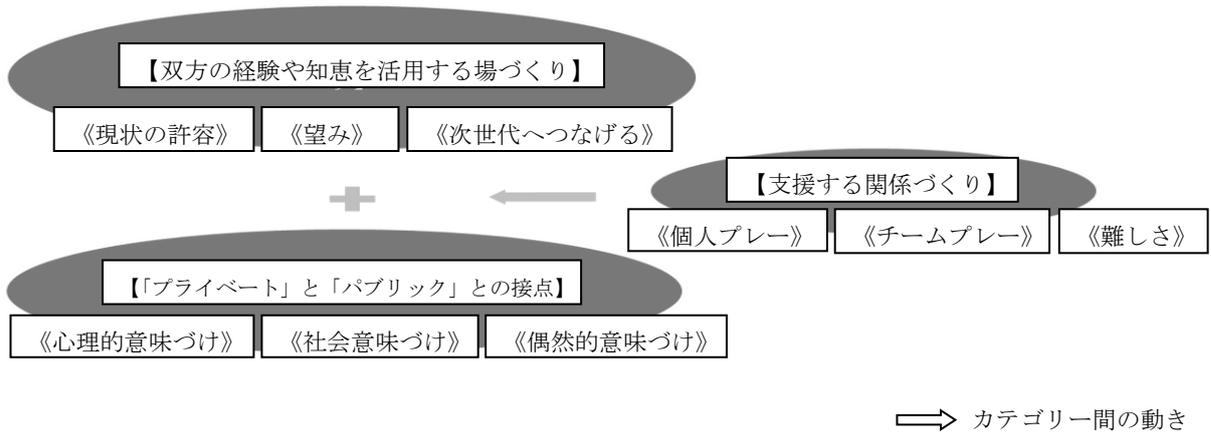


図 8 利用者、ボランティアの期待

1-3-4 代表者のインタビュー調査結果

31 下位カテゴリー、15 中位カテゴリー、6 上位カテゴリーが抽出された (表 23)。

表 23 カテゴリー要約一覧表 (代表者インタビュー調査結果)

【上位カテゴリー】	《中位カテゴリー》	《下位カテゴリー》	要約
【きっかけづくり】	《人とのきっかけづくり》	《希望を生み出す》	他者との交流のきっかけをつくることで明日への希望を生み出す。
		《関係の質の変化》	同じ居住地域にいる隣人から知人へと深化する。
	《社会とのきっかけづくり》	《外向き行動への変容》	人とのつながりから内なる自分への行動から外に向かう自分への行動に変わっていく。
		《再認識》	現状を知ることによって地域や行政等とのつながりを認識し直す。
	《地域とのきっかけづくり》	《主観的固執を和らげる》	主観的な因われから現状を客観的に捉える。
【自由さ】	《利用形態の自由さ》	《人任せから主体的取り組みへ》	人任せの気さきから自分で考え決めていく主体性を取り戻す。
		《興味を持つ》	居住地域への興味や関心を持つことで、愛着がうまれ関わりが深くなる。
	《つながろうとする気持ち》	強制されるのではなく、自ら地域に関わりを持とうとする気持ちである。	
	《キーマンの存在》	自治会やつながりのある人からの後押しは大きな力になる。	
	《気ままな連帯感》	《自由な活動》	自分がどう過ごすか、自身が選択して決める。強制されない自由な活動をする。
【全員が主人公】	《共に成長する》	《自由な時間》	開設時間内は自由に時間を使う。強制されない自由な時間を持つ。
		《仲間意識》	居住者同士との心のままにつながる自由な仲間意識。
	《共に生きる》	《成長感を得る》	成長感を得ることで個々に抱える問題軽減に役立つ。
		《自分自身のありよう》	共に成長することで喜びを見出し、自信を持って生きる力をつけていく。
	《パートナー関係》	《パートナー関係》	お互いに支え合うパートナー関係の構築につながる。
【自立へつなげる】	《生きがいづくり》	《スイッチをオフに出来る関係》	共に肩ひじ張らずに素直なありのままの自分で過ごせる関係。
		《出番をつくる》	高齢者にとってもボランティアにとっても自分の出番はここだと思える場を見つける、自分だから考えられることを見つけれられること、生きがいにつながる。
	《新しい集いを生む》	《役に立つ》	自分が役に立つ頼りになる存在だと思える場を見つける、役に立っているんだと認識することで前向きな交互作用として思考がうまれる。
		《自主的な活動支援》	自分に来ることを見つけるきっかけをつくる。地域で暮らす地域住民同士だからこそできる活動や支援がある。
	《自活の喜び》	《干渉と優しさの違い》	自立を支えることはその人の生き方を尊重することでもある。良かれと思った助言がその人を否定する結果になってしまつては意味がない。願っている思いに近づくためにを念頭におく。
【非日常感を味わう】	《お出掛け》	《求める生活へサポートづくり》	高齢者が求める生活を知ることから始まる、自分の思いを伝えることに抵抗感を持たずに開示願う基本的姿勢から始まる。自立した生活を送る幸せを持つことで生きる意欲につながるサポート。
		《外出着に着替える》	普段の家着から着替えて外出着に。めったにつけないアクセサリー、そのアクセサリーが話のきっかけになって回想に思いを持つこともある。若い頃を思い出すことで自分の持っている力を再認識する場合もある。
	《茶菓の接待》	《よそゆき表情と言葉》	客人在ることでよそゆきの表情は加速する、普段以上に緊張の中に肯定感が高まる。
		《化粧》	見られた化粧つけない自分とは違う自分になる。
	【ひらかれた場づくり】	《固定化への抵抗》	《特別感》
《こころ躍る》			接待を受けることでこころは躍る。日常生活では感じない思い。
《押し付けられない利用》		《新参者も仲間》	新しい人が参加しやすいように受け入れ認める仲間意識を持つ。
		《決めつけない役割分担》	ボランティアの向き不向きもあって受付担当、給仕担当と固定化しつつある。決めつけない固定化しないことで無限の可能性が見つかる。
《つなげる》	《経験や個性を活かす》	その場その場で長年培ってきた経験や個性や特技を活かせる場につなげる。	
《送迎の意味づけ》	《送迎の意味づけ》	一人で来れない車椅子等の高齢者には迎えに行く。高齢者の主体的判断を出来得る限り対応する。	
《適切な見立て》	《適切な見立て》	医療職者も加わり、多様な視点で参加者を見守る。適切な見立てにより最適なつながりをつくる。	

代表者からは、開設のきっかけについて生きる希望を持ち得るようになると《人とのきっかけづくり》や《社会とのきっかけ》、居住地域へ興味を抱くことで地域への愛着を生むと《地域とのきっかけづくり》などからなる【きっかけづくり】の категорияであった。

こうした状況の中で、強制されない気ままなどからなる【自由さ】の categoria であった。この categoria は、コミュニティカフェにおける自由に過ごす時間、すなわち好きなように自由に活動するといった《利用形態の自由さ》のある状況からお互いが仲間意識を持つことで自由な《気ままな連帯感》を作り出していく categoria である。

利用者にとってのコミュニティカフェではあるものの、かかわるボランティアや医療職者にとっても大事な位置づけになっているなどからなる【全員が主人公】の categoria であった。双方から得る学び《共に成長する》ようすや良きパートナーとして《共に生きる》という意識が双方に生まれていく。外出機会の少なくなった利用者にとってコミュニティカフェは、家着から外出着に着替えて外出する機会となっている。よそゆきの表情を浮かべてよそゆきの言葉を使う《お出掛け》することや《茶菓の接待》を受ける特別感も日常生活では感じ得ないところ躍る気持ちとなっており、前向きな思考となっていくなどからなる【非日常感を味わう】の categoria であった。これらの categoria は、大都会で暮らす一人暮らしの高齢者の精神的な支えを象徴するとともに、頼る人のいない独りぼっちの感覚や状況と解釈し心身の健康を反映する意義と解釈した。

期待では、従来から利用している高齢者の他にこれから利用する高齢者も心地よい場となる状況や誰でも利用しやすいなどの【ひらかれた場づくり】の categoria であった。ボランティアにとっても決めつけない柔軟な役割分担をとることで個々の新しい可能性の発見にもなり、生きる糧やそれぞれの経験や個性を活かす場にしていくなどからなる《固定化への抵抗》、コミュニティカフェカフエの特色の一つである送迎も利用者の主体的な判断が土台である《押し付けない利用》、もう一つの特色である医療職者のかかわりをも加わることで、医療機関や福祉機関とは違う、柔軟で多様な視点から適切な見立てに《つなげる》働きは大きい。また、おのおのが自分に出来ることを見つけていく、そこから《新しい集いを生む》状況や、役に立っていると認識することで《生きがいづくり》につながり、《自活の喜び》に結んでいくなどからなる【自立へつなげる】の categoria であった。これらの categoria は、自律性の高い生活を象徴しており、一人暮らし高齢者の生活圏における近隣住民との関係性と日頃の付き合いや交流に関する期待と解釈した（図9）。

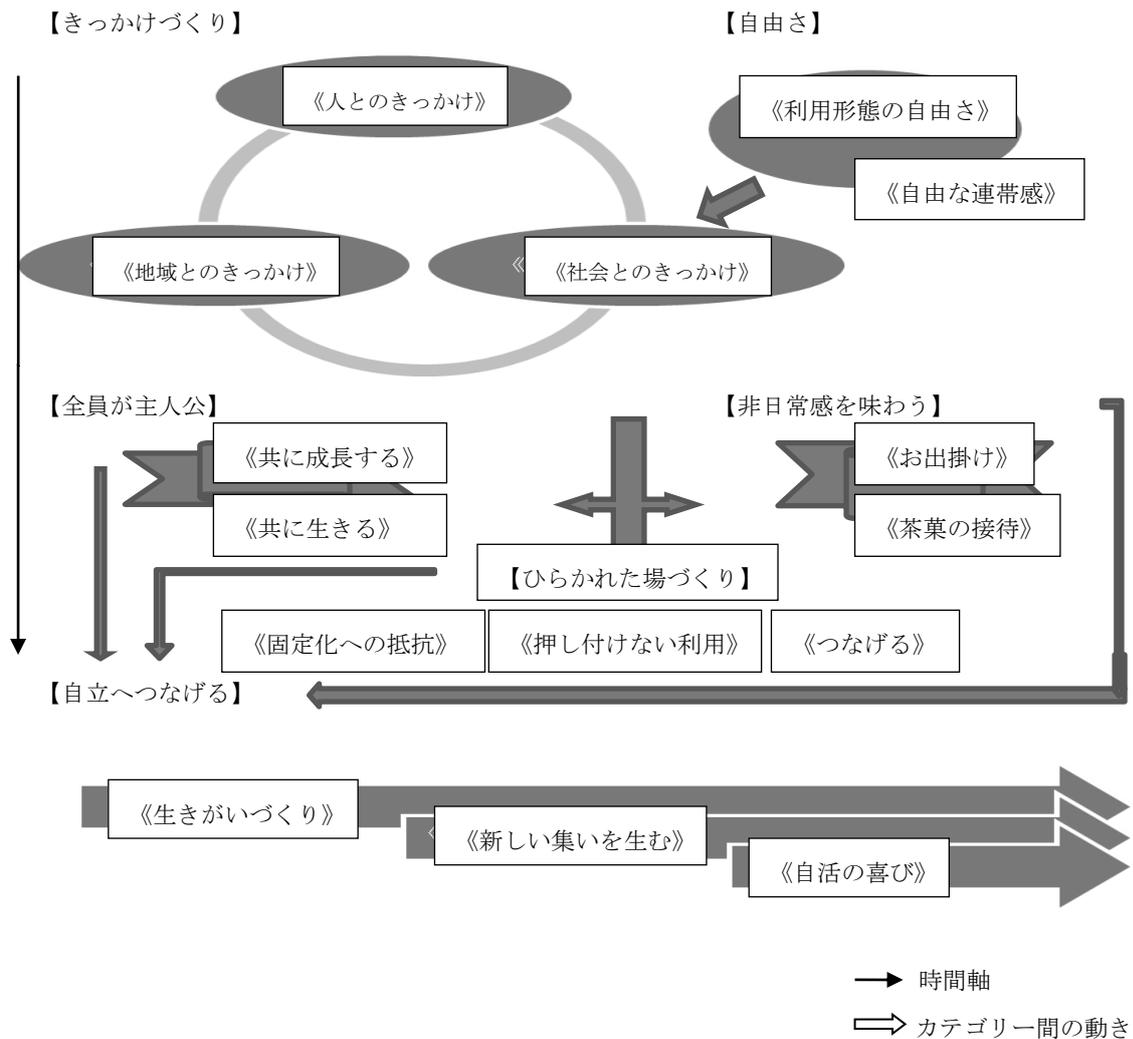


図9 代表者インタビュー調査結果

1-3-5 小括3

インタビュー調査結果からは、3つの視点とも肯定的な意義を有していた。利用者では、利用することで、《出会いがある》、《つながりがある》といった関係性が育まれることで、多くの【気づき】を得ていた。自らが《思考する力を取り戻す》ようになり、《社会環境の再認識》につながっていた。《いつ来てもいつ去ってもよし》といった自由さが《居心地の良さ》を感じて【ふらっと立ち寄れるお茶の間】のような気軽に立ち寄れる身近な場となっていた。ボランティアでは、年代が近いこともあり【お互いさま】と対等な関係性を持つようになり、ボランティア活動が自らの【前に進む力をつけていく】働きになっていた。代表者では、【きっかけづくり】や【自立へつなげる】とした場であると捉えているものの、かかわる【全員が主人公】であり、ともに成長していく場と認識していた。コミュニティカフェで過ごす時間や関係性には【自由さ】があることで《居心地の良さがある》と利用者と同様な認識が得られた。期待では、【双方の経験や知識を活用する場づくり】が生きがいにつながるとし、能動的なかかわりを期待していた。そこには、住み慣れた地域で暮らすためにも【自立へつなげる】ことだと考えていた。

2. 研究2：カフェメモリーとカフェだんだんについて一代表者の考え方

本文中の【 】は上位カテゴリー、《 》は中位カテゴリー、〈 〉は下位カテゴリーを示す。

2-1 「カフェメモリー」代表者インタビュー調査結果

31 下位カテゴリー、15 中位カテゴリー、7 上位カテゴリーが抽出された(表 24)。

表 24 カテゴリー要約一覧表 (カフェメモリー代表者インタビュー調査結果)

【上位カテゴリー】	《中位カテゴリー》	〈下位カテゴリー〉	要約
【都市型コミュニティ】	《つながる》	〈孤立を防ぐ〉	孤立を防ぐためにも、地域でつながりをつくるのが大切である。
		〈連携役〉	地域社会との橋渡しの役目、支援される側のみならず社会資源としてのニーズを掘り起こす。
	《頼りになる》	〈ネットワークの入り口〉	ニーズに沿ったネットワークの入り口としての役割を担うことで、地域で頼られる存在となる。
《土着性の回復》	《土着性の回復》	〈区民としての自覚〉	新宿区民としての自覚を持つ。
		〈区民としての誇り〉	大都会に住む誇りを持つ。
		〈地域を愛する思い〉	居住地域への愛着を持つ。
【視点の多様化】	《「従」から「主」へ》	〈固定概念からの脱皮〉	カフェは誰のためでもない、関わりを持つすべての人が主人公である。
		〈逆ディサービス〉	施設からカフェに出掛ける。施設入所者も地域住民もカフェでは中心である。
	《一人一人を理解する》	〈自己理解〉	他者、地域、社会との関わりから自分を理解する。
【接待を受ける】	《高揚感》	〈会話の促進〉	茶菓を媒体に会話が弾み、気持ちも高揚する。
		〈わくわく感〉	接待を受ける客人としての立場、わくわくした気持ち。
	《心地よさ》	〈心地よさ〉	客人とした立場にいて、心地よい場になり時間になる。
【思いを表現する大切さ】	《思いを発信する》	〈理解してもらう〉	素直な思いを発信することで初めて自分を理解してもらえる。
		〈知ってもらう〉	素直な思いを発信することで初めて自分もらえる。
	《思いを受信する》	〈理解する〉	相手の思いを受けとめることで初めて理解できる。
【前向きな介護】	《負担感から楽しみへ》	〈笑顔の復活〉	介護から離れた場を持つことで次への力を育てる。笑顔を取り戻す。
		〈意味づけの変化〉	介護者の素直な思いを話すことで、介護者は新たな気づきがある。介護への意味づけも変化する。
	《負担感から解放感へ》	〈個からの解放〉	家族介護者は、個々人として捉えやすい。個から社会として介護を支えるきっかけをつくる。
【地域に開かれた場づくり】	《出会いの場》	〈主体者として歩む〉	外部機関の知識を得たり、地縁を活用することで、介護する日常生活が安定する。
		〈存在を知る〉	地域住民と出会うことで受け手にならずに主体者として歩むきっかけになる。
	《受け入れられる場》	〈あるがままを受け入れる〉	地域とつながりを持たずに存在すら把握できていない、「ここに住んでいる」と発信して受信することで存在を知る。
【生きる希望を育む】	《希望の再発見》	〈老いとの向き合い方〉	それぞれの強さ弱さを認識して、あるがままを受け入れる姿勢を持つ。
		〈生きがい創出〉	自分を開示して初めて人も開示する。コミュニケーションが交わることで受容感を持つ。
	《主体的に取り組む将来像》	〈今のままでいつまでも〉	老いは決してマイナスだけではない。考え方や捉え方でプラスな面も見えてくる。
		〈継続への努力〉	生きがいややりがいを見つけることで、生きる糧につながっていく。
		〈頑張りたい〉	今のままでいつまでも地域で過ごしていきたいと思う。
		〈頑張りたい〉	地域で今の暮らしを継続するために日常生活の中で運動したり食事に気をつけたりと努力を重ねていく。
			いつかはお世話になるかもしれないが、頑張れる間は今の生活を送れるように頑張りたい。

カフェメモリーは高齢者複合施設内の集会室で、毎週木曜日の午後 2 時から 3 時まで行われていた。

代表者からは、開設のきっかけについて高齢者に東京の中央部に位置する新宿区民としての自覚や新宿区に住む誇り、地域社会の身近な存在とした《土着性の回復》や孤立を防ぐためにも地域社会との連携役とした《つながる》役目や高齢者のニーズに沿った《頼りになる》存在などからなる【都市型コミュニティ】のカテゴリーであった。

こうした状況の中で、自分を知ってもらう、人から理解してもらう、相手を知って自分が理解するといった【思いを表現する大切さ】のカテゴリーであった。また、《一人一人を理解する》ことや理解しようと思う状況からなる【視点の多様化】のカテゴリーであり、そこには固定概念から脱皮して、目の前の今を見て理解していこうと素直に思う気持ちにつながる思いや一人一人が

2-2 「カフェだんだん」代表者インタビュー調査結果

34 下位カテゴリー、15 中位カテゴリー、7 上位カテゴリーが抽出された(表 25)。

表 25 カテゴリー要約一覧表 (カフェだんだん代表者インタビュー調査結果)

【上位カテゴリー】	《中位カテゴリー》	〈下位カテゴリー〉	要約
【元気な高齢者を育む】	《生き方を模索する》	〈長年培ってきたリソース〉	元気なうちに楽しみながら人の輪を広げて趣味を活かして長年培ってきた知識や技術を活用して何が出来るかを模索する。
		〈出来ることの再認識〉	自分はこんなことが出来る、こんなことが役立つと再認識すること。自分だから出来ることはまだまだいっぱいある。
	《人の輪を広げる》	〈隣近所からもう一歩先へ〉	隣近所の顔見知りから一歩踏み込んだ関係へつなげる。名前を知ることや挨拶をすること、人の輪は広がっていく。
		〈比べるから認める関係へ〉	人と比べる関係から個々の違いを認める関係にしていける。
【相互扶助の意識化】	《風土としての構築》	〈心の視野を広げる〉	囚われた思考からいろんなやり方考え方があるんだという柔軟性を持つ。
		〈気軽さ〉	気軽にふらっと立ち寄れる関係をつくっていく。お互いがお互いを支え合っていく。
	《仲間意識の構築》	〈身近かさ〉	必要なときに身近かにいる存在。
		〈シンプルさ〉	お互いに支え合い、支える気持ちをシンプルに誰にでも分かりやすくする。
【恥の文化】	《頼み、お願いすることへの否定的文化》	〈仲間づくり〉	同じ地域に居住して互いに成長し合う仲間意識をつくっていく。
		〈罪や恥としての意識〉	頼み、お願いすることはいけないことだという思いが強い。お願いすることは自分でできないことへの恥をさらしているのと否定的な感情が強い。
	《我慢強さへの肯定的文化》	〈世間体や意地〉	否定的な気持ちが世間体を気にする要因となっていく。頼みお願いしないという固くなな思いを持つ。
		〈踏ん張る〉	自分のことは自分で頑張るってやるのがよしとした肯定的思い。
【ふれあう場】	《心を通わせる》	〈自力こそ美德〉	自分で頑張ることが美德であるとした肯定的思い。
		〈気張らない〉	気張らずに自然体でつながる。
	《信頼関係を築く》	〈無理をしない〉	無理をして話を合わせたり、状況をつくらない。
		〈平等な立場〉	それぞれが受け手にも送り手にも平等な立場である。
【持ってくるもの】	《茶菓の接待を受ける》	〈迎合しない〉	自身の思いとは裏腹に他者に気に入られるように調子を合わせたりしない。
		〈頼りになる〉	この人には素直な思いを話せる、話しても安心だと思える人になる。
	《得るもの》	〈非日常感を抱く〉	茶菓の接待を受ける。ソーサーのあるコーヒーカップで非日常感を抱き、心地よい気持ちから相手との距離感が縮まっていく。
		〈希望をもたらす〉	交流が促される。役割ができて日々の生活に充実感ができる。
【継続における課題の認識】	《固定化しない雰囲気づくり》	〈新しい自分につながる〉	生きる支えや目標につながっていく。自分らしさを保っていけることへの気づきと新たな目標を考えることができる。
		〈感謝する〉	自分にもできることがあることへの気づきが自信につながっていく。自己イメージをつくり直す自身の再定義につながる。
	《レッテル化しない柔軟性》	〈苦しみや困難を過去形にする〉	人生に感謝することで乗り越える勇気と力がついていく。
		〈学ぶ体験を重ねる〉	苦しいと思っていたことや困難だと思っていたことに新しい視点を得ることで乗り越えるきっかけをつくり過去形になっていく。
【後継者の育成】	《活動意欲の向上を促す》	〈新規利用者へのフォロー〉	継続者が多く雰囲気が決まって新しい人が入りにくいのではないかと察する。席が固定したりまだ来ない友人の席までとっておく人もいる。いけないとはいえないがボランティアがフォローしていく体制を作っていく。
		〈多様なプログラムづくり〉	毎回、イベントを行う。講習会だったり音楽会だったり医療や福祉の情報提供だったり、旬の話題を提供していくことで来る楽しみになっていく。スタッフやボランティアにとっても楽しい時間であることでモチベーションが高まり継続していく。
	《仕事としての取組み》	〈先入観を持たない〉	この人はこうだと決めつけない。その人を知るきっかけポケットはもつとある。
		〈見ることの実質〉	参加者の顔を見て姿を見てその人の今を知るようにする。
《仕事としての取組み》	〈地域への愛着〉	机上ではない地域の現状を把握して欲しい、何が必要で何が足りないのか、答えはシンプルな気がしてならない。誰かがやってくれるからと思ったら育たないし進まない、変わらない。	
	〈組織としての運営〉	縁あってこの地域で生活を共に送っている。住民一人一人が地域を愛して活躍する場を持って欲しい。	
	〈将来性のある仕事〉	多くのカフェがボランティア主体で行われているが、長期的視野を考えるためにも仕事としてのカフェ運営も必要な部分である。	
《魅力のある仕事》	〈魅力のある仕事〉	仕事として取り組むためには、長きにわたって関わって欲しい。自分の生活設計も組めるような将来性を持つことは大切である。	
		魅力ある仕事として発信していきたいと考える。魅力があることで人は多く集まって来る。	

代表者からは、開設のきっかけについて元気なうちにこれからの《生き方を模索する》ことが《人の輪を広げる》などからなる【元気な高齢者を育む】のカテゴリーであった。このカテゴリーは、近所の顔見知りから一歩進んだ関係へつなげていくことであり、自分と他者を比べる見方

から個人を認めていくことでつながりは広がっていく。また、気軽で身近なコミュニティカフェの存在はつながりを持つきっかけとして大きく、精神的な環境としての《風土としての構築》も土台となり、高齢者もボランティアも同じ仲間として意識していくことで相互に助け合う意識が生まれていく《仲間意識の構築》からなる【相互扶助の意識化】の категорияであった。

こうした状況の中で、自然体で過ごせる場として気張らない《心を通わせる》気持ちやボランティアや高齢者が《信頼関係を築く》ことから、初めて自分の思いを話すことが出来ていく。また、《茶菓の接待を受ける》といった非日常感を抱く客人としての心地よい環境の場になることで、人との距離感が縮まり、心と心の触れ合いが生まれて互いに親しくなっていくなどからなる【ふれあう場】の categoria であった。人とのふれあいから【持つてくるもの】の categoria であり、人との関係性に変化を生じることで希望を生み、新しい自分につながっていく《得るもの》や人との触れ合いから困難だと思っている問題や苦しみに新しい捉え方をつくり、勇気を持つことで《乗り越えるもの》も持つてくる。唯、そこには人へ《頼みお願いすることへの否定的文化》と《我慢強さへの肯定的文化》といった【恥の文化】の categoria であり、影響を及ぼしている。この categoria は、他人がどう見るか、どう感じるかといった世間体を気にして頑なな意地を作り、自力で頑張る姿が美德といった人に弱さを見せることへの否定的な意識が強く、素直な思いを話すきっかけを作ることは簡単ではないと解釈し、《信頼関係を築く》ことの重要性と捉え、人との触れ合いや相互扶助の働きを難解にする。

さまざまな意識の変化を生むコミュニティカフェであるが、継続利用を促す施策には困難が付きまとう。既存の利用者にとっても一人利用から、顔見知りが増えることでグループ化などといった利用形態は変化する。新規利用者やグループ化していない利用者にも心地よい場となるように《固定化しない雰囲気づくり》や新規利用者へのフォローとしての役割や話題提供等といった多様なプログラムづくり、高齢者やボランティア、運営側が利用者一人一人に先入観を持たない固執から新しい発見へ《レッテル化しない柔軟性》などからなる【継続における課題の認識】の categoria であった。さらに、ボランティア運営という立場から、《仕事としての取組み》や《活動意欲の向上を促す》からなる【後継者の育成】の categoria であった。これらの categoria は、一人暮らし高齢者とのつながりやかかわりを継続する意味や地域の現状を知って考える力を育む機会を早い段階から学び得ることが地域への愛着を育てると解釈した（図 11）。

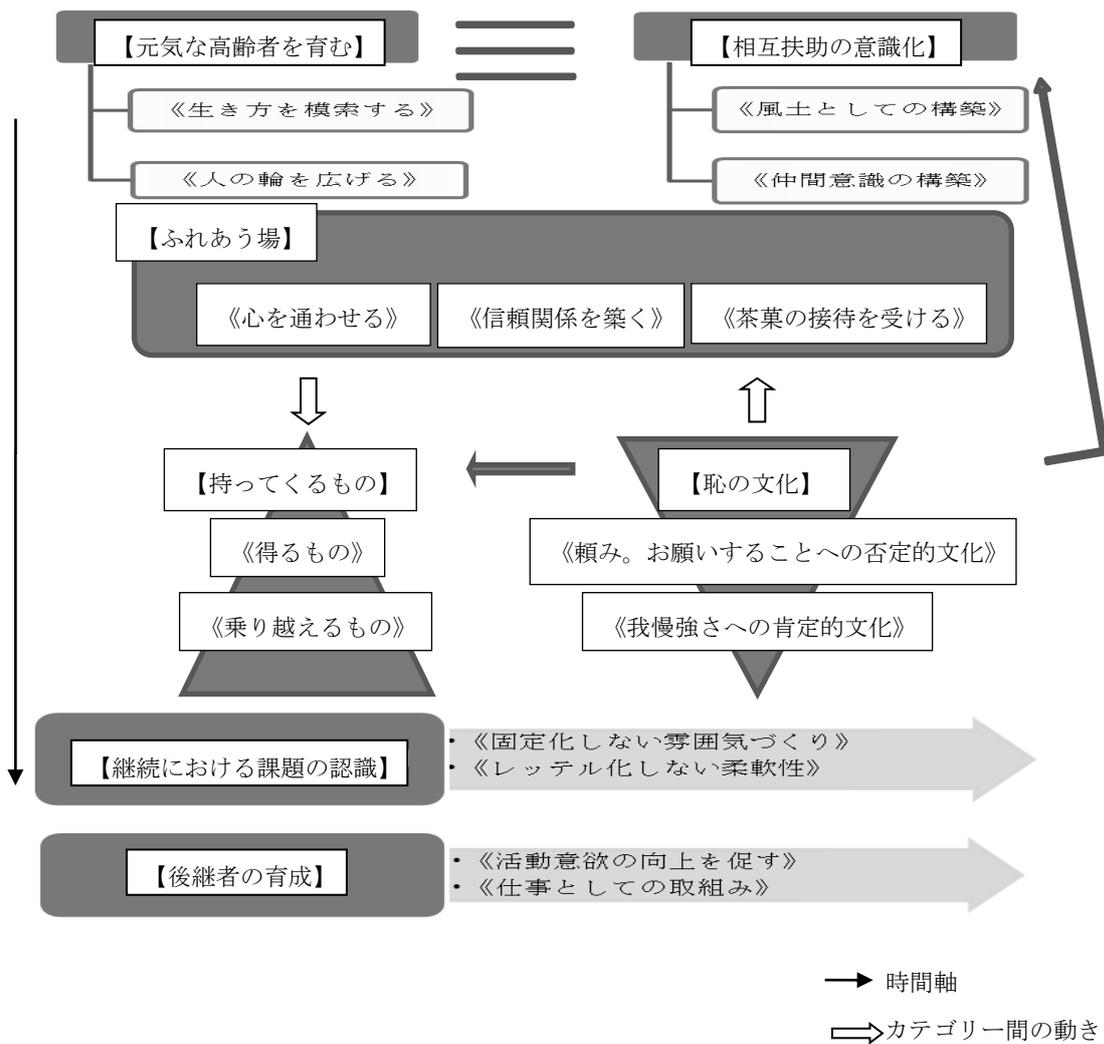


図 11 「カフェだんだん」代表者インタビュー調査結果

2-3 小括 4

上述の「ほっと安心カフェ」と同じ新宿区地域安心カフェの2か所である。「カフェメモリー」では、【都市型コミュニティ】の形を理念に開設されており、現状も大きな差異はなかった。複合施設内での特色を生かした介護者や家族への場としての意義を有していた。【生きる希望を育む】前向きな場や《出会いの場》といった関係を作り出すことが【地域に開かれた場づくり】につながるとしていた。「カフェだんだん」では、【元気な高齢者を育む】と、元気なうちにつながりを作るための場として位置づけていた。一方で、自らの思いを話すことへの抵抗感が強い高齢者が多く、《信頼関係を築く》ことの重要性があると捉えていた。また、運営を継続するために【後継者の育成】や既存と新規利用者がともに居心地の良い場を目指して【継続における課題の認識】があった。

第4章 考察

本研究は、大都市に暮らす高齢者の社会的孤立防止にかかわる課題をコミュニティカフェの意義と期待の観点から、通常のカフェや喫茶店ではないコミュニティカフェの実状を明らかにし、利用する高齢者とボランティア、及びコミュニティカフェ代表者の異なる3つの視点より明らかにしたものである。

【ほっと安心カフェについて】

1. 利用者と利用状況

本研究の対象となった者は88名で、すべて百人町四丁目アパートの居住者であった。百人町四丁目アパートにおける65歳以上の単身世帯（一人暮らし世帯）248世帯の28.2%が利用し、2人以上世帯（夫婦及び親子世帯）151世帯の11.9%が利用していた（表2,表10）。単身世帯の28.2%が利用していることから、ほっと安心カフェは人との交流の場としてある程度の意味を持つ場であることが示唆された。

男女比においては、約1:6の割合で女性が多かった（表10）。地方都市5か所の「ふれあい・いきいきサロン」において参加者75名に行った研究²²⁾では、男女比は3:7とやはり女性が多いと報告されている。女性の利用が多い背景として、男性は定年までは社会的活動を行っている者が多く、女性は子育てなどから従来より近所づきあいが多かったことが考えられ、男女で地域とのつながりの差があるためと思われる。

利用者のほっと安心カフェ以外への外出頻度では、毎日が55名で最も多く、次いで1週間に数回が27名であり、利用している82名が1週間に数回以上は外出していた。外出に関しては、スポーツ・趣味・娯楽活動が41名で、近所づきあいなどの地縁的活動をしていない者は71名であった（表15）。近所づきあいはあいさつ程度の最小限のつきあいが40名であり、日常的に立ち話をする程度が37名であった（表13）。これらは自分の趣味や娯楽活動などでは、外出はしているが他者とのコミュニケーションが乏しいという意味では広義のひきこもり傾向と捉えることができよう。

ほっと安心カフェの利用年数は、3年以上が45名であり、1年以上の継続利用を合わせると70名であった。利用頻度は月2回以上が49名と最も多く、次いで月1回が31名であった（表11）。また、一人で訪れる者が60名をしめていた。定期的に利用しているといえ、本カフェがそれなりに居心地の良い場となっていると考えられた。

2. ほっと安心カフェの位置づけ（利用者）

本文中の【 】は上位カテゴリー、《 》は中位カテゴリー、〈 〉は下位カテゴリーを示す。

ほっと安心カフェの位置づけを利用者の視点から捉えると、【ふらっと立ち寄れる茶の間】として、出会いやつながり、期待感といったかわりやふれあいを生み出す場であるとされ、それが利用を促していると考えられた（表20）。

ほっと安心カフェの場を安心できる場と思う者は85名、くつろげる場と思う者が86名、いきいきできる場が66名、ありのままでいられる場が40名、落ち着ける場が78名、守られている

場が 36 名であり (表 12)、ほっと安心カフェにおける居心地の良さが指摘されていた (表 20)。これらの結果は、本カフェが高齢者同士のピア・グループの場を提供し、肯定的意義を持っていることを示している。しかしながら、近隣との関係性の深まりに関しては、本カフェとの関係は特に高くなかった (表 13)。本研究の対象者は本カフェを半年～3 年以上利用していたが、長期にわたる 3 年以上の利用者 45 名のうち、近隣とのつきあいが最小限のあいさつ程度である者は 6 割程度であった。

前述の全国社会福祉協議会が運営支援を進める「ふれあい・いきいきサロン活動」では、地域社会における社会参加の受け皿として、住民ボランティアを主な担い手に利用者が相互交流する「場」を提供してきた。その活動はコミュニティカフェだけでなく、コミュニティカフェを離れた交流関係につながることも期待されている。コミュニティカフェは外出機会の向上、地域でのつながり強化につながると指摘されており、多くのコミュニティカフェで地域住民が担い手となった体操やゲーム、折り紙などデイサービスで行われているレクリエーションと似た具体的プログラムが組み込まれている²¹⁾。しかし、本ほっと安心カフェは運営が地域住民主体ではなく、第三者の NPO 法人であり、同様のプログラムは極めて少ない (図 8)。本カフェの利用状況においては 3 年以上の長期にわたる利用者が 45 名、月 2 回以上の利用者が 49 名に及んでいる一方で、近隣とのつきあいでは、あいさつ程度の最小限のつきあいが 40 名であったことから、しがらみや煩わしさの少ない範囲でのつながりは認められた (表 13)。また、ほっと安心カフェが〈いつ来てもいつ去ってもよし〉といったプログラムに拘らず縛られない自由さがあることで《居心地の良さがある》と感じるとの指摘 (表 20) があった。かつての地域コミュニティは、家族制度を基盤として全人格的運命共同体的性格が特色とされ、個々の住民の自立性は重要視されていなかった。現代では、地域コミュニティが生活に不可欠ではないという認識が高まり、むしろその拘束性や煩わしさからの解放にも大きな価値が見出される傾向にもある。ある時には孤独を好み、ある時には集団的帰属も求めるという自由な開放性がより重要視されていると考えられる。

対象となった者 (88 名) のうち、健康であると感じている者 (とても健康、まあ健康) は 70 名であり、生活に満足を感じている者 (非常に満足、満足) は 68 名であった (表 10)。なお、健康であると感じている 70 名のうち、自身の健康・身体が心配 (心配、少し心配) である者は 23 名であり、将来の自身の世話・介護では心配 (かなり心配、少し心配) 32 名であった。自身の健康面では、急な心配はないが高齢ということで先々を考えると不安を感じる傾向があると考えられた。また、生活上の孤立では心配していない (あまり心配していない、全く心配していない) が 72 名であった (表 17)。

前述のとおり、ほっと安心カフェでは、近隣との関係性を深めることを目的とはしていないが、本カフェを利用することで結果として近隣とのつながりも生まれる可能性があると考えられた。

単身世帯高齢者が必要としている情報は、健康や医療、福祉にかかわる情報であると指摘がある²⁹⁾。本カフェの利用者は単身世帯が 70 名と多かった。本カフェのプログラムには、血圧測定や健康相談など医療面でのサポートがあり、高齢者総合相談センターや民生委員などの福祉・介護でのサポートを行う専門スタッフや医療職者が本カフェに常駐しており、このことも本カフェを利用する要因となっていると思われる。

多変量解析の結果からも、健康への関心と居心地の良い場と感じることとの関係はみられた (図

4, 図 5) が、強い関連は確認されず、両者については今後の検討が必要と思われる。

3. ほっと安心カフェの位置づけ（ボランティア及び代表者）

本文中の【 】は上位カテゴリー、《 》は中位カテゴリーを示す。

ほっと安心カフェの位置づけをボランティア及び代表者の視点からみると、ボランティアは《近づく老い》に向けて【自分と向き合う】きっかけや【前に進む力をつけていく】など、前向きな思考を得る場と位置づけ（表 21）、代表者は人や地域、社会との【きっかけづくり】の場と位置づけていた（表 23）。

ほっと安心カフェのボランティアの多くは高齢期に近づいており、個人的には生きがいや健康のため、また社会的役割を果たしたいということで参加意欲が高いと考えられた。一方、《役割変化》や心身機能の低下から【低い自己評価】意識も持っており、ボランティア活動をそれを乗り越える生きがいとも位置づけていた（表 21）。神谷美恵子は、生きがいについて³⁰⁾地域社会のさまざまな活動に参加する動機づけとなると述べているが、生きがいを持つことは前向きな思考につながっていくと考えられ、知識や経験を資源ととらえ、活用することによって、ほっと安心カフェが生きがいを感じる場となっているとも考えられた。

代表者は、【自立へつなげる】ために【きっかけづくり】の場として、本カフェを位置づけており、利用する者が主体となる【自由さ】と利用者本位の環境づくりを優先していた。アンケート調査で利用者も本カフェが安心できる場やくつろげる場（表 12）であるとしており、本カフェが居心地の良い環境を生み出していたといえよう。ほっと安心カフェは、【全員が主人公】として《共に成長する》、《共に生きる》場となっていると考えられた。一方で、【ひらかれた場づくり】に苦慮していた。継続利用者も新規利用者もともに居心地の良い場となるように、ボランティアの役割分担を固定化しない活動となるように考えていた（表 23）。

以上、まとめると、ほっと安心カフェは、利用者において人との交流の場として意味を持つ場であることが示唆された。健康である利用者が多いが、将来の健康や身体への不安を持っており、本カフェで医療や介護・福祉のサポートがあることが心配ごとを軽減している可能性があり、そのことも本カフェの利用の継続に関係していると考えられた。ほっと安心カフェは、今までの地縁や血縁といったしがらみの強い関係性ではない、ゆるいつながりと自由度のある居心地の良い場となっているといえよう。このように通常のカフェや喫茶店とは相違する、地域空間でのゆるいつながりや交流の場となっていることが利用を促進し、社会的孤立を防止する一助になっているとも考えられた。

ボランティア及び代表者にとってもそれぞれに肯定的意義を有した場となっていると考えられた。ボランティアにおいては、自身の生きがいにつながっていることが示唆された。また、代表者は自立へつなげるきっかけをつくる場としても利用継続促進の方策を考えていた。

【カフェメモリーとカフェだんだんについて】

本文中の【 】は上位カテゴリー、《 》は中位カテゴリーを示す。

カフェメモリーとカフェだんだんに関する研究 2 の調査では、カフェメモリーは、〈孤立を防ぐ〉

ためにも干渉し過ぎないゆるい関係を作る〈ネットワークの入り口〉となる【都市型のコミュニティ】という理念から始められていた（表 24）。また、カフェだんだんにおいては、元気なうちに自身の《生き方を模索する》ことや《人の輪を広げる》つながりを作って【元気な高齢者】になるという理念に始まっていた（表 25）。両カフェともコミュニティカフェがつながりを作り出す場となっていくことは、現在も変わらないと考えられ、カフェメモリーは、《出会いの場》として（表 24）、カフェだんだんは、〈他者との関係に変化をもたらす〉〈希望をもたらす〉などの【持ってくるもの】がある場と捉えられていた（表 25）。単身世帯が多く、近所づきあいの希薄な大都会では、地域や社会とつながりを作るきっかけの場となっていくための居心地の良い場づくりとして、コミュニティカフェは存在意義があると考えられた。

また、居住スタイルや人づきあいの価値観、生活形態といったバックグラウンドの違う 2 か所のコミュニティカフェは、地域や運営方法など、それぞれの特色を生かした形態で運営を行っていた。場所は、ほっと安心カフェ同様に地域の集会室などを利用していたが、運営方法は画一的でなく自由度が高く、コミュニティカフェを取り巻く地域環境に沿って作られており、地域に居住する利用者の安心した場になっているのではないかと考えられた。

このように、カフェメモリーとカフェだんだんとも開設当時からつながりを広げることや心地よい場であることを重要視しており、「カフェメモリー」は、高齢者だけではなく、介護者や家族も解放される場として（表 24）、「カフェだんだん」は、元気な高齢者を育む場として位置づけられており、主体的な生き方を育む一方で、後継者の育成といった運営上の課題があげられた（表 25）。

4. 居場所としてのコミュニティカフェのあり方

研究 1 及び研究 2 におけるコミュニティカフェ 3 か所の調査結果から、大都市で暮らす高齢者が住み慣れた地域で尊厳ある生活を継続していくうえでの、安心して過ごすことのできる居場所としてのコミュニティカフェのあり方を検討した。

すでに見てきたように、コミュニティカフェは、自由度のあるゆるい関係性の中で、ふれあいやつながりを求める場として利用されている。新宿区が「ほっと安心地域ひろば」事業として取り組む、NPO 法人が運営する「ほっと安心カフェ」、高齢者複合施設が運営する「カフェメモリー」、新宿区民のボランティアが運営する「カフェだんだん」は、それぞれ独自の運営方針、ニュアンスを持っていた。コミュニティカフェそれぞれに理念があり、こだわりのスタイルがある。高齢者が利用しやすい雰囲気と居心地の良い場とするための統一した形はなく、コミュニティカフェそれぞれの工夫が見られた。例えば、ほっと安心カフェは数時間座っていても疲れないようにクッションやひざ掛けを用意し、読みやすいように大きな字で書かれた歌集を準備したり、カフェメモリーは周囲が気にならないようなテーブルの配置、清潔な部屋、スタッフの明るい笑顔と挨拶を心掛け、カフェだんだんはテーブルには季節の花を飾り、テーブルクロスを敷き、いずれのコミュニティカフェも無機質な集会室などの空間から自宅のリビングのような温かい空間に変化させる工夫がなされていた。出来る限り出入口を解放し、カーテンを開け、外からも雰囲気がわかるように、そして新規利用者が入りやすい身近で気軽な場を心掛けていた。その日の天

気や利用者の座る場所、話題によってコミュニティカフェの雰囲気が変わるのである。高齢者にとって、自由さのあるゆるい関係性と身近で気軽に感じられる場で、思い思いに過ごす、ちょっと贅沢な時間と場であることが窺えた。

3つのコミュニティカフェの調査からは、大都市で暮らす高齢者が集うコミュニティカフェの最大公約数的な要件は、“自由さのあるゆるい関係性”としてのつながり、そして“身近で気軽”な場であることといえよう。また、日々の心身の状態を相談できる場であることもひとつの要件であった。大都市で暮らす高齢者は、近隣にさまざまな社会資源を有している(7頁)。コミュニティカフェを利用する高齢者は、近隣の社会資源とは違う肯定的な意義をコミュニティカフェに認めているから利用しているのであるが、但し大都市に暮らす高齢者の社会的孤立防止の観点からは、いかなる肯定的意義を認め、利用しているかを明らかにすることが重要と考えられる。

“ふらっと立ち寄る地域の喫茶店”としてゆるやかなつながりを生み出す空間を提供するコミュニティカフェづくりが肝要と考える。そこでは歓迎され、そこに居ることを認められ、そして高齢者の思いに寄り添った居心地の良い場となっていく。機能はシンプルであり、何か目的を持って利用するのではない、ふらっと立ち寄って、茶菓の接待を受け、他愛のない会話を楽しんで帰宅する。代表者やボランティアの運営側も高齢者の会話を重視し、高齢者も会話やふれあいを楽しむために利用する。コミュニティカフェと生活が同じ地域に密着することで地域の話題も多くなっていく。コミュニティカフェにおける“ゆるやかなつながり”を利用している高齢者の多くが肯定的に感じていた。その場にいる人々の間のコミュニケーションは少なからず存在しており、楽しみ方は強要されるものではなく、個人が自由に過ごせる場としての利用形態があり、コミュニティカフェは居場所となり得ている。ほっとできる場を意識化することで素直な思いの表出も可能となり、自分と他人も心を開き、人とのつながりが生まれていく。

こうした自由さのあるゆるい関係性を地域全体で取り組んでいる町がある。そこは日本で最も自殺率の低いとされる徳島県海陽町である。岡は、海陽町と隣接する同県内の自殺多発地域と比較し、自殺予防因子を探索した研究において、①多様性の受容、②人物本位主義、③脱自己卑下、④援助希求しやすい環境、⑤ゆるい人間関係の5つの因子が重要であると報告している。海陽町は、これらの因子からみて自殺が少なく“生き心地の良い町”といわれている。旧来の緊密な堅苦しさがなく、多様性を重んじることで自己開示を可能にしていると述べられている。海陽町は、人を監視しているのではなく、関心を持つことで困ったことや心配なことを素直に話せる環境を生み出している。「店づくり」といわれる縁台が、海陽町の各住居にあるといわれる。海陽町は、江戸時代に材木の集積地として急速に栄えた時期があり、短期間に周囲の地域から人が集まった。そういう急速に出来上がった町だという歴史的背景があり、多様性を認めざるを得ない文化があり、結果的にそうして出来た地域だからこそ、それぞれの知恵を出し合い、混じり合って、生きづらさを取り除いて共存しようとした先人たちの、時代を超えて守り伝えられてきた人生観から、そのような形でのコミュニケーションを重視する町となってきたと述べている³¹⁾。すなわち干渉し過ぎないゆるやかなつながりが、風通しの良い地域コミュニティを生み出して、援助を求めやすい環境を作っており、地域が一つの居場所となり得ていったと思われる。

今後、高齢者が住み慣れた地域で尊厳ある生活を継続していくうえで、地域で安心して過ごすことのできる居心地の良い居場所としてのコミュニティカフェに期待するところは大きい。自由

さのあるゆるい関係性と精神的な余裕がある環境やつながりが、高齢者の社会的孤立を防止し、自立することに資するのではないだろうか。

以上、コミュニティカフェについて考察したが、コミュニティカフェは全国に広がっており、利用者も少なくない。運営に関する経済的問題も指摘されており、行政や企業の支援も望まれる。但し、前述したようにコミュニティカフェは形に捉われない自由さが特徴であり、運営やプログラムの硬直化は避けなければいけないと考える。すなわち、コミュニティカフェは、ディケアの喫茶店でも通常の喫茶店でもない、最大公約数的な特徴が“ゆるい関係”であり、積極的具体的に定義するというよりも、上記の2つとは違うという定義づけになると考える。今後、このようなコミュニティカフェが増えてきて、次第にコミュニティカフェとはどういうものかといった定義が決まってくるのかと思われる。そのため本研究で得られた意義や課題を加味しながら“ゆるい関係”を持ったコミュニティカフェの普及や継続可能にしていく方策に向けての具体的取り組みが始まると考える。現状では、政策や施策でその特徴を定義すると本質が失われることも危惧されることから、自由さのあるゆるやかなつながりの場であるコミュニティカフェの認知を広げることが地域実践の取り組みではないかと考える。

第5章 本研究の限界と今後の課題

本研究は、東京都新宿区におけるコミュニティカフェ3か所の調査であり、地域特性の影響は否めず、大都市一般のものと解釈するには限界がある。個人や地域の特色が、社会的孤立防止にかかわる課題に影響を与えている可能性もあり得る。コミュニティカフェの意義や検証のためには、他の地域も含めてさらなる調査をしていく必要があると思われる。また、コミュニティカフェに関する海外の文献は極めて少ないが、それについても今後の課題として取り組んでいきたい。

また、既に述べたように本調査で行ったコミュニティカフェは自由さのあるゆるい関係性を通じて運営されていることから、決まった方針は本来立てにくいと考えられる。コミュニティカフェの普及策を考えていくにあたっては、より広範な調査研究が必要である。今後のコミュニティカフェの役割や展望、利用継続への工夫から捉えていくことになるのかと考えられる。

本研究は、コミュニティカフェを利用する高齢者にとっての意義の検討にとどまっており、今後はコミュニティカフェを利用していない高齢者への調査研究を行い、比較検討することも必要であろう。

第6章 全体のまとめ

大都市で暮らす高齢者の社会的孤立防止にかかわる課題について、コミュニティカフェの意義や期待は大きく、地域や社会との関係づくりの場であると考えられた。

大都市で暮らす高齢者が集うコミュニティカフェの意義は、何よりも、“身近で気軽な場で自由さのあるゆるやかなつながり”の場であることにある。自由さのあるゆるい関係性と精神的な余裕がある環境やつながりが、孤独や不安を和らげ、高齢者の社会的孤立を防止し、自立への一助になるのではないかと考えられた。また、日々の心身の状態を相談できる場であることも健康の維持などの観点から意義があると考えられた。

謝辞

本研究にあたり、ほっと安心カフェを利用されている皆様に深く感謝申し上げます。また、快諾をいただきました東京都新宿区区役所福祉部高齢者福祉課の皆様、長い期間にわたって調査にご協力いただきました特定非営利活動団体（NPO 法人）介護者サポートネットワークセンター・アラジンの皆様、ほっと安心カフェ、カフェメモリー並びにカフェだんだんの各代表者様、ボランティアの方々に深謝申し上げます。

本研究を進めるにあたり、ご指導、ご教授、励ましの言葉をいただきました研究指導教官の赤居正美教授、丁寧かつ熱心にご指導をいただき、そして励ましの言葉をいただきました鹿島晴雄教授、ならびに縣俊彦教授には心から感謝申し上げます。また、この研究を進めるにあたり、ご助言や励ましの言葉を頂戴しました諸先生方、多くの皆様に心から感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 則定百合子. 青年期における心理的居場所感の発達的变化. *カウンセリング研究* 2008;41:64-72.
- 2) Oldenburg R. *The Great Good Place*. 第3版. Cambridge USA: Da Capo Press, 1999:190-195.
- 3) 尾崎有輝, 山崎寿一. 地域における高齢者の生活行動と居場所の特性; 神戸市灘区六甲道地区を対象として. *日本建築学会近畿支部研究報告集* 2009;49:353-356.
- 4) 総務省統計局. 統計トピックス No.97 高齢者の人口. <http://www.stat.go.jp>. 2016.9.20.
- 5) 総務省統計局. 平成22年度国勢調査結果. <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/>. 2016.9.20.
- 6) OECD, *Society at Glance: 2005 edition*, 2005:8.
- 7) House JS, Landis KR, Umberson D. Social Relationships and Health. *Science* 1988;241:540-545.
- 8) Berkman LF. The role of social relations in health promotion, *Psychosomatic Medicine*. 1995;57(3):245-254.
- 9) 斉藤雅茂, 近藤克則, 尾島俊之ら. 高齢者の生活に満足した社会的孤立と健康寿命喪失との関連—AGES プロジェクト4年間コホート研究より. *老年社会科学* 2013;35(3):331-341.
- 10) Fratiglioni L, Wang HX, Ericsson K, et al. Influence of social network on occurrence of dementia: a community-based longitudinal study. *The Lancet* 2000;355:1315-1319.
- 11) 斉藤雅茂. 高齢者の社会的孤立に関する主要な知見と今後の課題. *家計経済研究*. 2012;94:55-61.
- 12) 厚生労働省. 2000. 社会的援護を要する人びとに対する社会福祉のあり方に関する検討会の報告書. http://www1.mhlw.go.jp/shingi/s0012/s1208-2_16.html. 2016.9.20.
- 13) 厚生労働省. 2007. 高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議の報告書. <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/03/dl/h0328-8a.pdf>. 2016.9.20.
- 14) 内閣府. 2014. 一人暮らし高齢者に関する意識調査の報告書. <http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h26/kenkyu/zentai/index.html>. 2017.12.05.
- 15) 廣木克行. 子どもの居場所をつくる. 神戸大学教育出版 2005:106-107.
- 16) 斉藤雅茂, 冷水豊, 山口麻衣ら. 大都市高齢者の社会的孤立の発現率と基本的特徴. *社会福祉学*. 2009;50(1):110-122.
- 17) 斉藤雅茂, 冷水豊, 山口麻衣ら. 大都市高齢者の社会的孤立と一人暮らしに至る経緯との関連. *老年社会科学* 2010;31(4):470-480.
- 18) 田高悦子, 河野あゆみ, 国井由生子ら. 大都市の一人暮らし男性高齢者の社会的孤立にかかわる質的記述的研究. *日本地域看護学会誌* 2013;15(3):4-9.
- 19) 上條秀元. 高齢者の居場所づくりについての一考察—「ふれあいサロン」の活動に即して. *宮崎大学生涯学習教育センター研究紀要* 2007;12:11-30.
- 20) 大分大学福祉科学研究センター. コミュニティカフェの実態に関する調査結果[概要版]. 大分

- 大学福祉科学研究センター 2011;1-16.
- 21) 森常人.「ふれあい・いきいきサロン」の参加者評価の分析に関する一考察.関西外国語大学研究論集 2014;100:257-270.
 - 22) 豊田保.参加者の視点からみた高齢者「ふれあい・いきいきサロン」の意義.新潟医福誌 2007;8(2):16-20.
 - 23) 新宿区.介護予防・日常生活支援総合事業.2008;1-2.
 - 24) 新宿区.高齢者暮らしのおたすけガイド 2015;71.
 - 25) 新宿区社会福祉協議会.戸山団地・暮らしとコミュニティの調査 2008;3-28.
 - 26) 新宿区.2016.新宿区ホームページ. <http://www.city.shinjuku.lg.jp>.2016.7.5.
 - 27) 非営利活動法人介護者サポートネットワークセンター・アラジン.ほっと安心カフェ事業報告書 2010;1-10.
 - 28) Townsend P.Isolation, desolation,and loneliness.In: Shanas E, Townsend P ,Wedderburn D,et al. Old people in three industrial societies.London:Routledge & Kegan Paul ,1968:258-287.
 - 29) 西城戸真,堀川尚子,猪瀬優理.独居高齢者の生活・意識・コミュニケーション.札幌学院社会情報.1999;8(2):59-70.
 - 30) 神谷美恵子.生きがいについて.第3版.東京:みすず書房,1966:65-68.
 - 31) 岡壇.生き心地の良い町—この自殺率の低さには理由がある.第3版.東京:講談社,2013:29-92.

資料

資料 1 : 承諾書 1

資料 2 : 質問紙調査票 1 ~ 4

資料 3 : 研究 1 : インタビュー調査結果カテゴリー概要 1 ~ 2 3

資料 4 : 研究 2 : インタビュー調査結果カテゴリー概要 1 ~ 1 2

承 諾 書

国際医療福祉大学大学院

教授 堀田聡子殿

博士課程（調査研究者） 川口容子殿

別紙の説明書に基づき、次の項目について詳しい説明を受け十分理解し、本研究に関する被験者への倫理的配慮について納得しましたので、本施設利用者が研究に参加することを承諾します。

1. 研究課題名
2. 目的
3. 調査対象および研究方法
4. 期間
5. 場所
6. 研究概要（※詳細は研究計画書にて確認）
7. 指導教員名・連絡先
8. 本人連絡先

平成 年 月 日

施 設 名

代表者職・氏名

職
印

「ほっと安心カフェ」参加の皆様へアンケートご協力をお願い

2016/01/10

国際医療福祉大学大学院

医療福祉学分野

川口容子

<ご回答にあたって>

・このアンケートは、地域で安心して暮らし続けられる生活を送る上で、これからのコミュニティカフェに役立てることを目的として実施するものです。調査結果は、研究調査の目的以外には使用致しません。回答をもって同意いただいたものとみなします。

・ご協力いただくのはご自由です。ご協力いただけない場合も不利益は一切ございません。

ご協力いただける場合は、以下の質問(全 23 問)にお答えください。

お手数をお掛けしますが、何卒ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

回答は、一番よくあてはまる選択肢の番号部分を○で囲んで下さい。

あなたのご自身の健康状態についてうかがいます。

問 1 普段、健康と感じていますか。

1. とても健康 2. まあ健康 3. あまり健康ではない 4. 健康ではない

問 2 現在、病院等に定期的に通っていますか。

- 1.通っている 2.通っていない

ほっと安心カフェについてうかがいます。

問 3 いつ頃からカフェを利用されていますか。

1. 3年以上前 2. 1年前～3年未満 3. 半年前～1年未満 4. 半年未満

問 4 カフェを利用されている頻度について、お聞かせください。

1. 月に2回以上 2. 月に1回 3. 数か月に1回 4. 半年に1回 5. 1年に1回以下

問 5 カフェには概ねどなたと一緒に利用されますか。

1. 一人で 2. 配偶者や家族と 3. 友人や知人と

問 6 カフェを利用されるきっかけについて、お聞かせください。

1. エレベータホールのチラシをみて 2. カフェの前を通りかかって 3. 友人や知人の紹介 4. 家族の勧め 5. 行政の紹介 6. 高齢者相談センターの紹介 7. 医療機関の紹介 8. その他()

問 7 あなたにとってカフェはどのような場所ですか。

- ① 安心できる場所 1. とても思う 2. やや思う 3. あまり思わない 4. 思わない

- ② くつろげる場所 1.とても思う 2.やや思う 3.あまり思わない 4.思わない
- ③ いきいきできる場所 1.とても思う 2.やや思う 3.あまり思わない 4.思わない
- ④ ありのままでいられる場所 1.とても思う 2.やや思う 3.あまり思わない 4.思わない
- ⑤ 落ち着ける場所 1.とても思う 2.やや思う 3.あまり思わない 4.思わない
- ⑥ 守られている場所 1.とても思う 2.やや思う 3.あまり思わない 4.思わない

問8 カフェに来られる目的をお聞かせください。当てはまる選択肢の番号部分をいくつでも○で囲んでください。

- 1. 近隣の方とのふれあい 2. スタッフ・ボランティアとのふれあい 3. 茶菓の楽しみ 4. 日常生活の情報 5. 医療介護の情報 6. 歌謡 7. 健康チェック 8. その他()

問9 今後もカフェを利用したいですか。

- 1. はい 2. いいえ

日常のおつきあいについてうかがいます。

問10 ご近所の方とどのようなおつきあいをされていますか。

- 1. 互いに相談したり日用品の貸し借りをするなど、生活面で協力しあっている人もいる
- 2. 日常的に立ち話をする程度のつきあいはしている
- 3. あいさつ程度の最小限のつきあいしかしていない
- 4. つきあいは全くしていない

問11 ご近所でつきあっている程度について、お聞かせください。

- 1. 近所のかなり多くの人と面識がある
- 2. ある程度の人との面識・交流がある
- 3. 近所のごく少数の人とだけと面識・交流がある
- 4. 隣の人がだれかも知らない

問12 全般的なつきあいについて、普段どの程度の頻度でつきあいをされていますか。

- ①友人・知人とのつきあい
 - 1. 日常的にある(毎日～週に数回程度)
 - 2. ある程度頻繁にある(週に1回～月に数回程度)
 - 3. ときどきある(月に1回～年に数回程度)
 - 4. めったにない(年に1回～数年に1回程度)
 - 5. まったくない(もしくは友人・知人はいない)
- ②親類・親戚とのつきあい
 - 1. 日常的にある(毎日～週に数回程度)
 - 2. ある程度頻繁にある(週に1回～月に数回程度)
 - 3. ときどきある(月に1回～年に数回程度)
 - 4. めったにない(年に1回～数年に1回程度)
 - 5. まったくない(もしくは友人・知人はいない)

地域活動についてうかがいます。

問 13 地域で下のような活動をされていますか。

- ① 地縁的な活動(自治会、町内会、老人会等) 1. はい 2. いいえ
- ② スポーツ・趣味・娯楽活動(芸術文化活動、生涯学習等) 1. はい 2. いいえ
- ③ ボランティア・区民活動(まちづくり、防災、防犯、福祉等) 1. はい 2. いいえ

各種福祉行政サービスについてうかがいます。

問 14 戸塚高齢者総合相談センターについて、お聞かせください。

- ①どこにあるか知っていますか 1. 知っている 2. 知らない
- ②利用をしたことがありますか 1. 利用している、したことがある 2. 利用はない

あなたご自身のことについてうかがいます。

問 15 あなたの性別をお聞かせください。

- 1. 男性 2. 女性

問 16 あなたの年代をお聞かせください。

- 1. 80歳代以上 2. 70歳代 3. 60歳代 4. 50歳代

問 17 現在の地域(百人町地区)での居住年数をお聞かせください。

- 1. 10年以上 2. 5年～10年未満 3. 1年～5年未満 4. 1年未満

問 18 今後も現在お住まいの地域(百人町地区)に住み続けたいですか。

- 1. はい 2. いいえ

問 19 あなたの家族構成をお聞かせください。

- 1. 単身世帯 2. 夫婦のみの世帯 3. 二世帯世帯(親と子) 4. その他
()

問 20 お出掛けの頻度についてお聞かせください。

- 1. 毎日 2. 一週間に数回 3. 月に数回 4. 月に1回以下

問 21 現在のご自身の生活についてお聞かせください。

- 1. 非常に満足 2. 満足 3. やや不満 4. 不満足

問 22 日常生活を送るにあたって次の問題や心配ごとをお聞かせください。あてはまる下の番号をカッコ内に記入してください。

- 1. かなり心配 2. 少し心配 3. あまり心配していない 4. 全く心配していない

- ① ご自身の健康・身体 の状況 ()
 - ② 将来の自分の世話・介護 ()
 - ③ ご家族の健康・介護 ()
 - ④ 家庭内での人間関係 ()
 - ⑤ 近隣での人間関係 ()
 - ⑥ 生活上の孤立 ()
- } 相談するところを知っていますか
1. はい 2. いいえ

⑦ 家計 ()

問 23 問 22 でお答えいただいたような日常生活の問題や心配ごとについて頼りになる方はいますか。当てはまる選択肢の番号部分をいくつでも○で囲んでください。

1. 近所の人 2. 家族 3. 親戚 4. 友人・知人 5. 行政担当者 6. 高齢者相談センター職員 7. 民生委員 8. 医師 9. 看護師 10. 警察官 11. 弁護士 12. 誰もいない 13. その他()

これでアンケートは終わりです。

多くの質問にご回答をいただきましたこと心から御礼申し上げます。

ありがとうございました。

研究 1：コミュニティカフェ 3 つの視点からの調査と検討—ほっと安心カフェにおいて—

上位カテゴリーごとに結果を示す。インタビューの語りは、「 」内に斜体太字で示す。また、下線 はカテゴリーを抽出するときのポイントを示す。

1-3 インタビュー調査結果

1-3-1 利用者の意義から抽出されたカテゴリー概要

53 名の利用者に対するインタビュー逐語録をデータ分析の結果、32 下位カテゴリー、11 中位カテゴリー、4 上位カテゴリーが抽出された（表 1-資料 3）。

表 1-資料 3 カテゴリー一覧表（利用者の意義）

【上位カテゴリー】	《中位カテゴリー》	〈下位カテゴリー〉
【葛藤】	《自立した生活継続に不安を感じる思い》	〈先の見通しの不確かさ〉 〈寂しさ〉 〈身体機能の低下〉 〈金銭的不自由さ〉
	《自立した生活継続へ意志を高める思い》	〈自己効力感〉 〈生きがい〉 〈自己選択する力〉
【思考の渦】	《恐れ》	〈遠慮〉 〈難解さ〉 〈防衛反応〉
	《希求》	〈孤独感からの脱出〉 〈生活の質を向上〉
【ふらっと立ち寄れるお茶の間】	《出会いがある》	〈人間関係の広がり〉 〈場の広がり〉 〈学びの広がり〉
	《つながりがある》	〈地域の再認識〉 〈交流関係を築く〉 〈ゆるやかなつながり〉
	《居心地の良さがある》	〈いつ来てもいつ去ってもよし〉 〈安心して表出できる〉 〈よりどころ〉 〈対等なつながり〉
	《期待感がある》	〈茶菓の楽しみ〉 〈ヒントが見つかる〉
【気づき】	《思考する力を取り戻す》	〈本音の言える自信〉 〈持てる力を高める〉
	《今この瞬間を積極的に生きる》	〈受け止める〉 〈主体的な行動〉 〈「これから」を持つ〉
	《社会環境の再認識》	〈家族や親せきとの関係〉 〈地域社会との関係〉 〈意向に沿わない関係〉

① 【葛藤】

【葛藤】は、《自立した生活継続に不安を感じる思い》、《自立した生活継続へ意志を高める思い》の 2 つの中位カテゴリーから抽出された。

《自立した生活継続に不安を感じる思い》は、〈先の見通しの不確かさ〉、〈寂しさ〉、〈身体機能

の低下)、〈金銭的不自由さ〉の4つの下位カテゴリから構成された。住み慣れた地域で自立した生活を送りたい。でも身体機能が低下してきたことは自分が一番よく分かったと語っていた。金銭的にも余裕がなく、先の見通しもたたない、単身生活になり近所の人ともつながりが少なくなり寂しくなったと語った。

〈先の見通しの不確かさ〉

「今は元気でも、家に帰ってコロッと倒れて死んじゃうかもしれない。いつであなたの寿命は終わりますよって分かればそれなりに考えられるけど。1年先には死んでるかもしれないし、10年経っても元気かもしれないし、これは神様仏様しか分からない。一人なのに誰が介護してくれるんだろう、お金はいくらかかるんだろうと思うと眠れなくなっちゃう」(I-9)

〈寂しさ〉

「やっぱり、強がり言っても本音は寂しい。家族がいた時は思ってもみなかったけど、人のぬくもりって大事だなんて。近所の人も年をとって外にも出てこなくなった、亡くなった人も多いしね。一言もしゃべらない日だってあるのよ。一人だとたいてい悪いことばかり考えちゃう」(C-3)

〈身体機能の低下〉

「毎年暮れになるとおせちの支度をしたり、大掃除をしたりしてたわね。今じゃうそみたい。掃除だってしんどいことが多い。電球の球を一つ取り替えるだけでも自治会長さんをお願いしたりして、本当に情けない。若いときと気持ちは変わらないつもりでもやっぱり駄目ね。この間なんか家の中で転んで骨折しちゃってね」(B-2)

〈金銭的不自由さ〉

「夫の退職金もあったけど年金だけじゃ生活できないわね。通帳を見ると額が減ることはあっても増えることはない、これがゼロになったらお陀仏かしらなんて思うわよ。元気なうちにお友達と出掛けたいけど、ファミリーレストランのフリードリンク付きが今の贅沢かもしれない」(O-4)

《自立した生活継続へ意志を高める思い》は、〈自己効力感〉、〈生きがい〉、〈自己選択する力〉の4つの下位カテゴリから構成された。一生懸命がむしゃらに生きてきたと語った、高度経済成長期とも重なって仕事でも家庭でも何にでも頑張ってきた。何でもできることを見つけて率先して行動してきたことが自信につながっていると語っている。やりたことがあってやりたいことを自分が決めることのできる状態でいたい。楽しい時間も自由に持てる、ここで生きていたいからこそ元気でいたい、自分で出来ることは人に頼らない、お金も投薬も自分で管理することがここで生きることだと思っていると語っていた。

〈自己効力感〉

「自慢じゃないけどさ、よくやってきたと思う。頼られるとうれしくなっちゃってさ。仕事でも何でも率先して人を引っ張ってきた。今まで培ってきた自信からか自分にできないことはないみたいなね」(M-7)

〈生きがい〉

「もう80歳を過ぎると、人への時間よりも自分が楽しむ時間を優先するようになる。囲碁やカラオケとか自分で歩いて行かれるから楽しめるのよ。誰かの面倒になってまで行きたいとは思わないわ。」(T-2)

〈自己選択する力〉

「一人暮らしだから何でも自分でやるようにしているの、自分の人生だもの、自分で決めていく。考えることができなくなったら自立して生きていくことはできない」(M-28)

② 【思考の渦】

【思考の渦】は、《恐れ》、《希求》の2つの中位カテゴリーから抽出された。

《恐れ》は、〈遠慮〉、〈難解さ〉、〈防衛反応〉の3つの下位カテゴリーから構成された。

自分の思いはある、でも難しい。他者に面倒を掛けることへの抵抗感や年をとって思うように運ばない心身の状態も自分が一番分かっていると語った。だからこそ一歩が踏み出せない、先行きに不安材料を多くしたくないと考えないようにしていると合理化して考えようとしていた。

〈遠慮〉

「人様には迷惑を掛けたくない。だって自分が逆の立場だったら迷惑かもしれないし、近所の人は何でも言ってよって言ってくれるけどなかなかね」(S-23)

〈難解さ〉

「自分が年とってきて考え方も狭くなってきている。もっと他の考え方が出来れば気が楽なんだろうけどね。自分の考えたことが本当に正しいのかも分からなくなっちゃう時もあるのよ」(Y-31)

〈防衛反応〉

「つついっやっかいなこととか後回しにしたりがまんしちゃう。その方が気持ちが楽だったりする」(A-23)

《希求》は、〈孤独感からの脱出〉、〈生活の質を向上〉の2つのカテゴリーから構成された。自分の思いはある、人とつながってほしい。今日も明日も部屋に一人、テレビが友達。人との会話は無い。人のぬくもりのある生活が欲しい、一人きりで亡くなっていく怖さや不安感から何とかして抜け出したい。人とつながってほしい、他愛ないおしゃべりが恋しいとも語っていた。

〈孤独感からの脱出〉

「日中はいいのよね、まだ。日が落ちてからの何とも言えない孤独感はいやなものよ。このまま死んじゃったら何日たったら発見されるんだろうとか、死支度じゃないけど分かるようにしなければいけないかしらとかね。こうやっておしゃべりして楽しい時はそんなこと何てばかばかしいと思うけどね」(N-7)

〈生活の質を向上〉

「年をとることではできないこともある、でもできていることもあるのよ。工夫したり助けてもらいながら生きる楽しみや喜びを見つけて生活をしていきたい」(P-25)

③ 【ふらっと立ち寄れるお茶の間】

【ふらっと立ち寄れるお茶の間】は、《出会いがある》、《つながりがある》、《居心地の良さがある》、《期待感がある》の4つの中位カテゴリーから抽出された

《出会いがある》は、〈人間関係の広がり〉、〈場の広がり〉、〈学びの広がり〉の3つの下位カテゴリーから構成された。敷居の低い肩肘張らずに気軽に立ち寄れる場を見つけた。コミュニティ

カフェを利用することで多くの出会いがあることを知った、その出会いが生き方を膨らませて、豊かな人生が持てるようになったと語った。

〈人間関係の広がり〉

「いつも同じ人と挨拶して立ち話、人とのつながりが広がって豊かになった。顔見知りから声掛け合うつながりができたわね。人が違うと話題も多くなって楽しい」(J-38)

〈場の広がり〉

「人からいろんなご縁をいただいている。近所で何をしているところがあるとか、人以外にもつながりがひろがっていくことを実感する。」(X-11)

〈学びの広がり〉

「これはこうだみたいな固定した考え方が多かった、人と接することで学ぶことは多い。視野の広がりから固定観念を自然と軌道修正することができることもある。いくつになっても学ぶことばかり。」(K-31)

《つながりがある》は、〈地域の再認識〉、〈交流関係を築く〉、〈ゆるやかなつながり〉の3つの下位カテゴリから構成された。新しいつながりを生み出すと語った。つながることで地域の再認識や交流関係をも築く。そこにはゆるい関係性があった。

〈地域の再認識〉

「住んでいる地域への見かたや考え方が変化していくのよね。関わり方も変わる。今まで丁寧に見もしなかった回覧板をしっかりとみたり催し物があるとちょっと行ってみようかなって思ったりする」(L-54)

〈交流関係を築く〉

「一人一人と挨拶しておしゃべりすることも多くなってきた、人とのつながりが広がっていくのが実感する」(R-16)

〈ゆるやかなつながり〉

「気軽なゆるい関係がいいんでしょうね、会いたいときに会う、おしゃべりしたいときにおしゃべりするような自由さがある」(AC-9)

《居心地の良さ》は、〈いつ来てもいつ去ってもよし〉、〈安心して表出できる〉、〈よりどころ〉、〈対等なつながり〉の4つの下位カテゴリから構成された人の顔色を窺ったりしないで過ごせる場、ほっとしていただける心地よさ、後ろを気にせず、周囲の会話に聞き耳立てる必要もない、リラックスした居心地の良さがある空間だと語っていた。

〈いつ来てもいつ去ってもよし〉

「遅れて参加しても早く帰っても怒られない、いつも温かく受け入れてくれていると思えるの」(BA-3)

〈安心して表出できる〉

「何か言ってもそうじゃないと批判されて、受け入れて貰えないと話せなくなっちゃう。自分が間違っているんじゃないかってわからなくなっちゃうの。何でも話せて受けとめてくれる場じゃないかしらね」(AK-31)

〈よりどころ〉

「ほっと出来るのよ、何かをさせられる感じがなく、何気ない他愛のない場なのよ、だから行きたくなるんだと思うわ」(Q-23)

〈対等なつながり〉

「お世話にはなっているんだけどね。お互いに支え支えられている、お互いに受け入れ受け入れてくれるようなつながりかしら。」(H-2)

《期待感がある》は、〈茶菓の楽しみ〉、〈ヒントが見つかる〉の2つの下位カテゴリから構成された。新しいものが見つかるワクワクした思いに似た楽しみもある場であると語った。接待を受ける心地よさは他愛のないおしゃべりを生み出し、日常生活のヒントにつながる発見があった。

〈茶菓の楽しみ〉

「ご接待を受ける気持ちはいいものよ、お茶をいただいてほっとすると普段よりおしゃべりになる。毎回のお菓子も特別感があるんじゃないかしら、スーパーで買うのとは違うデパート感のあるお菓子とお茶は楽しみ」(F-12)

〈ヒントが見つかる〉

「今困っていることではないんだけど、人さまが困っていることやこうだったのよって話してくれるとそうかこういうときはこうするんだってこれからの問題のヒントになることもある」(AK-9)

④ 【気づき】

【気づき】は、《思考する力を取り戻す》、《今この瞬間を積極的に生きる》、《社会環境の再認識》の3つの中位カテゴリから抽出された。

《思考する力を取り戻す》は、〈本音の言える自信〉、〈持てる力を高める〉の2つの下位カテゴリから構成された。気持ちを表出できる自信を持ったことで、いつまでもカフェに行きたいそのためにもこの地域で自立した生活を送りたいと語った。今、出来ていることをこれからも出来るようにしていきたいと願い、今まで培ってきた経験や知識から自分で考えて行動していくための持っている力を生かしていきたいと語っていた。

〈本音の言える自信〉

「嫌な顔ひとつしないで話をうん、うんと聞いてくれる、すごくうれしく勇気づけられた。自分は間違ったことを言っていないだって、自信がついた」(Z-29)

〈持てる力を高める〉

「自分の身の回りの世話や生活を自分でやっているから自由に過ごせると思っている。人様に世話にならないように、1日でも長く自分のことは自分でしたい、持っている生きる力が衰えないように高めていきたい」(AW-11)

《今この瞬間を積極的に生きる》は、〈受け止める〉、〈主体的な行動〉、〈「これから」を持つ〉の3つの下位カテゴリから構成された。先のことばかり心配したり不安になったり、身動き取れないようにしている自分に気がついたと語っていた。今をどのように生きるか、人任せにしない

いで自分で考えていく。自分がこれから先どうしたいのかどう生きていきたいのかを考えて大事に過ごしたいと語った。

〈受け止める〉

「今を一生懸命に生きてと思っています、その方が納得できる気がするんですよ。先の人生も今の延長にあるんですよ。一生懸命だから失敗しても次につながる気持ちがあるような気がする、現実には難しいだろうけど」 (E-5)

〈主体的な行動〉

「つつい人をお願いしてしまうことが多いけど、自分で考えて行動して積極的に関わってきたい」 (AY-8)

〈「これから」を持つ〉

「先のことって死ぬときのことばかり考えていた。でもまだまだなんだった。これからどうしたいかどうなりたいかって考えて生活を送っていききたいですね、そう思うと楽しい」 (V-14)

《社会環境の再認識》は、〈家族や親せきとの関係〉、〈地域社会との関係〉、〈意向に沿わない関係〉の3つの下位カテゴリから構成された。いろいろな人が支えてくれている、家族や地域それぞれとの関わり、お互いに模索しながらも認識の道はつながり始めている。感謝の思いも持ちながらも意向に沿わない関わりへの抵抗感も根強いと素直な思いを語った。

〈家族や親せきからの援助〉

「近くにいる家族や親せきにはつつい強情なところがでちゃって失敗しちゃったりして。助けてもらっていると素直に感謝を持ちたいと思います。自分だけがこうだあだだって思ってしまった感情的に考えることが多かった」 (AE-35)

〈地域からの援助〉

「支えて貰ってあたり前から自分でも支える立場にもなるんだって。何でもマイナス面よりプラス思考っていうんですかね、そうすることで自分にも自信がつく」 (G-6)

〈意向に沿わない援助〉

「強制的にこうしろとか言われるのは本当に嫌だ。こっちの生活もしらないのに勝手に決めつけてくる。我慢しないで自分の思いを話すことでお互いを知ることが何より大事」 (AQ-11)

1-3-2 ボランティアの意義から抽出されたカテゴリー概要

12名のボランティア、3名の医療職者に対するインタビュー逐語録をデータ分析の結果、37下位カテゴリー、17中位カテゴリー、7上位カテゴリーが抽出された（表2-資料3）。

表2-資料3 カテゴリー一覧表（ボランティアの意義）

【上位カテゴリー】	《中位カテゴリー》	〈下位カテゴリー〉
【恩返し】	《感謝》	〈人生への赦し〉 〈当たり前を当たり前で過ごせる幸せ〉
	《生きてきた証》	〈次代へ継承〉 〈肯定的存在意義〉
	《願い》	〈交流を持つ〉 〈主観的価値観からの脱皮〉
【低い自己評価】	《心のゆがみ》	〈出来ない自分に脅かされる〉 〈出来ない自分に抵抗する〉
	《役割変化》	〈子離れ〉 〈親離れ〉 〈敬称のない存在〉
	《人とのかかわりの難しさ》	〈引け目を感じる〉 〈半信半疑な思いを持つ〉
	《健康を守る》	〈傾聴〉 〈血圧測定〉 〈助言と指導〉
【専門家としてかかわる】	《白衣姿でない関係性》	〈自然体を促す〉 〈抵抗感を減らす〉
	《近づく老い》	〈思いや期待を紡ぐ〉 〈老いに寄り添う〉
【お互いさま】	《支え合う仲間とを感じる》	〈支え合う仲間としての高齢者〉 〈支え合う仲間としてのスタッフ〉
	《周囲に影響されない芯を持つ》	〈自信のない自分と一緒にいることができる〉 〈一段一段を確実に超える〉 〈完璧な自分へのこだわりを捨てる〉 〈出来ない自分も自分と認めてコントロールできる対象と認識する〉
【前に進む力をつけていく】	《否定的思考と距離を持つ》	〈「しょうがない」に肩代わりしてもらおう〉 〈めげない心を持つ〉
	《自分を見る目が培われる》	〈客観的視点を習慣化〉 〈参加者やスタッフから多くの視点を得る〉
【自分と向き合う】	《自分をさらけ出す》	〈ネガティブ思考の自分〉 〈ポジティブ思考の自分〉
	《幅広い役割》	〈些細な変化を見落とさない〉 〈適切な医療や介護へつなげる〉 〈出来ることと出来ないこと〉
【幅広い役割】	《早期発見》	〈適切な医療や介護へつなげる〉
	《橋渡しの役目》	〈出来ることと出来ないこと〉
【自分と向き合う】	《風通しの良い関係づくり》	〈異分野を受け入れる〉 〈専門職同士のコミュニケーション力〉

① 【恩返し】

【恩返し】は、《感謝》、《生きてきた証》、《願い》の3つの中位カテゴリーから抽出された。

《感謝》は、〈人生への赦し〉、〈当たり前を当たり前で過ごせる幸せ〉の2つの下位カテゴリーから構成された。ボランティアからの語りである。今までの人生を振り返るといろいろな経験をした、今ここで生かされていることへの感謝と許しを得たい気持ちを語った。何気ない当たり前の日常や普段の生活を送れることに感謝の思いを強く持つようになったと語っていた。

〈人生への赦し〉

「自分がボランティアなんてやるとは思わなかった、いろんなことがあった。でも今ここに生かされていることに感謝をするようになってきた。参加者のお手伝いをすることで生きてきた人生に赦しを乞うている」(CC-8)

〈当たり前の日常を当たり前で過ごせる幸せ〉

「東日本大震災以降、いつ何時何がおきるか分からない世の中になった気がします。一方で被害者がいて一方で支援に回る人もいるけど、いつ逆になるか分からないと思うんです。朝起きて夜寝るまで一つ一つの何気ない日常生活を送れることって幸せなことなんだって、感謝するようになりました」(CA-9)

《生きてきた証》は、〈次代へ継承〉、〈肯定的存在意義〉の2つの下位カテゴリから構成された。ボランティアからの語りである。自分が生きてきた中で培ってきた知識や技術を次の世代につなげていきたいと願っていた。つながっていくことで自身の肯定的意味づけになっていくと語った。

〈次代への継承〉

「何ってことないだろうけど、お茶の出し方一つ知らない人もいますでしょ。培った知識や学びを次の代に伝えていきたい。」(CH-13)

〈肯定的存在意義〉

「人から頼られ、褒められ、信頼されることで生きてきた人生や自分が肯定されるそんな気がするんです」(CM-7)

《願い》は、〈交流を持つ〉、〈主観的価値観からの脱皮〉の2つの下位カテゴリから構成された。ボランティアからの語りである。人との交流を持っていたい、自己中心的な考えや思い込みから抜け出したい。他者との関係性に変化をうみ出したい、思い込んでいた偏見から脱皮して関係性を深めたいと願っていた。

〈交流を持つ〉

「なかなか人とのコミュニケーションが上手くできていないんです、知らないあいだに壁をつくっているんでしょうね。他愛ないおしゃべりで笑う、そんなときを持ちたいなって思いました」(CJ-6)

〈主観的価値観からの脱皮〉

「女性特有ですか、嫉妬したり僻んだりって。思い込みって怖いですよ、人との関係性に変化ができてくるような気がしています、もっともっと関係性を大事にしたいって」(CK-7)

② 【低い自己評価】

【低い自己評価】は、《心のゆがみ》、《役割変化》、《人とのかかわり難しさ》の3つの中位カテゴリから抽出された。

《心のゆがみ》は、〈出来ない自分に脅かされる〉、〈出来ない自分に抵抗する〉の2つの下位カテゴリから構成された。ボランティアからの語りである。高齢期に差し掛かり、忍び寄る心身

の変化も自覚して、低い自己評価につながっていた。あるがままの自分を受け止めきれずに抵抗感を抱くと語っていた。

〈出来ない自分に脅かされる〉

「本当に頑張ってきました、でも体力的にも精神的にも年齢とともに低下していますよね。そんな自分には役割がないような気がして、そんな自分って認めたくない」(CC-15)

〈出来ない自分に抵抗する〉

「滑稽だなんて思うことがあります、年をとっていき現実を受け止められないんですよ。頭の中では分かっているんですよね、きっと。でも出来ないことも出てきたあるがままの自分と向き合えずに抵抗感すらあります」(CI-21)

《役割変化》は、〈子離れ〉、〈親離れ〉、〈敬称のない存在〉の3つの下位カテゴリから構成された。ボランティアからの語りである。家庭の中でも外でも役割が変わったと語っていた。そんな変化に適応できない自分がある。現実逃避する者、以前の役割にしがみついている者と様々である。年を重ねてなくすものだらけだとしみじみと語った。

〈子離れ〉

「もう子どもは、自分が結婚していた年齢になっているんですけど。気持ちは幼いときの子どものままなんですよ。頼りにされるとうれしくなっちゃう自分がある。会いに来てくれる時は小さい頃に好きだった好物を一生懸命に作っている、分かっているんですよ、お恥ずかしいけど子離れできない」(CN-19)

〈親離れ〉

「母と二人暮らし、母の優しさが心地良かった。母を看取るって覚悟をしてけど現実はずれていた、亡くなる際はそばにいるのが怖くて不安で逃げていた。今も亡き母を求めています」(CL-3)

〈敬称のない存在〉

「何十年って、〇会社の△さんって言われていました。会社の文句ばかり言ってたけど、いざ〇会社の△さんって言われないと寂しいですかね、役割がないような気がしています」(CL-33)

《人とかかわりの難しさ》は、〈引け目を感じる〉、〈半信半疑な思いを持つ〉の2つの下位カテゴリから構成された。ボランティアからの語りである。自信を持っていないから、人と比較しては引け目を感じる。人前では目立たないような存在になるようにしてきた。他者への半信半疑な思いは強く、信頼した関係性が築けないと語った。

〈引け目を感じる〉

「自分に自信が持てないからなるべく存在自体を目立たないようにしていました。人と比べては引け目を感じて自己嫌悪になっての繰り返し」(CA-23)

〈半信半疑な思いを持つ〉

「こんな自分と関わろうなんて思い人は裏があるんじゃないかって、疑心暗鬼でした。利用されるんじゃないかって半信半疑な気持ちで人とはつきあっていました」(CE-8)

③ 【専門家としてかかわる】

【専門家としてかかわる】は、《健康を守る》、《白衣姿でない関係性》の2つの中位カテゴリから抽出された。

《健康を守る》は、〈傾聴〉、〈血圧測定〉、〈助言と指導〉の3つの下位カテゴリから構成された。医療職者からの語りである。専門家としてカフェにかかわる姿勢として高齢者の健康を守ることを役目として捉えている。素直な気持ちの表現を促すための工夫をしている。血圧測定は抵抗感の少ない身近な健康のバロメーターとなっていると語っていた。

〈傾聴〉

「相手に注意を向けること、とっても難しいんです。話すことで自身が気がつくことはいっぱいあると思います。まずはご自分を話して貰うこと、話していいんだよって空気づくり」(CA-10)

〈血圧測定〉

「血圧って自宅でデジタル測定している人って多いんです。でもアナログでシュッシュと圧力をかけて測る信頼性は根強い。数字で分かるし、いつもと比較しやすいから体調の変化が高齢者も分かりやすい、そこから人との信頼関係ができる」(CC-2)

〈助言と指導〉

「一方的に客観的にこうだからこうだなんて言えないですよ、丁寧に話を聞くことで信頼性ができて、ようやく私の話を聞こうと思ってくれるんじゃないですか、計算づくで考えても思うようにはならない」(CA-34)

《白衣姿でない関係性》は、〈自然体を促す〉、〈抵抗感を減らす〉の2つの下位カテゴリから構成された。医療職者からの語りである。白衣姿で接することは患者様と医療職者とした関係性をうみ出しやすい、対等な関係性を大事にすると語っていた。普段の生活での心配ごとを語れる安心感、緊張したり不安がらない気持ちをカフェが担っていると考えていた。

〈自然体を促す〉

「病院に行った緊張感と同じような思いを抱くのであれば、病院に行った方がいいのではないかと思います。カフェだからこそ自然体の普段の姿に近い状況を作り出す役目ではないか、そこで見つけられることはいっぱいあります」(CB-10)

〈抵抗感を減らす〉

「病院が好きな人っていないでしょう。行ってこうです、ああですって言われると思うと抵抗を感じますね。このカフェの場だからこそ緊張や不安を柔らげる力になるんじゃないでしょうか」(CC-29)

④ 【お互いさま】

【お互いさま】は、《近づく古い》、《支えあう仲間とを感じる》の2つの中位カテゴリから抽出された。

《近づく古い》は、〈思いや期待を紡ぐ〉、〈老いに寄り添う〉の2つの下位カテゴリから構成された。ボランティア、医療職者からの語りである。高齢期に近づく自分たちだからこそ受け止められる思いがある。カフェ来ている時間はそっとそばにいたいと思願う気持ちを語った。

〈思いや期待を紡ぐ〉

「相手の思いや期待を丁寧に言葉として紡いでいく、もうすぐ高齢期に入る自分だからこそできること分かってあるかと思っています。いずれ自分たちも同じ立場、お互いさまです」(CE-2)
〈老いに寄り添う〉

「誰だって老いは不安です、この時間だけでもそっとそばにいたいと思います。自分もそうして貰いたい」(CD-31)

《支え合う仲間とを感じる》は、〈支え合う仲間としての高齢者〉、〈支え合う仲間としてのスタッフ〉の2つの下位カテゴリから構成された。ボランティア、医療職者からの語りである。時には支え、支えてもらう関係、老いに向かう仲間としての意識が強いと語った。高齢者との関係もスタッフ同士の関係もお互いさまの気持ちが強く、頼ったり頼られたり年代が近く思いを共感しやすいこともあるかもしれないと語っていた。

〈支え合う仲間としての高齢者〉

「年齢も兄弟ぐらいの違い、親近感がお互いにあるんじゃないでしょうかね。相手を尊重して時にはお世話になったり、お世話したり支え合う仲間みたいなギブアンドテイクですよ」(CO-6)

〈支え合う仲間としてのスタッフ〉

「ボランティア同士も年齢的に近い人たちが多く、無理しないで続けていける助け合い、お互いさまの気持ちは強いんだと思います」(CF-12)

⑤ 【前に進む力をつけていく】

【前に進む力をつけていく】は、《周囲に影響されない芯を持つ》、《否定的思考と距離を持つ》の2つの中位カテゴリから抽出された。

《周囲に影響されない芯を持つ》は、〈自信のない自分と一緒にいることができる〉、〈一段一段を確実に超える〉、〈完璧な自分へのこだわりを捨てる〉、〈出来ない自分も自分と認めてコントロールできる対象と認識する〉の4つの下位カテゴリから構成された。ボランティア、医療職者からの語りである。自分の言動や行動、思考に自信を持ってない。現実のあるがままの自分も自分と受け入れることで、物事の捉え方は変わり、固執した思いから抜けていくと語っていた。

〈自信のない自分と一緒にいることができる〉

「自分に何事においても自信ないの、だから何時でも周囲の顔色を窺ってしまう。何やっているんだらうって思うんだけど、人に理由づけしていた方が気持ちがラクなのよね」(CB-25)

〈一段一段を確実に超える〉

「小さい階段を確実に上っていくような感じで。あわてずに歩を進めるってことかしらね。」(CK-34)

〈完璧な自分へのこだわりを捨てる〉

「完璧って自己満足ですよ、人はそれをどう思うかは別の話だと思うから。でも不安なんです、自分としてここまでは絶対にやるっていう線を緩めるのって。でも自分を信じて完璧にできない自分にも良いところはいっぱいあるって思うようにしています」(CO-19)

《否定的思考と距離を持つ》は、〈「しょうがない」に肩代わりしてもらう〉、〈めげない心を持つ〉の2つの下位カテゴリから構成された。ボランティア、医療職者からの語りである。否定

的思考と対峙するのではなく、距離をおいて捉えることで自由度の高い思考力を養っていくと語った。時に「しょうがい」と受け流す勇気を抱くことも自分を守ることになると語っていた。

〈「しょうがない」に肩代わりしてもらおう〉

「いくら考えてもできないこともあります、満足 of いかないときもあります。「しょうがない」って思うことはあきらめじゃないって思うようにしています」(CG-18)

〈めげない心を持つ〉

「強くなることですかね、柔軟で自由度の高い捉え方を持つことじゃないですか」(CE-37)

⑥ 【自分と向き合う】

【自分と向き合う】は、《自分を見る目が培われる》、《自分をさらけ出す》の2つの中位カテゴリから抽出された。

《自分を見る目が培われる》は、〈客観的視点を習慣化〉、〈参加者やスタッフから多くの視点を得る〉の2つの下位カテゴリから構成された。ボランティア、医療職者からの語りである。人と関わりを持つことから主観的思考から客観的な視点を養う学びになっていた。自分では気づかなかった視点を得て知ること、自分との向き合い方や自分を見る目も培われていくと語った。

〈客観的視点を習慣化〉

「感情で考えちゃうんです、その時の雰囲気とか自分の体調だとかでね。参加者や同年代のみなさんと関わりを持つことでいくつもの立ち位置の中から客観的に事実を把握しようと考えるだけでも考え方はずいぶんと違ってきています。」(CA-36)

〈参加者やスタッフから多くの視点を得る〉

「人と話すことで自分も気がつくことがありますね、こんな考え方もあるんだとか。自分にも肯定的になっていくように思います。こうでなくちゃいけないとかこうあるべきだとか考えなくなってきたかもしれませんね」(CN-7)

《自分をさらけ出す》は、〈ネガティブ思考の自分〉、〈ポジティブ思考の自分〉の2つの下位カテゴリから構成された。ボランティア、医療職者からの語りである。否定的な思考も肯定的思考をする自分も自分、どちらの考え方をするのも自分である。素直にありのままの自分を可視化する勇気を持つことで初めて自分と向き合えると語った。

〈ネガティブ思考の自分〉

「だいたいいつもろくなことを考えないんですよ、マイナスなことばかり考えてしまっ。もっと陽気に生きられればいいのになって思うんです。こんな自分っていやだなって」(CI-1)

〈ポジティブ思考の自分〉

「前向きに考えるようにしたいと常日頃から思っています、だって楽しくないじゃないですか。積極的に生きることで後悔ってないんじゃないかなって」(CH-15)

⑦ 【幅広い役割】

【幅広い役割】は、《早期発見》、《橋渡しの役目》、《風通しの良い関係づくり》の3つの中位カテゴリから抽出された。

《早期発見》は、〈些細な変化を見落とさない〉の1つの下位カテゴリから構成された。医療職者からの語りである。来られる参加者の多くの健康情報を把握しているからこそその思いである。本人は気づいていない些細な変化に気づく自分のアンテナを常に持っていたいと力強く語っていた。

〈些細な変化を見落とさない〉

「専門的な見方でしょうかね、何でもない言葉や抑揚、その時の表情に気をつけています。ん？何か違うぞみたいな感覚は大事にしています」(CB-4)

《橋渡しの役目》は、〈適切な医療や介護につなげる〉、〈出来ることと出来ないこと〉の2つの下位カテゴリから構成された。医療職者からの語りである。適切な医療や介護に速やかにつなげる役目であり使命であると語っていた。速やかにつなげるためにも自分の役割として出来るものと出来ないもの客観的に判断するように心掛けていた。

〈適切な医療や介護につなげる〉

「ただ単に、これは病院で診て貰った方がいいと思って丸投げすることとは違う、高齢者の思いに出来るだけ沿って適切な支援につなげることじゃないでしょうかね。来られるたびに血圧測定をして信頼関係を作ってきたから出来ることだと自負しています」(CC-26)

〈出来ることと出来ないこと〉

「どうしても自分が自分がって思ってしまうこともあります、とても親しくさせていただいている方だと何とか自分で出来ないかと思ってしまう。医療職のはしくれとしても客観的判断のもとで速やかにつなげることを第一に考えないといけないと気をつけています」(CC-25)

《風通しの良い関係づくり》は、〈異分野を受け入れる〉、〈専門職同士のコミュニケーション力〉の2つの下位カテゴリから構成された。医療職者からの語りである。狭い分野内に凝り固まらずに異分野や他職種から得る知恵も多い、違う視点から捉えることで問題の解決につながることも多い。役割を固定せず何でも屋的な気持ちは必要であるものの、どうしても情報共有への抵抗感はぬぐえないと語った。

〈異分野を受け入れる〉

「医療は医師と看護師みたいな固定観念がありますね。全く違う分野や専門職でない方々から学ぶことも多い、見方に幅が出来るっていうか。逆に私も自分には関係ないと思わずにアンテナをフル回転しないとなって思っています」(CA-19)

〈専門職同士のコミュニケーション力〉

「自分が自己開示しないと人は開いてくれませんよ、自分の専門性を話し伝えることで自分の立ち位置も理解して貰いやすい、他愛ない話が出る関係性が大事かもしれない」(CC-20)

1-3-3 利用者、ボランティアの期待から抽出されたカテゴリー概要

53名の利用者、12名のボランティア、3名の医療職者に対するインタビュー逐語録をデータ分析の結果、20下位カテゴリー、9中位カテゴリー、3上位カテゴリーが抽出された（表3-資料3）。

表3-資料3 カテゴリー一覧表（利用者、ボランティアの期待）

【上位カテゴリー】	《中位カテゴリー》	〈下位カテゴリー〉
【双方の経験や知恵を活用する場づくり】	《現状の許容》	〈目標の再選択〉
	《望み》	〈目標の妥協〉
	《次世代へつなげる》	〈抽象的望み〉
		〈具体的望み〉
【支援する関係づくり】	《個人プレー》	〈先人としての自覚〉
	《チームプレー》	〈道しるべ〉
	《難しさ》	〈個々の視点を活かす〉
		〈個々の役割を自覚する〉
		〈互いの専門性を尊重する〉
【「プライベート」と「パブリック」との接点】	《心理的意味づけ》	〈互いの経験を活かす〉
	《社会的意味づけ》	〈互いの専門性を尊重する〉
	《偶然的意味づけ》	〈長期的関わりの難しさ〉
		〈行政との関わりの難しさ〉
		〈地域との関わりの難しさ〉
		〈捉われからの解放〉
	〈自己像の再獲得〉	
	〈新たな交流の苗床機能〉	
	〈地域への関心移行〉	
	〈地域への信頼感〉	
	〈タイミング〉	
	〈縁〉	

① 【双方の経験や知恵を活用する場づくり】

【双方の経験や知恵を活用する場づくり】は、《現状の許容》、《望み》、《次世代へつなげる》の3つの中位カテゴリーから抽出された。

《現状の許容》は、〈目標の再選択〉、〈目標の妥協〉の2つの下位カテゴリーから構成された。高齢者、ボランティアからの語りである。これからも元気でいたいと願う、現状を許容することで新たな目標を能動的に選び直していく。長年培ってきた経験や知恵から選び直すことで身の丈に合った目標となっていくと語った。

〈目標の再選択〉

「今の自分を受け入れ直すことで、これからの目標を再選択していきたい」（K-45）

〈目標の妥協〉

「妥協するっていやな言い方だけどそうじゃなくて。理想を追い求めるんじゃなくて、今の自分のみの丈にあった目標、地に足がついた目標を持ち直していくことだと思っています」（L-49）

《望み》は、〈抽象的望み〉、〈具体的望み〉の2つの下位カテゴリーから構成された。高齢者、ボランティアからの語りである。経験や知恵を活用する場づくりとして、自分自身の個性や特技を活用する場と具体的に経験してきたことや学んできたことを活用する場を望む気持ちを持っている。活用する場があることで生きてきた人生を己が認められるとも語っていた。

〈抽象的望み〉

「自分の個性や特技や趣味を活用する場があるとうれしい、自分が得意としている分野だからこそ自信にもつながるし、満足感や良い行ないをしているといった自負心が持てる」（AK-44）

〈具体的望み〉

「学んできたことや知恵を活用できるっていうと大げさだけど、活用できる場があるといいかなって。培ってきた経験を活用することで自分が生きてきた価値みたいなものも感じてこれからのやりがいになるかもしれません」(CD-53)

《次世代へつなげる》は、〈先人としての自覚〉、〈道しるべ〉の2つの下位カテゴリーから構成された。高齢者、ボランティアからの語りである。人生の先人として知恵や助言を、成功も失敗も乗り越えてきた強さがある。人生の道しるべとして次世代につなげていく場づくりが必要だと語った。

〈先人としての自覚〉

「成功も失敗も乗り越えてきた経験には、自分の価値判断なんて通用しないと思う。だって間違っていたら乗り越えてないと思う。先人からの助言や知恵だからこそ素直に受け入れられる、それを次につなげないといけないとも思っている」(BA-51)

〈道しるべ〉

「経験者からの助言は邪魔にはならない。方位磁石みたいなものですかね。人に聞いて知ってもらうことで役立てて欲しいことっていっぱいありますよ」(CL-62)

② 【支援する関係づくり】

【支援する関係づくり】は、《個人プレー》、《チームプレー》、《難しさ》の3つの中位カテゴリーから抽出された。

《個人プレー》は、〈個々の視点を活かす〉、〈個々の役割を自覚する〉の2つの下位カテゴリーから構成された。医療職者からの語りである。支援する関係づくりとして個人での関わりは支援の根幹である。専門家としての見方や専門性の役割は多義に亘り、活用の場は広いと語った。

〈個々の視点を活かす〉

「自分だからこそ、見えているものがある。専門性を活かす活かさないも自分次第だと思っています。」(CA-41)

〈個々の役割を自覚する〉

「自分がすることって何かと考えるようにしています。役割を自覚することでおのずとおこなうことは見えてくるんじゃないでしょうか」(CO-47)

《チームプレー》は、〈互いの経験を活かす〉、〈互いの専門性を尊重する〉の2つの下位カテゴリーから構成された。医療職者からの語りである。高齢者が主人公としながらも、様々な職種集団や地域住民も入って関わりを目指していく。情報共有化を土台とした柔軟な発想力と多様な視点を活かしていく。そこには固定観念を外した支援関係を目指すと言っていた。

〈互いの経験を活かす〉

「様々な経験や学びを経験しているからこそ専門性を超えた新しい見方や考え方を活かすことができる。目線が違っているからいいんですよ。私たちには見落としている状況や場面を指摘してくれることって重要ですよ。出来ないと思っていたことが見方を変えることで出来ると思っ

います」(CB-44)

〈互いの専門性を尊重する〉

「互いの専門性を尊重することなんじゃないですか。役割を共有して補完していく、この人は必要がないとかじゃない、関わりのある多くの人に率先して入って貰いたい」(CC-60)

《難しさ》は、〈長期的関わりの難しさ〉、〈行政との関わりの難しさ〉、〈地域との関わりの難しさ〉の3つの下位カテゴリから構成された。ボランティア、医療職者からの語りである。単身世帯のため長期的に関わりを持つことの難しさや行政の方針に影響を受けやすいと語っていた。地域が持つ力や情報力が何よりも大切であるものの、自治会等との信頼関係が築きにくい難しさもあり関係性の課題は急務であると語った。

〈長期的関わりの難しさ〉

「単身世帯が多いんですよ。参加者が入院したり施設に入所すると、そこで関わりが途切れてしまう。退院していても参加者が来れなければそこで支援する関係性も維持できない」(CM-41)

〈行政との関わりの難しさ〉

「行政の方針に影響を受けやすいというか、受けざる負えない場合があります。現場と事務方での温度差も正直ありますよ。でも私たちが現状を伝えていく役目だと思っているんです」(CH-58)

〈地域との関わりの難しさ〉

「地域の方々の力は必要です、普通の参加者に近い存在です。自治会の役員さん等が参加されていないことが多く、情報共有はもちろん、信頼関係を築きにくい点があります」(CM-53)

③ 【「プライベート」と「パブリック」との接点】

【「プライベート」と「パブリック」との接点】は、《心理的意味づけ》、《社会的意味づけ》、《偶然的意味づけ》の3つの中位カテゴリから抽出された。

《心理的意味づけ》は、〈捉われからの解放〉、〈自己像の再獲得〉、〈新たな交流の苗床機能〉の3つの下位カテゴリから構成された。高齢者、ボランティア、医療職者からの語りである。人との出会いや体験を通じて新しい交流関係を育て紡いでいく。自分を知り認め受け入れる作業を通じて社会環境との適応モデルを作り出していく。活動力も高まり、捉われから滞っていた機能を回復していくきっかけになる場になると語っていた。

〈捉われからの解放〉

「人との出会いや体験を通じて、固執していた思いから解き放たれるんじゃないかと思っています。関係性を育むことで新しい公（おおやけ）の場と私（わたくし）の場とのつながりが結ばれるように思っているんです、人との関係性を持つようとしている」(CI-50)

〈自己像の再獲得〉

「プライベートな部分ではどうしても主観的位置になりやすい、でもパブリックな部分ではそんなわけにはいかない。自分を知ることですよ、一方から見ていた自分を逆から見る機会を得ることで新たな自分を知っていく」(U-23)

〈新たな交流の苗床機能〉

「新しい出会いや関わりから、その先の関係性に発展していく。人や地域や社会との新たな交流

の種をまく場でもあるのかなって」(CJ-52)

《社会的意味づけ》は、〈地域への関心移行〉、〈地域への信頼感〉の2つの下位カテゴリから構成された。高齢者、ボランティア、医療職者からの語りである。近隣との挨拶程度の関係から立ち話の関係へ、地域への関心は身近なものとなっていく。支え、支え合う対等な関係性を深化していくことから信頼関係を得ていく。孤立感軽減も視野に入れていけるのではないかと語っていた。

〈地域への関心移行〉

「挨拶程度だった人と立ち話をするようになる、地域の出来事や情報が話題になることは十分考えられる。居住地域がもっと身近になるんじゃないかと思うんですよ。ああしようとかこうしたらいいんじゃないかって地域を率先して考えるようになって欲しい」(CD-56)

〈地域への信頼感〉

「してあげているとか、してもらっているって関係ではなく対等な関係だから言いたいことを言い合える。そんな関係性が必要なんです。人とのつながりを持つことで地域への信頼感や安心感が作られていく」(AJ-57)

《偶然的意味づけ》は、〈タイミング〉、〈縁〉の2つの下位カテゴリから構成された。高齢者、ボランティア、医療職者の語りである。意識して問題視されていない部分での予防的役割の機会と必要となり得るタイミングが重なることで安心感は強まり、計り知れない縁を持つことでさらに深化していく。予期しない偶然的意味づけの影響力は大きいとも語っていた。

〈タイミング〉

「タイミングよく、問題解決に結びつくつながりが知識を得られることってあるんですよ。肯定的な意思が強く働いていくんじゃないですか。期待せずに偶然に得られたものだから」(T-38)

〈縁〉

「ご縁があるって言いますよね、よく分からない関係性を生み出す力っておもしろい。カフェに来るきっかけも偶然に前を通りかかってなんてよく聞きます」(S-50)

1-3-4 代表者のインタビュー調査結果から抽出されたカテゴリー概要

代表者に対するインタビュー逐語録をデータ分析の結果、31 下位カテゴリー、15 中位カテゴリー、6 上位カテゴリーが抽出された（表 4-資料 3）。

表 4-資料 3 カテゴリー一覧表（代表者のインタビュー調査結果）

【上位カテゴリー】	《中位カテゴリー》	〈下位カテゴリー〉
【きっかけづくり】	《人とのきっかけづくり》	〈希望を生み出す〉 〈関係の質の変化〉 〈外向き行動への変容〉
	《社会とのきっかけづくり》	〈再認識〉 〈主観的固執を和らげる〉 〈人任せから主体的取り組みへ〉
	《地域とのきっかけづくり》	〈興味を持つ〉 〈つながろうとする気持ち〉 〈ギーマンの存在〉
【自由さ】	《利用形態の自由さ》	〈自由な活動〉 〈自由な時間〉
	《気ままな連帯感》	〈仲間意識〉
【全員が主人公】	《共に成長する》	〈成長感を得る〉 〈自分自身のありよう〉
	《共に生きる》	〈パートナー関係〉 〈スイッチをオフに出来る関係〉
【自立へつなげる】	《生きがいつくり》	〈出番をつくる〉 〈役に立つ〉
	《新しい集いを生む》	〈自主的な活動支援〉
	《自活の喜び》	〈干渉と優しさの違い〉 〈求める生活へサポートづくり〉
【非日常感を味わう】	《お出掛け》	〈外出着に着替える〉 〈よそゆき表情と言葉〉 〈化粧〉
	《茶菓の接待》	〈特別感〉 〈こころ躍る〉
【ひらかれた場づくり】	《固定化への抵抗》	〈新参者も仲間〉 〈決めつけない役割分担〉 〈経験や個性を活かす〉
	《押し付けない利用》	〈送迎の意味づけ〉
	《つなげる》	〈適切な見立て〉

① 【きっかけづくり】

【きっかけづくり】は、《人とのきっかけづくり》、《社会とのきっかけづくり》、《地域とのきっかけづくり》の3つの中位カテゴリーから抽出された。

《人とのきっかけづくり》は、〈希望を生み出す〉、〈関係の質の変化〉、〈外向き行動への変容〉の3つの下位カテゴリーから構成された。開設当初の思いを語った。生きる希望をつくり、近隣の人との関係が変化していくことで、内から外に向かう自分の行動が作られていく。人とつながるきっかけづくりから始まったと語っていた。

〈希望を生み出す〉

「今日よりも明日が良い日になるように、生きることに明るい見通しを持って貰いたい。そんなきっかけがカフェで出来るのではないかと考えました」(DA-3)

〈関係の質の変化〉

「テレビと会話する、それって会話じゃない。人と話して聞いて感じるから会話となる。人とのつながりを求めている、素直な思いを表現できない高齢者に糸口を紡いで貰いたい。見たことある人から知人へ関係性を深めるきっかけづくりの一助になればとね」(DA-9)

〈外向き行動への変容〉

「人や地域に興味を持って貰いたいですね。興味を持つことでもっと知りたいと思うことが出て

来る、出掛けるきっかけになるし、話すきっかけにもなっていくと思うんです」(DA-11)

《社会とのきっかけづくり》は、〈再認識〉、〈主観的固執を和らげる〉、〈人任せから主体的取り組み〉の3つの下位カテゴリから構成された。開設当初の思いを語った。人生の一端を人任せから自分はどうしたいのか、自分で考えるようにする。現状を知ることによって固執した物の見方や考え方を見直して主体性の回復を願っていた。

〈再認識〉

「区の広報紙も読まない、エレベーターホールにお知らせを掲示していても見ない、それではだめですね。自分が住んでいる地域だからこそ、もっと過ごしやすくする取り組みに進んで参加して欲しい。考えるってことです」(DA-13)

〈主観的固執を和らげる〉

「人とのつながりがないと自分中心になりやすい。感情に左右されて客観的な考え方をしなくなる。自分一人の物の見方や考え方に固執せずに、いろんな見方や考え方があることを見つめ直す力を持って欲しいですね。生き方にも幅が出来るはず」(DA-19)

〈人任せから主体的取り組み〉

「人に任せておけば気軽ですよ。自分の過ごしやすいように生きやすいようにしたいって思いを持って貰いたい、それがこの地域を愛してここで過ごしたいって思いになっていく」(DA-24)

《地域とのきっかけづくり》は、〈興味を持つ〉、〈つながろうとする気持ち〉、〈キーマンの存在〉の3つの下位カテゴリから構成された。開設当初の思いを語った。住んでいる地域に興味や関心を持つ、強制されることではない。自分から進んで関わろうとする気持ちである、そこには居住地域にいる信頼するキーマンの存在が大きいと語っていた。

〈興味を持つ〉

「地域で行わる行事や出来事に興味や関心を持って貰いたいんですよね。自分には関係ない他人のことって思うんじゃないくて、へーって。地域へ愛着を抱く、親しみを持って欲しい」(DA-21)

〈つながろうとする気持ち〉

「ここに住んでいくには一人では無理、助け合い助けられ、持ちつ持たれつの対等な関係性があるって初めて安心した居住地になる、強制されない、つながってほしいという気持ち」(DA-28)

〈キーマンの存在〉

「いろんなきっかけづくりが必要だろうけど、そこには信頼するキーマンの存在が大きいと思っています。この人が言うなら間違いないみたいだね、一歩が踏み出せると思う」(DA-32)

② 【自由さ】

【自由さ】は、《利用形態の自由さ》、《気ままな連帯感》の2つの中位カテゴリから抽出された。

《利用形態の自由さ》は、〈自由な活動〉、〈自由な時間〉の2つの下位カテゴリから構成された。開設当初の思いを語った。自分で過ごし方を決める、自由な場であり時間である。集う仲間意識が生まれてくると共にそこには自由さが必要であると語った。

〈自由な活動〉

「ちょこっと寄るってことですよ。そこには縛られるようなことはない。歌や体操があっても強制はしない、やりたければ参加すればいい、自分で過ごし方を決める」(DA-7)

〈自由な時間〉

「いつ来てもいつ去ってもよし。カフェで過ごす時間は短くても長くても誰も何も言わない、自由な時間を自分が描く。後ろ指さされることもない、自分で決める自信につながる」(DA-26)

《気ままな連帯感》は、〈仲間意識〉の1つの下位カテゴリから構成された。開設当初の思いを語った。心のままにつながる仲間意識、自由気ままにおしゃべりを楽しんだり観察者でいたり自分で好きなように関わっていく。そこには気ままに過ごす仲間との連帯感がつくられる。素直な気持ちを話せる場であり、話すことが出来る思いを持つことが、また来たいと思う気持ちにつながっていると語った。

〈仲間意識〉

「お互いが自由に過ごす場であったり、時間をともに過ごすことでお互いを尊重するようになる。仲間としての意識ができてくる。ありのままの自分で過ごす場であって欲しいですね」(DA-34)

③ 【全員が主人公】

【全員が主人公】は、《共に成長する》、《生きる力》の2つの中位カテゴリから抽出された。

《共に成長する》は、〈成長感を得る〉、〈自分自身のありよう〉の2つの下位カテゴリから構成された。現状を語った。ボランティアにとっても高齢者にとっても共に成長する場になっている。思考の幅を広げて、新しい捉え方を生み出す。お互いが肯定感を持って接していくことで、自信を取り戻して、生きがいややりがいといった有益な意味を獲得していくと語った。

〈成長感を得る〉

「ボランティアにとってのカフェの存在は高齢者と同じように大きい。生きがいややりがいにつながり、前向きな思考へと発展させている。年齢が近いせいもあるが、よりよい生活を送るためにどうしたら良いか自分の立場に置き換えて考えているように見える」(DA-36)

〈自分自身のありよう〉

「高齢者もボランティアも関わりを持ちそこに安心感や信頼感がうまれていく。あるがままの自分を表出していく自信につながっているように見える、話すことで気がつくこともある」(DA-39)

《共に生きる》は、〈パートナー関係〉、〈スイッチをオフに出来る関係〉の2つの下位カテゴリから構成された。現状を語った。支え支え合う対等な関係性から生きていくパートナーとしての関係がある。そこには肩ひじ張らずに過ごせる素直な今の自分を出せることでつくられていくと語っていた。

〈パートナー関係〉

「一緒にカフェで過ごすって思いがあるんじゃないですかね。だからこそ共にも困ったことや悩みごと話して知恵を出し合う姿を見掛けます。生きていくパートナー、相棒みたいな関係。誰が主人公ではない、誰でもが主人公になれる居心地の良い場になってきていると思います」(DA-46)

〈スイッチをオフに出来る関係〉

「肩ひじ張らずにありのままの自分でいられるつながり、気張らずにほっとしていられる関係が持てる、誰が主となるのでもない共に繋がって生きていく関係がつくれる」(DA-42)

④ 【自立へつなげる】

【自立へつなげる】は、《生きがいくくり》、《新しい集いをうむ》、《自活の喜び》の3つの中位カテゴリーから抽出された。

《生きがいくくり》は、〈出番をつくる〉、〈役に立つ〉の2つの下位カテゴリーから構成された。今後の展望を語った。高齢者、ボランティアにとっても自分の出番はここだと思える場所をつくることである。自分だから考えられることや発見できることがある、役に立っている存在と思えることが前向きな姿勢をつくり生きがいにつながっていくと語っていた。

〈出番をつくる〉

「自分の出番だみたいな位置を持てることで、おのずと自信がつき、張り合いや生きがいができるのではないだろうか。培った技術や知恵や何でもポケットはいっぱい持っている。ポケットの中から見つけるきっかけとなるお手伝いをしたいと思う」(DA-60)

〈役に立つ〉

「役に立つ存在だと思える場が見つかることは大事だ。生きている意味さえ変わってくるのではないだろうか」(DA-51)

《新しい集いをうむ》は、〈自主的な活動支援〉の1つの下位カテゴリーから構成された。今後の展望を語った。参加者やボランティア、地域住民が自主的に新しい集いの場をつくるきっかけにコミュニティカフェがなって欲しい。そのためにもボランティアへの学習の場を設けたり、自治会との関係を大事にしていると語った。

〈自主的な活動支援〉

「自分の可能性はまだあると思って貰いたい、持っている力は多様性に富んでいる。主体的な活動への支援は惜しまない」(DA-55)

《自活の喜び》は、〈干渉と優しさの違い〉、〈求める生活へサポートづくり〉の2つの下位カテゴリーから構成された。今後の展望を語った。自立を支えることはその人の生き方を尊ぶことである。願う思いに寄り添うことが重要である。それは抵抗感の抱かない関係性をつくることから始まり、自立した生活を送る喜びは生きる意欲のサポートになると語っていた。

〈干渉と優しさの違い〉

「一方的に、考えや形に従わせるようなことは人の家に土足で上がることと一緒だ。願っている思いにどのように近づけられるかを考えることだ、優しさは干渉することではない」(DA-64)

〈求める生活へサポートづくり〉

「求める生活とは何であろう、高齢者が素直な思いを語る抵抗感をなくすことがスタートだ。本当に願っている生活をいかに話して貰うか、難しいことだが信頼関係をコツコツ積んでいくことじゃないか」(DA-58)

⑤ 【非日常感を味わう】

【非日常感を味わう】は、《お出掛け》、《茶菓の接待》の2つの中位カテゴリから抽出された。

《お出掛け》は、〈外出着に着替える〉、〈よそゆき表情と言葉〉、〈化粧〉の3つの下位カテゴリから構成された。今後の展望を語った。普段着でない外出の機会は少ない、化粧をしての外出も多くはない。数年、数十年前に買ったよそゆきの服に着替えて身支度をする。猫背だった姿勢からやや上向きの姿勢となっていく。アクセサリをつけることもある。一つ一つが思い出の品である。人生を回想することで自信を取り戻す、そして自分の持っている力を取り戻すと語った。

〈外出着に着替える〉

「自宅にいる時とは違うおめかしをしてくる人が多い、女性はアクセサリをつける人もいる。肩パットがたっぷり入ったジャケットや大きなアクセサリ、その一つ一つに忘れていた思い出がある、自宅では感じ得ない懐かしく心躍る気持ちになることもある」(DA-30)

〈よそゆきの表情と言葉〉

「よそゆきの表情なんですよ、おすましっていうんですか。口角が上がって言葉も違う。ほどよい緊張感の中で過ごす非日常の空間」(DA-29)

〈化粧〉

「何年前に買った口紅だと見せてくれるんですよ、照れながらもうれしそうな表情を浮かべるんですよ。高揚感ですよ。生きているんだって実感がそこにあるんじゃないかな」(DA-31)

《茶菓の接待》は、〈特別感〉、〈こころ躍る〉の2つの下位カテゴリから構成された。今後の展望を語った。茶菓の接待の役割は大きい。客人としての姿勢や毎回違うお菓子を楽しみにこころ躍る。茶菓を通じて会話が弾み、リラックスできると語っていた。

〈特別感〉

「日常の買い物以外に外出する機会って少ない、喫茶店行ったりもしないから接待をいただく機会はおのずと少ないんです。だからこそ特別感を持って気分は高まります」(DA-67)

⑥ 【ひらかれた場づくり】

【ひらかれた場づくり】は、《固定化への抵抗》、《押し付けない利用》、《つなげる》の3つの中位カテゴリから抽出された。

《固定化への抵抗》は、〈新参者も仲間〉、〈決めつけない役割分担〉、〈経験や個性を活かす〉の3つの下位カテゴリから構成された。今後の展望を語った。カフェを開設して5~7年が経った。顔見知りの友人が出来ることで席の固定化が発生しやすい環境をつくっている。新しい参加者が居心地の良い場になるようにどう切り込むか課題であるとも語っていた。コミュニティカフェに関わる人たちの個性や特技、知恵を活かす場につなげていきたい、己を認める場をつくる必要ではないかと語った。

〈新参者も仲間〉

「顔見知りが出来て仲間が出来ていくことはとってもいいことだ。唯、それが個々の人の見方や感じ方になってはいけないんじゃないか。新しい参加者にとっても居心地の良い場になっていく

ことにつながりは増えていくんじゃないですかね」(DA-71)

〈決めつけない役割分担〉

「毎回、ボランティアの担当する仕事も順番で変えている。接待の得意な人もいるし、受付の業務が得意な人、給仕を効率よくできる人などいるが、なるべくいろんな役割をやって貰いたい。今まで気づかなかった力や知恵を持っていることを知って貰いたいな」(DA-69)

〈経験や個性を活かす〉

「人それぞれいろんなバックグラウンドがありますよね、それを活かして欲しい。自分の持っている可能性を広げるきっかけになって貰いたい。生き方も変わるかもしれないでしょ」(DA-62)

《押し付けない利用》は、〈送迎の意味づけ〉の1つの下位カテゴリから構成された。今後の展望を語った。このコミュニティカフェの特色である送迎である。参加したくても出来ない高齢者を迎えに行く、最近来ていない高齢者の自宅に次回のちらしを入れる、参加者ときめ細かい関係性を持っているがゆえのことであると語っていた。

〈送迎の意味づけ〉

「利用者の意向を出来る限り優先したい。一人参加が難しい時は迎えに行く。きめ細かい関係性を築いてきたからこそ自宅のドアをノックできていると思っている。無理強いはしない」(DA-80)

研究 2：カフェメモリーとカフェだんだんについて一代表者の考え方

上位カテゴリーごとに結果を示す。インタビューの語りは、「」内に斜体太字で示す。また、下線 はカテゴリーを抽出するときのポイントを示す。

2-1 カフェメモリー代表者インタビュー調査結果から抽出されたカテゴリー概要

カフェメモリー代表者に対するインタビュー逐語録をデータ分析の結果、31 下位カテゴリーを、15 中位カテゴリー、7 上位カテゴリーが抽出された(表 5-資料 4)。

表 5-資料 4 カテゴリー一覧表 (カフェメモリー代表者インタビュー調査結果)

【上位カテゴリー】	《中位カテゴリー》	〈下位カテゴリー〉
【都市型コミュニティ】	《つながる》	〈孤立を防ぐ〉 〈連携役〉
	《頼りになる》	〈ネットワークの入り口〉
	《土着性の回復》	〈区民としての自覚〉 〈区民としての誇り〉 〈地域を愛する思い〉
【視点の多様化】	《「従」から「主」へ》	〈固定概念からの脱皮〉
	《一人一人を理解する》	〈逆デイサービス〉 〈自己理解〉 〈他者理解〉 〈関係理解〉
	《高揚感》	〈会話の促進〉 〈わくわく感〉
【思いを表現する大切さ】	《心地よさ》	〈心地よさ〉
	《思いを発信する》	〈理解してもらう〉 〈知ってもらう〉
【前向きな介護】	《思いを受信する》	〈理解する〉 〈知る〉
	《負担感から楽しみへ》	〈笑顔の復活〉
	《負担感から解放感へ》	〈意味づけの変化〉 〈個からの解放〉 〈資源の発見と活用〉
【地域に開かれた場づくり】	《出会いの場》	〈主体者として歩む〉 〈存在を知る〉
	《受け入れられる場》	〈あるがままを受け入れる〉 〈コミュニケーションを持つ〉
【生きる希望を育む】	《希望の再発見》	〈老いとの向き合い方〉 〈生きがい創出〉
	《主体的に取り組む持株会》	〈今のままでいつまでも〉 〈継続への努力〉 〈頑張りたい〉

① 【都市型コミュニティ】

【都市型コミュニティ】は、《つながる》、《頼りになる》、《土着性の回復》の3つの中位カテゴリーから抽出された。

《つながる》は、〈孤立を防ぐ〉、〈連携役〉の2つの下位カテゴリーから構成された。開設当初の思いを語った。地域とのつながりなく生活を送っていた単身世帯が多い。リタイア後の地域社会との連携役としてカフェの位置づけを考えたと言っていた。

〈孤立を防ぐ〉

「現役時代にはバリバリ仕事をこなしていた人ほど、定年後はポカンと穴が開いてしまうのではないのでしょうか、仕事上のつながりでの人間関係から地域で生活を送る人間関係にシフトするわけだから」(EA-29)

〈連携役〉

「生活に直結していく関係性になるわけですよ、戸惑いも抵抗もあるかもしれない。難しい局面

での橋渡しの役目、連携役の位置になる」(EA-32)

《頼りになる》は、〈ネットワークの入り口〉の1つの下位カテゴリから構成された。開設当初の思いを語った。いざ、行政や地域と関わりを持とうと望んでも、その手段さえ方法さえ把握出来ていない、一緒に糸口を見つけ、一緒に考えていくネットワークの入り口になる頼りになる存在となるカフェづくりを意識したと語った。

〈ネットワークの入り口〉

「新聞は読んでも区報は見ていないんですね、いざどこに相談したらいいんだろうって困ってしまう。そんな時にまずはここに聞いてみようと思って欲しい」(EA-12)

《土着性の回復》は、〈区民としての自覚〉、〈区民としての誇り〉、〈地域を愛する思い〉の3つの下位カテゴリから構成された。開設当初の思いを語った。大都会に居住していることを誇りに思って地域を愛して生きて欲しい、ここに生きていく覚悟を決めてここで生きることだと語っていた。

〈区民としての自覚〉

「ここに住んでいるんだ、って自覚を持って欲しいですね」(EA-4)

〈区民としての誇り〉

「東京のど真ん中で生きる、うらやむ都会で生きることを誇りに捉えて貰いたいです」(EA-15)

〈地域を愛する思い〉

「縁あってこの地に住んでいる。もっと愛着を持って欲しいですね。生まれ育った人もいるし、高齢になって施設入所してこの地に住む人もいるけど、住んでいる地を慈んでもらいたい。ここで生きてるんだって誇らしく思って貰いたい」(EA-8)

② 【視点の多様化】

【視点の多様化】は、《「従」から「主」へ》、《一人一人を理解する》の2つの中位カテゴリから抽出された。

《「従」から「主」へ》は、〈固定概念からの脱皮〉、〈逆デイサービス〉の2つの下位カテゴリから構成された。現状を語った。カフェは誰のためとした固定概念を抱かない。施設からカフェに出掛けることもある。従う人ではなく、参加者は誰もが主人公であると語っていた。

<固定概念からの脱皮 >

「何でも固定概念で考えやすい、だからこそ幅が広がらない。何が正しいとか間違っているとか考える前には柔軟な発想力を持つことも必要ですね」(EA-35)

<逆デイサービス >

「施設入所者もカフェに行く、逆デイサービスですよ。施設は行くものっていう発想がいけない。施設から外に向かうことがあっても何ら不都合はない」(EA-38)

《一人一人を理解する》は、〈自己理解〉、〈他者理解〉、〈関係理解〉の3つの下位カテゴリから構成された。現状を語った。一人一人は違う、一人一人を理解する。自分を理解して他者を理

解しようとする。そこにはお互いの関係性を理解しようとする思いを促すと語った。

〈自己理解〉

「人との関わりから自分を知ることは多い。思ってもみない考えをしている自分や感情を持って
いる自分がある。理解から受け止めていく」(EA-45)

〈他者理解〉

「人も理解していこうとする、他者を理解することで自分も理解されていく」(EA-48)

〈関係理解〉

「一人一人を知って理解する、つながりや関係性を理解していく。理解は深化していく」(EA-53)

③ 【接待を受ける】

【接待を受ける】は、《高揚感》、《心地よさ》の2つの中位カテゴリから抽出された。

《高揚感》は、〈会話の促進〉、〈わくわく感〉の2つの下位カテゴリから構成された。現状を語った。テーブルにお茶とお菓子があるだけで、茶菓を媒体に会話が始まり会話が促進していく。悩みごとや不安の束縛から解放されていく、身体の緊張が緩む。リラックス感を持つようになって客人としての高揚感からわくわくした思いを持つと語った。

〈会話の促進〉

「何もないテーブルを前に椅子に座っておしゃべりしましょうって言ってもなかなか無理な話です
よ。特に顔見知りでない人だったらなおさら。お茶やお菓子が仲立ちになってくれるんでしょ
う」(EA-3)

〈わくわく感〉

「知らず知らずに首や肩に力が入っている、緊張して生活しているんです。そんな力が入った時
間から解放される時間になる。ほっとできる場になるからこそ客人としての期待に胸躍るわくわ
く感が生まれていくってことです」(EA-18)

《心地よさ》は、〈心地よさ〉の1つの下位カテゴリから構成された。現状を語った。真心こめて接待する気持ちが高齢者の意識も高める。心地よい空間であり時間になると語った。

〈心地よさ〉

「言葉で上手に話せなかったり、お互いに気持ちを伝えることは難しい。真心をこめてご接待す
ることでその距離は縮むと思っています。自分を大切に思って貰える心地よい場にいることで、
肯定感を回復して持っている力を回復します」(EA-41)

④ 【思いを表現する大切さ】

【思いを表現する大切さ】は、《思いを発信する》、《思いを受信する》の2つの中位カテゴリから抽出された。

《思いを発信する》は、〈理解してもらおう〉、〈知ってもらおう〉の2つの下位カテゴリから構成された。現状を語った。自分の素直な思いを表現するには勇気がある。自分を理解してもらおうこと、知ってもらおうこと。思いを表現する難しさはあるものの、そこには自分を知って欲しいと願う思いであると語っていた。

<理解してもらおう >

「自分はそうじゃないんだ、違うんだって思うことって誰にでもあると思うんですよ。なかなか思うように伝わらない。自分を理解してもらおうためのエネルギーって大変です、そこにはつながりたいという気持ちがある」(EA-50)

<知ってもらおう >

「自分はこう人なんだって、知ってほしい。相手のことも知りたいからこそ思いを伝えようとするんじゃないかと思います」(EA-47)

《思いを受信する》は、〈理解する〉、〈知る〉の2つの下位カテゴリから構成された。現状を語った。思いを発信することと受信することは表裏の関係である。相手を知って理解したいと思うことで、自分も知って理解してもらいたいと思うと語った。

〈理解する〉

「相手を理解したいと願う気持ち、それは関係性を深めたいと思う気持ちの表れでもある」(EA-58)

〈知る〉

「相手を知りたいと思う気持ちが生まれる裏には、自分のことを知って欲しいという気持ちがある」(EA-61)

⑤ 【前向きな介護】

【前向きな介護】は、《負担感から楽しみへ》、《負担感から解放感へ》の2つの中位カテゴリから抽出された。

《負担感から楽しみへ》は、〈笑顔の復活〉、〈意味づけの変化〉の2つの下位カテゴリから構成された。今後の展望を語った。日々の介護をする家族や介護者にも参加する場になること。負担と思っていた介護を楽しみへ、今の胸のうちを語ることから気づきが生まれ、前向きな介護といった意味づけにも変化するのではないかと語っていた。

〈笑顔の復活〉

「声を出して笑うことって少ないですよ、喜怒哀楽といった気持ちの変化があってこそ辛いことも楽しいことも感じる。表出する機会がないと心身のバランスを崩す、適切な判断が出来なければ介護は出来ない。前向きな介護は笑うことからうまれると言っても過言ではないかな」(EA-55)

〈意味づけの変化〉

「介護は孤独を感じやすい。人に話すことで自分への気づきもあるだろう。そして柔軟性を持つ勇気も持てると考えている。固定された考え方から柔軟性を持つことで肯定的に意味づけは大きく変化していくんじゃないかな」(EA-64)

《負担感から解放感へ》は、〈個からの解放〉、〈資源の発見と活用〉の2つの下位カテゴリから構成された。今後の展望を語った。個で考えてきた介護を社会や地域といった広い意味で捉えていく。地域や社会資源を知って活用していくことで介護者も解放されていく介護する日常生活が安定することで前向きに介護を捉えていくと語った。

〈個からの解放〉

「家族介護者は自分がしなければ誰がするんだって気持ちになりやすい。考え方や捉え方が狭く
なっ*ていきやすい*ですよね。個から解放されて心身ともに解放していただきたい」(EA-66)

〈資源の発見と活用〉

「人とのつながりから地域や社会とのつながりの窓口が出来ていく。情報を得たりすることも重
要、その情報を活用することも重要。資源を見つけ出して活用していく」(EA-75)

⑥ 【地域に開かれた場づくり】

【地域に開かれた場づくり】は、《出会いの場》、《受け入れられる場》の2つの中位カテゴリー
から抽出された。

《出会いの場》は、〈主体者として歩む〉、〈存在を知る〉の2つの下位カテゴリーから構成され
た。今後の展望を語った。地域に開かれた場にするためにも多くの人が集う場になることが大事
である。そこには出会いがあり、自分の存在を知ってもらい、相手の存在を知るようになる。自
分の意思で考え歩いていくとも語った。

〈主体者として歩む〉

「地域に開かれた場にするためにも固定化しないように新しい風が吹いて流れができることが大
切だろう。たとえば人との出会い、出会いによってその場は変わる。出会うためには主体者とし
て歩む、自分の意思で率先して行動して考えていくこと」(EA-79)

《受け入れられる場》は、〈あるがままを受け入れる〉、〈コミュニケーションを持つ〉の2つの
下位カテゴリーから構成された。今後の展望を語った。鎧兜をつけて来る場ではない。自分や相
手のあるがままを受け入れるためにコミュニケーションを持つことは必須である。お互いを受け
入れられる場が心地よい場になり、地域で開かれた場になっていくと語っていた。

〈あるがままを受け入れる〉

「十人十色ってことですよ、それぞれ違う個人だってことが土台になくちゃ認めることなんて出
来ない。単に異質な存在しか映らない、居心地がよくないから広がっていかない。参加した思い
に素直に寄り添ってあるがままを受け入れていくことで次につながる」(EA-83)

〈コミュニケーションを持つ〉

「人の話は聞かないじゃいけない。お互いのキャッチボールがうまくできて初めてコミュニケー
ションはとれて認めていく」(EA-80)

⑦ 【生きる希望を育む】

【生きる希望を育む】は、《希望の再発見》、《主体的に取り組む将来像》の2つの中位カテゴリー
から抽出された。

《希望の再発見》は、〈老いとの向き合い方〉、〈生きがい創出〉の2つの下位カテゴリーから構
成された。今後の展望を語った。自分の暮らし、生き方から老いを見つめ直す。希望を再発見し
て生きる糧につなげていくと語っていた。

〈老いとの向き合い方〉

「若いマイナスばかりじゃない、多くの体験や経験から得た宝は多い。それは失敗もあるはずでしょ。向き合い方や捉え方次第でそこから自分がどう生きていきたいかプラス思考はうまれて次の望みが見えてくるように思う」(EA-9)

〈生きがい創出〉

「生きがいややりがいが希望につながっていくんじゃないでしょうか。だからこそ希望を見つけて、生きがいをつくりだす」(EA-86)

《主体的に取り組む将来像》は、〈今のままでいつまでも〉、〈継続への努力〉、〈頑張りたい〉の3つの下位カテゴリーから構成された。今後の展望を語った。自分から率先して将来を考えていく。人任せにしないで自分で決めていく。この地域で済み続けられるように、今持っている力を継続していく努力は惜しまずに自分の生き方に活かそうとしていると語っていた。

〈今のままでいつまでも〉

「この地域に住み続けたい思いは強いですね、決して贅沢していたりしてるわけじゃない、満足しているわけでもない。今の生活を続けて出来る限りいつまでも過ごしたい。ここは施設に隣接しています。施設入所者を見ると自分はこうなりたくないイメージが強い。でも目をそむけるのではなく、そこから自分の生き方を模索する。得るものはいっぱいあるはず、もしもの時は施設スタッフもいることで安心感を持って地域で暮らしていく契機にもなっていく」(EA-88)

〈継続へ努力〉

「自分でこれからを考える、そのために努力を重ねています。体力が低下しないように歩くようにしたり栄養バランスを考えたり。希望を持つことで欲を持つことなんでしょうね」(EA-95)

〈頑張りたい〉

「何ととっても頑張りたいと願っています、出来る限り自分のことは自分でやっていく」(EA-98)

2-2 カフェだんだん代表者インタビュー調査結果から抽出されたカテゴリー概要

カフェだんだん代表者に対するインタビュー逐語録をデータ分析の結果、34 下位カテゴリー、15 中位カテゴリー、7 上位カテゴリーが抽出された(表 6-資料 4)。

表 6-資料 4 カテゴリー一覧表 (カフェだんだん代表者インタビュー調査結果)

【上位カテゴリー】	《中位カテゴリー》	〈下位カテゴリー〉
【元気な高齢者を育む】	《生き方を模索する》	〈長年培ってきたリソース〉 〈出来ることの再認識〉
	《人の輪を広げる》	〈隣近所からもう一歩先へ〉 〈比べるから認める関係へ〉 〈心の視野を広げる〉
【相互扶助の意識化】	《風土としての構築》	〈気軽さ〉 〈身近かさ〉 〈シンプルさ〉
	《仲間意識の構築》	〈仲間づくり〉
【恥の文化】	《頼み、お願いすることへの否定的文化》	〈罪や恥としての意識〉 〈世間体や意地〉
	《我慢強さへの肯定的文化》	〈踏ん張る〉 〈自力こそ美德〉
【ふれあう場】	《心を通わせる》	〈気張らない〉 〈無理をしない〉 〈平等な立場〉
	《信頼関係を築く》	〈迎合しない〉 〈頼りになる〉
【持ってくるもの】	《茶菓の接待を受ける》	〈非日常感を抱く〉
	《得るもの》	〈他者との関係に変化をもたらす〉 〈希望をもたらす〉 〈新しい自分につながる〉
【乗り越えるもの】	《乗り越えるもの》	〈感謝する〉 〈苦しみや困難を過去形にする〉 〈学ぶ体験を重ねる〉
	《固定化しない雰囲気づくり》	〈新規利用者へのフォロー〉 〈多様なプログラムづくり〉
【継続における課題の認識】	《レット化しない柔軟性》	〈先入観を持たない〉 〈見ることの真実〉
	《活動意欲の向上を促す》	〈地域の現状を知り考える力を育む〉 〈地域への愛着〉
【後継者の育成】	《仕事としての取組み》	〈組織としての運営〉 〈将来性のある仕事〉 〈魅力のある仕事〉

① 【元気な高齢者を育む】

【元気な高齢者を育む】は、《生き方を模索する》、《人の輪を広げる》の2つの中位カテゴリーから抽出された。

《生き方を模索する》は、〈長年培ってきたリソース〉、〈出来ることの再認識〉の2つの下位カテゴリーから構成された。開設当初の思いを語った。元気な高齢者を育てていきたい。これからの自分の生き方をどう過ごしていこうか。元気なうちに何が出来るのか、こんなに出来ることのある役に立つと再認識をして欲しい。可能性を広げる手伝いをカフェの場が出来るのではないかと語っていた。

〈長年培ってきたリソース〉

「元気な高齢者は多い、元気なうちに人の輪を広げて、長年培ってきたリソースを活用して何が出来るかを自分で探して欲しいし、探せると能力を持っていると思っています。」(FA-2)

〈出来ることの再認識〉

「見落としている力は多い、気づいていない。出来ることって無限大かもしれない。この人だから出来ることや知っていること力を持っていることを再認識して欲しいですね」(FA-8)

《人の輪を広げる》は、〈隣近所からもう一歩先へ〉、〈比べるから認める関係へ〉、〈心の視野を広げる〉の3つの下位カテゴリーから構成された。開設当初の思いを語った。元気に生きていく

には人とのつながりが大事である。もう一步深まった関係性を育むことで生き方は変わると語っていた。

〈隣近所からもう一步先へ〉

「隣近所に誰がいるとかは知っていてももう一步踏み込んだつきあいが出来ない。顔見知りから挨拶、そして立ち話に持っていきたい」(FA-11)

〈比べるから認める関係へ〉

「小さい頃から比べることが習性なんですかね。人と違うことに抵抗を感じる、人と同じだと安心する。そうじゃなくて違いを認めることで自分も認めてもらえるんですよ」(FA-13)

〈心の視野を広げる〉

「固定した概念が強い、これはこうしなければいけないとかこうでなくてはいけないとか。そうじゃなくて柔軟な思考を持つこと、心の視野が広がっていく」(FA-17)

② 【相互扶助の意識化】

【相互扶助の意識化】は、《風土としての構築》、《仲間意識の構築》の2つの中位カテゴリーから抽出された。

《風土としての構築》は、〈気軽さ〉、〈身近さ〉、〈シンプルさ〉の3つの下位カテゴリーから構成された。開設当初の思いを語った。カフェが敷居の低いふらっと立ち寄れる関係でありたいと願った。相互に支え合い、支える気持ちであれば良いとも語っていた。誰にでも分かるシンプルなつながりをその風土となるように意識化して構築していくことと語った。

〈気軽さ〉

「ふらっと立ち寄れる関係であり場でありたい。敷居が低くないと気軽には来れない」(FA-23)

〈身近さ〉

「バスに乗ったりせずになるべく歩いてこれる身近な場所でありたいですよ、ここでつながった関係が必要なときに役に立たなかったら意味がないんじゃないですかね」(FA-19)

〈シンプルさ〉

「ごちゃごちゃ決まりごとを考えるんじゃない。支えて支え合う関係を意識する。シンプルだから分かりやすい、カフェが分かりにくい構造をしていけば足は遠のく」(FA-25)

《仲間意識の構築》は、〈仲間づくり〉の1つの下位カテゴリーから構成された。開設当初の思いを語った。同じ地域に居住する仲間意識を構築する。相互扶助の意識化を作っていくと語った。

〈仲間づくり〉

「ご近所さんなんですよ、助け合い支え合いの気持ちを意識していく。仲間をつくっていく」(FA-18)

③ 【恥の文化】

【恥の文化】は、《頼み、お願いすることへの否定的文化》、《我慢強さへの肯定的文化》の2つの中位カテゴリーから抽出された。

《頼み、お願いすることへの否定的文化》は、〈罪や恥としての意識〉、〈世間体や意地〉の2つの下位カテゴリーから構成された。現状を語った。生活全般に影響を与えている。頼んだりお願

いすることに否定的な意識は強い。自分の出来ないことは恥だとした文化が根強い。否定的な意識から世間体を気にして意地になっていると語った。

〈罪や恥としての意識〉

「そういった時代に生きてきたという背景もあるとは思いますが、頼むことは罪や恥になるからいけないみたいな固執感はまだまだ生活に影響を与えている」(FA-31)

〈世間体や意地〉

「カフェの隅で隠れるように話に來たり、知っている人の前では話もしない。世間から自分や家族がどう見られているか、評価されているかをとても気にして意地を張っている人も多い。話の中で自分の意思とは違って同調しているって思うこともありますね」(FA-33)

《我慢強さへの肯定的文化》は、〈踏ん張る〉、〈自力こそ美德〉の2つの下位カテゴリから構成された。現状を語った。生活全般に影響を与えている。無理してでも頑張ることが美德であるとした意識が強い。踏ん張る我慢強さが満足や安心感にもつながっているようだと言っていた。

〈踏ん張る〉

「踏ん張るって言葉どおりですよ。自分のことは自分で解決する。他人にお世話になるわけにはいかないと思う気持ちと借りをつくったという劣等感に近い気持ちなんじゃないかな」(FA-39)

〈自力こそ美德〉

「この年代ってことだとは思いますが、日本人は以外に多いんじゃないかしら。自分でやっているからこそ誉められるって美德だという気持ち」(FA-37)

④ 【ふれあう場】

【ふれあう場】は、《心を通わせる》、《信頼関係を築く》、《茶菓の接待を受ける》の3つの中位カテゴリから抽出された。

《心を通わせる》は、〈気張らない〉、〈無理をしない〉、〈平等な立場〉の3つの下位カテゴリから構成された。現状を語った。カフェは心を通わせる場となるように努めている。気張らずに自然体で過ごせるように、高齢者やボランティアにとってもカフェでは平等な立場でかかわりを持つ。身体にも気持ちにも無理をすることはあってほしくないと言っていた。

〈気張らない〉

「気張らないように、肩ひじ張らないように過ごしてほしいですね。自然な状態でいられるほっとしていられる場を心掛けています」(FA-40)

〈無理をしない〉

「無理してきてほしくない、来なければいけないとも思ってほしくない。気軽に行ってみようかなって気持ちを持ってもらえる場。無理しないで来ること初めて心が通っていく」(FA-46)

〈平等な立場〉

「心が通じ合うって難しい、一日で関係が出来るものでもない。平等な立場を持つってこと」(FA-49)

《信頼関係を築く》は、〈迎合しない〉、〈頼りになる〉の2つの下位カテゴリから抽出された。

現状を語った。自分の意見をきちんと持つことは信頼関係の基盤である。安心して話しが出来る関係が触れ合いの場となる大事な要素だと語っていた。

〈迎合しない〉

「その時だけでも共感してと思う気持ちでは信頼関係のつながりを結べない、言葉のトーンが一気に低くなる。信頼関係は築けない」(FA-52)

〈頼りになる〉

「この人には素直な思いを話せるってこと、色メガネじゃない正面からつながっていく」(FA-51)

《茶菓の接待を受ける》は、〈非日常感を抱く〉の1つの下位カテゴリから抽出された。現状を語った。茶菓は人と触れ合う場になる。茶菓が取り持つ働きは大きい。カップとソーサーで飲むコーヒーは、普段のコーヒーとは味はおろか感じ方も違うと語った。

〈非日常感を抱く〉

「自分で煎れたお茶や買ってきたお菓子とは違うんですよ、自分の好物のお菓子でなくてもいただくことが大事なんですよ、日常の生活の中にはない」(FA-58)

⑤ 【持ってくるもの】

【持ってくるもの】は、《得るもの》、《乗り越えるもの》の2つの中位カテゴリから抽出された。

《得るもの》は、〈他者との関係に変化をもたらす〉、〈希望をもたらす〉、〈新しい自分につながる〉の3つの下位カテゴリから構成された。現状を語った。カフェが参加者に持ってくるものは多い。他者との関係性への変化や希望、そして新しい思いを持った自分である。持ってくるものをどのように使いこなしていくかが重要であると語っていた。

〈他者との関係に変化をもたらす〉

「人との交流ですかね、コミュニケーションが作られていく。役割もうまれて自信が取り戻されていくんだと思うんです」(FA-66)

〈希望をもたらす〉

「生きがいが出る人もいるだろうし、そこから生きる支えが生まれる人もいる。明日への目標や希望といった前向きな生き方を後おしする」(FA-69)

〈新しい自分につながる〉

「一人で過ごしては自分がどんなことが出来なくてどんなことが出来るのかも分からない、自分の尺度でみてはいけない。ほっとできる場や関係が持てることで自分を客観視出来るようになっていくんじゃないでしょうかね、自己イメージを捉え直す」(FA-64)

《乗り越えるもの》は、〈感謝する〉、〈苦しみや困難を過去形にする〉、〈学ぶ体験を重ねる〉の3つの下位カテゴリから構成された。現状を語った。人生に感謝をすることで乗り越える力を授かる。会話や関わりから多くの学びがある、考え方も変わる、新しい視点を得ることで苦しみや困難から一歩違う捉え方も可能であると語っていた。

〈感謝する〉

「激動の時代の中で多くの経験をされてきている。同じ境遇を乗り越えてきた者だからこそつながりを再認識することで思える、それが感謝の気持ちになっている」(FA-73)

〈苦しみや困難を過去形にする〉

「苦しいことや困難だなんて自分の尺度で考えてしまうもの、でもおしゃべりしたり話を聞いていくことで新しい視点を生み出して次につなげていく」(FA-70)

〈学ぶ体験を重ねる〉

「教えてもらおうとか思って来ているわけではないんだと思いますよ。獲得していくきっかけになっているように思う、人や社会と接点を持つことで刺激にもなるし、得る知識も多い」(FA-75)

⑥ 【継続における課題の認識】

【継続における課題の認識】は、《固定化しない雰囲気づくり》、《レッテル化しない柔軟性》の2つの中位カテゴリから抽出された。

《固定化しない雰囲気づくり》は、〈新規利用者へのフォロー〉、〈多様なプログラムづくり〉の2つの下位カテゴリから構成された。今後の展望を語った。元気な高齢者が外出する目的の一つ位置づけて欲しい。新しい利用者が入りやすい環境づくりや継続している利用者に継続を促す魅力あるプログラムづくりに取り組んでいきたいと熱く語っていた。

〈新規利用者へのフォロー〉

「新しい利用者を増やしたいですね、新しい空気が入ることで変化は生まれる。そこには新しい参加者がカフェに来たい、これから行きたいと思える雰囲気を作っていく必要がある」(FA-81)

〈多様なプログラムづくり〉

「毎回、趣向を凝らしたプログラムを作っています。ただ、お茶飲んで終わりじゃ飽きてしまう。一番頭を悩ましているのが固定化しないカフェづくり、イベントや講習会とかです。旬の話題を提供していくことで魅力ある場になっていく」(FA-84)

《レッテル化しない柔軟性》は、〈先入観を持たない〉、〈見ることの真実〉の2つの下位カテゴリから構成された。今後の展望を語った。固定化やレッテル化した捉え方はしないように努力している。幅の広い柔軟な考え方や見方を持つこと、自分が聞いたこと見たことを大事にしていると語っていた。

〈先入観を持たない〉

「知りもしない先入観を持たないようにしています、一つの場面で得た人となりだけで先入観を持たない。笑っていることもあれば怒っていることもある、それが人間」(FA-89)

〈見ることの真実〉

「情報は入って来ますよ、カフェ参加している人であれば、その人の顔や姿を見て会話していく。それが間違いのない真実でしょ。素直な会話の出来る信頼関係が根底にはある」(FA-92)

⑦ 【後継者の育成】

【後継者の育成】は、《活動意欲の向上を促す》、《仕事としての取組み》の2つの中位カテゴリから抽出された。

《活動意欲の向上を促す》は、〈地域の現状を知り考える力を育む〉、〈地域への愛着〉の2つの下位カテゴリから構成された。今後の展望を語った。次につなげる世代を育てることが使命である。ここが完結ではないとも語っていた。魅力あるカフェとして活動する意欲が持てるような道筋をつけていくことが急務であると語った。

〈地域の現状を知り考える力を育む〉

「今、自分に関係の少ないことに興味を持つと言うことは難しい。現状を知ることが一番。そこから思考力につなげるようにするにはどういう施策があるのかを考えていくことだ」(FA-96)

〈地域への愛着〉

「一人一人が地域に愛着を持って行く。愛着は人との関係だけではない、人との関係と同じように大切な居住地域としてどうしたらもっと居心地の良い地域になれるかと思いや考えを持つことからなのかもしれない」(FA-101)

《仕事としての取組み》は、〈組織としての運営〉、〈将来性のある仕事〉、〈魅力のある仕事〉の3つの下位カテゴリから構成された。今後の展望を語った。ボランティアでの運営には限界がある。仕事として対価を得ることで向上心が湧く。仕事としての取組みには組織運営や将来性や魅力ある仕事でなくては人材は集まらないと語っていた。

〈組織としての運営〉

「仕事としての取組みには、組織運営が必要だ。組織運営になることで責任も出てくるだろう。短期のイベントではないということだ。長期的にカフェをどうしていくかを考えるためにも組織運営が必要である」(FA-109)

〈将来性のある仕事〉

「仕事として取り組むには長きにわたって取り組んで欲しいですね。自分の将来設計が描けなくては仕事として取り込むことは出来ないだろう」(FA-113)

〈魅力のある仕事〉

「仕事って魅力がなければ前向きに取り組もうとは思えないでしょう。率先して考えて行動していく魅力のある仕事にしなければ人材も集まらない」(FA-123)